

京都教育大学
国語教育研究会



目次

はじめに

小倉歩、山本舞、寺田守

.....

1

1 小学校編

一 スイミー（レオⅡレオニ）

青松久美子、原田泰輝、安場智恵、岡林瑞穂

.....

3

二 わすれられないおくりもの（スーザンⅡバーレイ）

大河隼也、神田達也、武村薫博

.....

10

三 あらしの夜に（木村裕一）

堀内厚志、松原綾子、和田詠理子

.....

17

四 手ぶくろを買いに（新美南吉）

小石川ゆき、森本弥徳、奥田晴香、平井恵理子

.....

25

五 きつねの窓（安房直子）

寺田守

.....

37

六 お母さんの木（大川悦生）

寺田守

.....

45

2 中学校編

七 トロッコ（芥川龍之介）

徳原唯、山田智美、四方田育恵

.....

9

八 ふろ場の散髪―続岳物語―（椎名誠）

小倉歩、靱山小奈津、森川みど梨、山本舞

.....

68

九 サークスの馬（安岡章太郎）

神田達也

.....

76

一〇 ゼブラ（ハイム・ポトク）その一

佐藤茉奈美
………

8 4

一一 ゼブラ（ハイム・ポトク）その二

小西大地、角知希、三輪美海、山本充
………

9 1

一二 デューク（江國香織）

浅野裕理、稲垣大輔、田中理絵、中西絵理子
………

9 9

3 高等学校編

一三 羅生門（芥川龍之介）

角張綾葉、金森明日香、須原旬生、高室慶助、安友郡詞
………

1 1 0

一四 山月記（中島敦）

佐藤茉奈美
………

1 1 9

一五 檸檬（梶井基次郎）

小倉歩、初山小奈津、森川みど梨、山本舞
………

1 2 6

おわりに

大河隼也、神田達也
………

1 3 4

はじめに

本書は小学校低学年から高等学校までの文学教材十五編の教材研究をまとめたものである。授業づくりの資料となることをねらいとした。教材研究の内容は、原則として次のような構成とした。

- 1 作者と作品について：作者の経歴、作品の背景について調べ、まとめた。
- 2 叙述について：作品の叙述を、一文を単位として引用し、読み取れる意味を記述した。
- 3 考察：担当者が解釈する中で抱いた主題、疑問点、人物像などの話題を考察した。

本書の特色は、「2叙述について」である。一文を単位として引用し、一文から読み取れる意味を紡ぎ出した。叙述の意味は、担当者の解釈に他ならない。「わすれられないおくりもの」（スーザン・バーレイ）の一文を解釈した例をあげる。強調部分が本文の引用である。

だから、前のように体がいうことをきかなくなっても、くよくよしたりしませんでした。

あなぐまは以前のように体が動かなくなっても、「心はのこる」ということが分かっていたので、死に対する恐怖心がなかった。「前のように体がいうことをきかなくなっても」に着目すると、元気だった以前のように体がいうことをきかない、と読める。他方で以前にも体がいうことをきかなかったことがあったが、その時は元気になったというふうに読むこともできない。はない。

担当者の中で、「前のように体がいうことをきかなくなっても」という部分を、元気だった以前のように体は思うように動かなくなった、と解釈するのか、以前にも体が言うことを聞かなくなったことがあるがその時は元気になった、と解釈するのか、議論になった。前者の解釈であろうと決着したのだが、「前のように」でなく「前のように」とあるので、この一文から後者の



小倉 歩、山本 舞、寺田 守



解釈を紡ぎ出す読者もいるかもしれない。そのように考えて両論併記とした。

文学を教材とした授業では、本文に書かれていることを根拠にして読み解くことが中心となる。とはいえ一文一文にしっかりと目を通す機会は必ずしも多くない。教材研究で細かなところまで目を通しておくことで、対話の生まれる授業を構想する手がかかりとなる。

本書は、京都教育大学教育学部の平成二十一・二十二年度演習科目「国語科教育演習c」受講者の成果をまとめたものである。明らかな誤りは寺田が修正したが、不備も残されている。御批評を仰いで、改善していきたい。素敵なイラストは、武村薫博、初山小奈津、森川みど梨の三人が描いた。本書が、国語科教育実践の糧となれば幸いである。



スイミー（レオIIレオニ）

青松 久美子、原田 泰輝、安場 智恵、岡林 瑞穂

一 作者・訳者、作品について

レオIIレオニは、一九一〇年にオランダのアムステルダムに生まれた。一九三一年、ノーラ・マッフィーと結婚。一九三九年に米国に亡命、イラストレーター、グラフィックデザイナーとして活躍。イタリアファシスト政権崩壊後はイタリアとアメリカを行き来する生活を続ける。

一九五九年、『Little Blue and Little Yellow』（あおくんときいろちゃん）を出版し、絵本作家としてデビュー。一九六三年、『Swimmy』を出版。一九七六年、イタリアの出版社から『平行植物』を出版。一九八一年、国際交流基金により、日本に一ヶ月間滞在する。一九九九年、一〇月一二日死去。

作品には、『Little Blue and Little Yellow』（あおくんときいろちゃん）、コールドコット賞次点の『Inch by Inch』（ひとあしひとあし）および、『スイミー』や『フレデリック』、『せかいいち おおきなうち』（児童図書スプリングフェスティバル賞）や、一九六四年最優秀作品としてアメリカ図書館協会の指定を受けた『Tico and the Golden Wings』（チコときんいろのつばさ）などがある。

谷川俊太郎は、一九三一年二月一五日生まれ。哲学者で

法政大学学長の谷川徹三を父として東京府東京市（東京都）杉並区に生まれ育つ。東京都立豊多摩高等学校卒。

一九四八年から詩作および発表を始める。一九五〇年には彼の父の知人であった三好達治の紹介によつて『文学界』に「ネロ他五編」が掲載される。一九六二年には処女詩集『二十億光年の孤独』を刊行。まもなく、詩作と並行して脚本や、歌の作詞、エッセイ、評論活動などを行うようになる。

一九六二年には「月火水木金土日のうた」で第四回日本レコード大賞作詞賞受賞。一九六四年からは映画制作に、一九六五年からは絵本の世界に進出した。一九六七年には初の訳書となる『あしながおじさん』（ジョン・ウエブスター）を出版。翻訳の分野では『スイミー』（レオIIレオニ）、『ピーナッツ』『マザー・グースのうた』など二〇〇七年現在までにおよそ五〇種類の著作を手がけている。一九七五年には『マザー・グースのうた』で日本翻訳文化賞を受賞した。

教科書に掲載されている作品としては『スイミー』（光村図書）の他に「アレクサンダとぜんまいねずみ」（教育出版）、「ぼくのだ！わたしのよ！」（学校図書）などがある。

スイミー（Swimmy）は、一九六三年に出版された。絵本の題名は主人公の黒い魚の名前である。日本語版は谷川俊太

郎が訳しており、日本語版の正式な題名は「スイミー——ちいさなちいさなかなのはなし」。光村図書出版が発行する小学校二年生用の国語教科書に一九七七年から載録されているグラフィック・アートを専門にしていたレオニの作品だけあって、その透明感あふれる絵は独特の雰囲気醸し出している。

「ちいさなちいさかなのはなし」という副題の通りスイミーの知恵が魅力となっている作品である。

二 叙述について

**広い 海の どこかに、小さな 魚の きょうだいたちが、
楽しく くらしていた。**

「広い」海と「小さな」魚の対比で、魚の小ささが際立つ。そして、「小さな魚」という表現から、この魚より大きな魚も海に住んでいることが予想できる。「どこかに」という場所が特定されない表現を加えることで、読者の場面想像を促す効果がある。「きょうだい」ではなく、「きょうだいたち」という表現から、二・三匹ではなく、数十匹以上の数のきょうだいということが分かる。「楽しく くらしていた。」と過去形にすることによって、ここから何か楽しいとは反対のことが起こるような雰囲気を感じられる。「きょうだい」や「くらす」と擬人表現を使うことで、読者が話の世界に入りやすく、臨場感を感じることができる。

みんな 赤いのに、一びきだけは、からす貝よりも まっくろ。

「のに」の逆接、「だけは」の限定の表現、「からす貝よりも」の比較より、数十の赤い魚の中で、「たった一匹だけ黒い」ということが強調されている。「からす貝よりも、まっくろな一びきがいた。」という表現よりも、本文のような書き方にすることで、「一匹」に強調の重きを置くことができる。

およぐのは、だれよりも はやかだった。名前は スイミー。

「名前はスイミー」と倒置することで、スイミーの名前と存在が強調される。また、スイミーの紹介と特徴が「からす貝よりもまっくろ」、「泳ぐのがだれよりもはやかだった」の二点より、この部分が物語の展開上の重要点であることが分かる。「はやすい」ではなくて「はやかだった」と過去で表現することより、「物語」としての色が強いことが分かる。これは他の部分の過去形表現からも感じられる。

ある 日、おそろしい まぐろが、おなかを すかせて すごい はやさで ミサイルみたいに つつこんできた。

楽しい日々を壊す幕開け。

「ミサイルみたいに」のところから、攻撃的で、死すら予感させるほどのまぐろの恐ろしさを表現している。また、「つつこんできた」の「きた」という表現から、「つつこんだ」よりも、まぐろが一方的に、故意に魚たちの方へ向かってきたことが分かり、更により動的で勢いを感じることができる。

一口で、まぐろは、小さな 赤い 魚たちを、一ぴきのこらずのみこんだ。

「一ぴきのこらず」から、まぐろに食べられた小さな赤い魚たちの数が大量だったことが分かる。「あんなにたくさんいたのに、その中で一ぴきも残らず食べられた」の気持ちである。また、「のみこんだ」という表現は、「食べられた」の表現よりも、その場面が本当に一瞬であったことを表している。また、儚さすら感じられる。



にげたのは スイミーだけ。

倒置することで、スイミーの存在が強調されている。文末が「だけ」で表現されていることにより、リズムがよく、また、スイミーがここを読者に読まれている今も海を逃げて泳いでいるような余韻が残る。

スイミーは およいだ、くらい 海の そこを。

倒置により、とにかくおよいだということが強調されている。後の、「にじ色のゼリーのような…」などの美しい描写に対して、ここで海が「くらい」と表現されているのは、スイミーの「さみしさ」と「こわさ」という気持ちから海がそううつっていたということが分かる。また「そこ」は深さを表しており、その悲しみの深さを読むことができ、さらに暗いイメージが分かる。

こわかった。さびしかった。とてもかなしかった。

一つずつ羅列することでどの気持ちも同時に感じ、また同じくらい強いことがわかる。また「とても」より、「悲しみ」がその中でも一番強いことが分かる。

けれど、海には、すばらしい ものが いっぱいあった。

暗い気持ちを紛らわせてくれるものがいっぱいあった。

おもしろいものを見る たびに、 スイミーは、 だんだん 元気を とりもどした。

おもしろいもの＝興味を持つものである。「見るたびに」という表現より、おもしろいものが複数あることの他に、海の中を泳いでいく動的な部分が表現されている。

にじ色の ゼリーのよう な くらげ。 水中ブルドーザー みたいな いせえび。

光が反射してきれいな海の底である。いせえびのピンク色。

見た ことも ない 魚たち。 見えない 糸で ひっぱられている。

糸でひっぱられているかのように、そろって同じ方向へ泳いでいるのだろうか？

ドロップみたいな 岩から 生えている、こんぶや わか

めの林。

うなぎ。顔を見るころには、しつぽをわすれているほど長い。

そして風にゆれる桃いろのやしの木みたいないそぎんちやく。

暗い場面とはうってかわってカラフルな明るい場面である。色を感じさせる。それとともにスイミーの気持ちも明るく元気になっていくことが分かる。また、名詞を独立させて述べる表現より、取り上げられている生物が印象的になる。

そのとき、岩かげにスイミーは見つけた、スイミーのとそっくりの、小さな魚のきょうだいたちを。

スイミーは自分だけが取り残され、とても悲しかったが、海の中の素晴らしいものを見るたびに元氣を取り戻したそのとき、スイミーのきょうだいたちにそっくりのきょうだいたちを見つけ、うれしい気持ちでいっぱいになった。

出てこいよ。みんなであそぼう。

みんなを見つけたうれしさと、おもしろいものをみんなにも見てもらいたいという思いで誘っている。

いつまでもそこにじっとしているわけには、いけないよ。

小さな魚のきょうだいたちは、大きな魚におびえて動けないでいるが、スイミーは何とかこの状況を打破しなければならぬと思う、考えをめぐらしている。

スイミーは考えた。いろいろ考えた。うんと考えた。

ただ「考えた」とするのではなく、どうすればまたみんなで楽しく暮らすことができるのか、大きな魚を追い出すためにはどうすればよいのか、スイミーがいろいろな策を悩み、考えをめぐらせた様子がうかがえる。

それから、とつぜん、スイミーはさげんだ。

考えをめぐらせている途中で、ひらめいた。

みんなが、一ぴきの大きな魚みたいに泳げるようになったとき、スイミーは言った。

スイミーが教え、泳げるようになるまでには、時間がかかったといえるだろう。

ぼくが、目になろう。

スイミーがこのように考えたのはどの段階か。みんなが一ぴきの大きな魚みたいに泳げるようになったときなのか。しかし、「なったとき」にスイミーは即座に言っていることから、おそらくこのように考えたのは、大きな魚のふりをして泳ぐとひらめいたときではないかと思われる。

あさのつめたい水の中を、ひるのかがやく光の中を、みんなはおよぎ、大きな魚をおい出した。

みんなで大きな魚になり、海を泳ぎまわって、やっと大きな魚を追い出すことができた。追い出すのに時間がかかった

のかもしれないが、描写から、泳ぐことを楽しむ生き生きした様子もうかがえる。

三 考察

(ア) 目的を達成するために考えること

絵本「スイミー」の正式なタイトルは「スイミーーちいさなかしこいさかなのはなし」となっている。このことからわかるように、「スイミー」はスイミーの知恵が魅力となっている物語である。この物語では、スイミーと小さな魚のきょうだいが集まって協力し合うことで、大きなまぐろを追い出している。

では、ここで、スイミーのかしこさはどういった点にあるのかを考えてい。それは、まぐろを追い出す方法を思いついた、という点ではなく、まぐろを追い出すためにどうすれば良いかを考えたという点だと考える。

注目するのは、

小さな赤い魚たちは、答えた。

「だめだよ。大きな魚に食べられてしまうよ。」

「だけど、いつまでもそこにじっとしているわけにはいかな

いよ。なんとか考えなくちゃ。」

スイミーは考えた。いろいろ考えた。うんと考えた。

という場面である。小さな魚たちは、大きな魚に食べられて

しまわないために岩かげに隠れるしか方法がないと思っている。食べられたくない、つまり、死にたくないという思いからである。一方、スイミーは、まぐろから隠れる以外の方法を考えている。スイミーは広い海で、「小さな魚のきょうだいたち」と「楽しくくらしていた」のであり、また、この前に海の「すばらしい」、「元氣」の出るものを見ている。スイミーはそれらのおもしろいものをみんなで楽しみたいということが目的となっている。スイミーは、ただ生きるだけでなく、楽しく生きるために、考えたのである。

それがみんなで協力して大きな魚になるという方法なのだが、ここで、スイミーはすぐこの方法を見つけたのではなく、「考えた」、「いろいろ考えた」、「うんと考えた」結果、これを見つける。「いろいろ考えた」のだから、他の方法も思いついたと考えられる。しかし、これからみんな楽しく生きるためには、まぐろを追い出す必要がある、その方法を思いつくために「うんと考えた」のだと考えられる。

「スイミー」では、目的を達成するために、様々な方法を考え、一番良い方法を選ぶ力がかしこさであるということを伝えている。

(イ) 絵本のスイミーと教科書のスイミー

スイミーは元は絵本の作品である。長年教科書教材として親しまれてきた「スイミー」と絵本の「スイミー」とは本来同一のものでなくてはならない。しかし、この両者を見比べてみるといくらか差異が見られる。

(1) 漢字、仮名の使い分け

たとえば冒頭の「広い海のどこかに、小さな魚のきょうだいたちが、楽しくくらししていた。」は、絵本では「ひろいうみのどこかに、ちいさなきょうだいたちが、たのしくくらししていた。」と表記されている。また、貝、名前、一、口なども絵本では全て平仮名表記となっている。絵本では「一ぴき」という箇所以外、漢字表記はない。これは、絵本が児童文学としての特性を、教科書が教材としての特性をそれぞれ持っているからではないかと思う。児童文学である「スイミー」は対象年齢を限定せず、多くの子どもに読んでもらうことが重要である。しかし、教科書の「スイミー」はそうではない。対象は小学二年生で、小学二年生の学習材となることが重要である。そのためには既習漢字や、二年生で習うべき新出漢字は漢字で表記せねばならない。

(2) 接続詞の省略

「みんな赤いのに、一ぴきだけは、からす貝よりもまっくろ。およぐのは、だれよりもはやかっただ。」

スイミーが好きな人はこの部分を読んで違和感を感じたことがあるかもしれない。教科書では「およぐのは」の前の「でも」が省略されているのである。これも教材化する上での改変かと思われる。「でも」という逆接を表す接続詞が用いられているが、魚の色と泳ぐ速さとの間に明確な関連性があるとは思えない。従って削除したのではないかと思われる。

(3) 語句の補充

今度は逆に補充されている箇所を目を向けてみる。教科書の「見えない糸でひっぱられている。」「岩から生えている」「しっぽをわすれているほど」は、それぞれ絵本では「みえないいとでひっぱられてる。」「いわからはえてる」「しっぽをわすれてるほど」となっており、「い」がそれぞれ補充されている。これは文法上の問題であり、教材である以上話し言葉から書き言葉に変換したためであろう。

(4) 体言止めを倒置法に

前述の語句の補充と重なるのであるが、教科書に「小さな魚のきょうだいたちを。」とある。しかし絵本では、「ちいさなきょうだいたち。」となっている。確かに助詞「を」があるほうが、スイミーが何を見つけたのか、読解するにあたって、非常にわかりやすいと思われる。読解の上では倒置法も必要かもしれない。しかし、この部分が「そのとき、岩かげに、スイミーは、スイミーのとそっくりの小さな魚のきょうだいたちを見つけた。」とするとどうであろうか。一文が長く、わかりにくい上に、世界観すら邪魔をするような印象を受けないだろうか。したがって、ここでは助詞「を」を補充するにとどまったのではないかと思われる。

以上が、絵本の「スイミー」を教材化した際の主な変更点である。この他、ページを繰る向きの違いから、両者の絵は、すべてが反転している。

(ウ) 修辭法による効果

スイミーには、体言止め、倒置法、比喩など様々な修辭法が駆使されている。それらの効果は、強調の表現でもあるだろうが、何よりリズムが意識された文章となっており、読者は物語の初めから、スイミーを見るところというよりもむしろ、スイミーとともに海を泳いでいくかのような臨場感を感じるこ
とができる。体言止めの効果は、並んでいるものが順々に目に入っていく感じがする。全体的に、動的な雰囲気、時間の流れがはつきりと感じられるのは、羅列や箇条書きのような文章からであると思う。比喩は、使われている言葉から、「スイミー」に鮮やかな色彩や透明感を醸し出す効果があると思われる。

スイミー



わすれられないおくりもの（スーザン・バーレイ）

大河 隼也、神田 達也、武村 薫博



一 作者と作品について

スーザン・バーレイは一九六一年イギリスのブラックプールで生まれ、現在もイラストレーターとして活躍している。「わすれられないおくりもの（Badger's Parting Gift）」はマンチェスターポリテクニク（現在のマンチェスター・メトロポリタン大学）という美術学校在学中に卒業制作として書いた彼女の現在唯一の文学作品である。このデビュー作は、一九八五年新人作家による最良の本に贈られるマザーグース賞やフランス財団賞、ドイツのヴィルヘルム・ハウフ賞を受賞した。日本では、一九八六年に初版が出て、一九八七年には低学年の課題図書に指定された。

本作品の主人公でもあるアナグマはイギリスではなじみの深い動物であり、バーレイは長年電力会社のCMに登場するアナグマの絵を担当している。また日本語訳もされているハーウィン・オラムという絵本作家の作品『アナグマのもちよりパーティー（Badger's Party）』『アナグマさんはごきげんななめ（Badger's Bad Mood）』をはじめとしたアナグマシリーズの絵も担当している。これらの作品は『わすれられないおくりもの』の続編となっている。

二 叙述について

あなぐまは、かしこくて、いつもみんなにたよりにされています。

「かしこくて」という言葉から、あなぐまは利口・知識が豊富・頭の回転が良いなどということが考えられる。また、「いつもみんなにたよりにされています」という表現から、周りのみんなは困ったことがあればいつもあなぐまに相談していることが分かる。

こまっている友だちは、だれでも、きっと助けてあげるので。

「きっと」という表現は文のつなぎ方としては不自然に感じる。この「きっと」には筆者の予測の意味が含まれており、「この先困った友達がいたら、あなぐまは必ず助けてあげるだろう」といった意味の一文になるだろう。また、「きっと」ということは裏を返すと、もしかするとあなぐまは相談してきた友達を助けない、もしくは助けられないことがあるという可能性があることを示している。つまり、あなぐまは決して万能ではないという意味にとることができる。

それに、大変年をとっていて、知らないことはないというぐらい、もの知りでした。

あなぐまは知識が豊富ということが分かる。二重否定を用いることで、あなぐまが物知りということを強調している。ただ、「知らないこ

とはないというぐらい」という文脈から、知らないこともある可能性があることが分かる。友だちを助けられない理由はこれなのだろうか。

あなぐまは、自分の年だと、死ぬのがそう遠くはないことも、知っていました。

周りの者たちが、自分の年齢くらいで死んでいったのを見てきたのだろう。

死んで体がなくなっても、心はのこることを知っていたからです。

あなぐまが死ぬことを恐れない理由。「心はのこる」とあるが、心は形あるものとして残ることはない。おそらく、あなぐまの心の中に死んでいった者たちが生き続けているということであろう。

だから、前のように体がいうことをきかなくなっても、くよくよしたりしませんでした。

あなぐまは以前のように体が動かなくなっても、「心はのこる」ということが分かっていたので、死に対する恐怖心がなかった。「前のように体がいうことをきかなくなっても」に着目すると、元氣だった以前のように体がいうことをきかない、と読める。他方で以前にも体がいうことをきかなかったことがあったが、その時は元氣になったというふうに読むこともできないはない。

ただ、あとにのこしていく友だちのことが気がかりで、自分がいつか長いトンネルの向こうに行ってしまうても、あまり悲しまないように、と言っていました。

自分のことよりも、周りの友達のことを心配しているところに、あなぐまの優しさを垣間見ることができると言える。「自分がいつか長いトンネルの向こうに行つて」しまうというのは、あなぐまの死を指しているのだろう。「あまり悲しまないように」と周りの友達に言っていることから、あなぐまは自分がいなくなること、困った時に頼れる者がいなくなることも、自分がいなくなること、友だちの精神的な面をより心配している。

その日は、とくに年をとったような気がしました。

年をとったあなぐまの体には丘に登るといふ行為がかなり堪えたのだろう。しかし、「とくに」に着目すると、これは死の予兆の表現として捉えられ、「とくに年をとったような気」がしたのは単に疲れただけではないということが読み取れる。

あと一度だけでも、みんなといっしょに走れたらと思いましたが、あなぐまの足では、もうむりなことです。

体が動くころはみんなとかけっこをして遊んでいたのだろう。しかし、今となつては無理なことで、それを残念に思うあなぐまの気持ちが間接的に表れている。特に「あと一度だけでも」という表現から、死が近づいているあなぐまにとって、「みんなと一緒に走りたい」という強い思いが込められた一文である。

それでも、友だちの楽しそうな様子をながめているうちに、自分も幸せな気持ちになりました。

友達的笑顔があなぐまの気持ちを前向きにしている。

月におやすみを言って、カーテンをしめました。それから、地下の部屋にゆっくり下りて行きました。

誰かにはなく「月におやすみを言って」いることから、あなぐまは一人暮らしということが分かる。

そこでは、だんろがもえていました。

暖炉に火がついているということは、この日の夜が寒かったということが分かる。また、暖炉の火があなぐまの心の温かさを表現しているようにも感じる。

おどろいたことに、あなぐまは走っているのです。

友達と一緒に走りたいと思っていたあなぐまが、年老いた自分が走っていることにびっくりしている。

体はすばやく動かし、トンネルを行けば行くほど、どんどん速く走れます。

トンネルの向こうに行くことはあなぐまにとって死を意味している。そのトンネルをスピードを上げながら進んでいくことはあなぐまがどんどん死に近づいていることを表している。

まるで、体が、なくなってしまったようなのです。

体がなくなることとは、自分の体が不自由になったことを残念に思っていたあなぐまにとって、不自由な身から解放されることを意味している。この時あなぐまはとても心地よい気分になっていると考えられる。

る。

あなぐまは、すっかり自由になったと感じました。

体が思うように動かなかったあなぐまにとって、今の状態は心地が良いものである。「トンネルを進む＝死」ということが分かっていたのに、あなぐまはトンネルを走った。もしかすると、あなぐまはこの自由（＝死）を自ら望んでいたのかもしれないという印象を与える。

あなぐまが、いつものように、おはようを言いに来てくれないからです。

あなぐまはどんな時でも毎朝みんなに挨拶をしに行っていたことがわかる。友達の頭にはあなぐまが「自分がいつか」と言っていたことが脳裏をよぎり、心配して集まってきたのかもしれない。

長いトンネルの むこうに行くよ さようなら あなぐまより

このタイミングでこういった手紙を書いていたあなぐまは、もしかすると、自分がこの日に死ぬということを知っていたのかもしれない。

森のみんなは、あなぐまをとってもあいしていましたから、悲しまない者はいませんでした。

二重否定で森の全員がひどく悲しんだことを強調している。

なかでも、もぐらは、やりきれないほど悲しくなりました。

「なかでも」、「やりきれない」という表現から、あなぐまの死に対して一番悲しんでいたのがもぐらであり、もぐらはあなぐまとても

親密な関係にあったことが予想される。

ベッドの中で、もぐらは、あなぐまのことばかり考えていました。

あなぐまの死がもぐらにとつてどれだけ大きなことだったかということをも物語っている。

なみだは、あとからあとからほおをつたい、もうふをぐつしよりぬらします。

「あとからあとから」や「もうふをぐつしより」という表現から、もぐらが流した涙が相当の量だったことが分かる。また、「ぬらします」というふうに現在形にすることで、もぐらの涙が止まらない様子がより臨場感を増して伝わる。

冬が始まったのです。

冬という寒さの厳しい季節と、あなぐまの死に対する森のみんなの悲しみを重ね合わせている。

これからのさむいきせつ、みんなをあたたくく守ってくれる家の上にも、雪はふりつもりました。

「みんなをあたたくく守ってくれる家」は、今までみんなの頼りとなる存在であったあなぐまと重ね合わせることができる。その家に雪が積もるという表現は、あなぐまの死をさみしく表現していると考えられる。



けれども、心の中の悲しみは、おおいかくしてはくれません。

「心の中の悲しみ」とはもちろんあなぐまの死に対する森のみんなの悲しみであり、みんながあなぐまの死を引きずっている様子を表現している。

あなぐまは、いつでも、そばにいてくれたのに――

みんながあなぐまを頼りにしていたことがよく分かる。「」を入れ、後に続く文を隠すことで、あなぐまのいなくなった今、森のみんなが様々な思いを抱いていることが想像できる。

みんなは、今どうしていいか、とほうにくれていたのです。

困った時はいつでも助けてくれたあなぐまがいなくなった今、これから問題が生じた時はどうすればいいのか、ということを考えて、森のみんなは不安になっている。

あなぐまは、かえるが一人でりっぱにすべれるようになるまで、ずっとやさしく、そばについてくれたのです。

「やさしく」という表現がなくても、あなぐまの優しさが十分伝わるが、「やさしく」を入れることで、あなぐまが嫌な顔ひとつせず、最後までかえるを励ましていた様子が想像でき、優しい心の持ち主だったことがより伝わる。

あなぐまは、一人一人に、わかれたあとでもたからものとなるような、ちえやくふうをのこしてくれたのです。

「たからものとなるような」という表現から、あなぐまが教えてく

れたことが森のみんなにとって、どれだけ大切な知恵や工夫かということがよく分かる。また、「あなぐまとの大切な思い出」という意味でこのような表現を用いたとも考えられる。

みんなは、それで、たがいに助け合うこともできました。

あなぐまの残してくれた宝物を持ち合うことで、困った時も互いに助け合うことができた。互いに助け合うことを学び、あなぐまがいなことへの不安も消えている。

最後の雪が消えたころ、あなぐまのこしてくれたもののゆたかさで、みんなの悲しみも、消えていました。

雪解けが、森のみんなの心の悲しみが晴れた様子を効果的に表現している。また、この「もののゆたかさ」とは、森のみんなが助け合って生きていけるようにと、あなぐまがみんなに伝えた知恵や工夫を表している。

あなぐまの話が出るたびに、だれかがいつも、楽しい思い出を、はなすことができるようになったのです。

「はなすことができるようになったのです。」とあるので、あなぐまの死後、最初の頃はあなぐまの死を悲しむ話をしていたが、今では楽しい思い出を話すようになり、森のみんなの心が晴れたことが分かる。

もぐらは、あなぐまのこしてくれた、おくりもののお礼が言いたくなりました。

「あなぐまのこしてくれた、おくりもの」はあなぐまがみんなに

教えた知恵や工夫と考えることができるが、「あなぐまのこしてくれた、おくりもの」によって森のみんなは互いに助け合うことができるようになった。このことから、「あなぐまのこしてくれた、おくりもの」を「助け合うことの大切さ」と捉えることもできる。

もぐらは、なんだか、そばであなぐまが、聞いていてくれるような気がしました。

あなぐまの体はなくなってしまったが、あなぐまは森のみんなの心の中に生き続けている。あなぐまの言っていた「死んで体がなくなっても、心はのこる」とは生きている者の心の中に残るという意味であったと解釈できる。しかし、単にあなぐまという存在だけが森のみんなの心の中に生き続けているのではなく、「あなぐまのこしてくれたもののゆたかさ」、「あなぐまのこしてくれた、おくりもの」といった言葉で表現されていた「生きるための知恵や工夫」もしっかりと森のみんなの心に残っている、という意味も含んだ一文である。

そうですねーきっとあなぐまにー聞こえたにちがいありませんよね。

著者が読者に語りかけている。

三 考察

この物語の特徴は、子どもたちに読み易い様に様々な工夫がなされていることである。まず物語の流れが一貫していたり、視点が統一されていたりすること。そして一文の長さがやや長い所があるものの、書かれている内容自体は必要最低限のものであり、物語をスムーズに

読み進めることが出来る。長いトンネルといった、死をほのめかす様な少々難しい表現も、アナグマの死のことを書いた後に書いたり、そこで理解できなくとも後にハッキリと死を描くことで、それが何を表現していたのかが理解しやすくなっている。

また、舞台における季節の変化も物語を読み易くする為の工夫である。秋から始まり、冬、春と舞台の季節は変わっていく。季節そのものが表すイメージとして、秋は充実しているもののこれから冬を迎えるという不安がある。冬は悲しみや寂しさに包まれる厳しい期間であるが春に向けての準備。そして春は冬を乗り越えた、新たなスタートへの喜びが表現される。この物語では、秋は友達のかえるやモグラの遊ぶ様子を見るアナグマの楽しさと、アナグマの死の予兆が描かれている。冬はアナグマの死と、それに対する周囲の動物の悲しみと心の整理。春はアナグマの死を乗り越えた周囲の動物の新しい生活のスタートが描かれている。この様に、この物語は季節そのものが表す雰囲気と、物語の内容、動物たちの感情が密接にリンクしている。その為、子どもたちも直感的に物語の内容を理解、把握することが出来るだろう。

この物語のテーマのひとつに、死の受け入れ方、がある。アナグマは自分の年だと、死ぬのがそう遠くはないことを知っていたながらも、死ぬことを恐れてはいなかったり、以前より体が動かなくなってもよくよしたりはしていない。自分が死んだ後の周囲の動物の心配はしているが、自分自身の死に対しては悲観的にならず、けれどもモグラとかえるの追いかけて丘へ上ったりと、生きているなら楽しもうというスタンスであることが伺える。そしていつも通りの生活をし、皆への手紙を書いてから眠り、素晴らしい夢を見ながら安らかに

死を迎えた。アナグマ自身は自分の死を迎え入れ、安らかに死んでいったが、周囲の動物たちはそうはいかなかった。皆悲しみ、そして途方にくれてしまう。長い冬が過ぎ、春になったところで皆はアナグマの思い出を語り合い、アナグマの残してくれたものを確認することによって、アナグマの死を受け入れることが出来た。人にする動物にしろ、死に触れる機会の少ない今、死は本人の問題だけではなく、周囲にも影響を及ぼすものであるということを子どもたちが学ぶ良い教材にこの物語はなるだろう。

アナグマが残してくれたものを確認することで動物たちはアナグマの死を受け入れることが出来たが、文中に「残してくれたもののゆたかさ」とある。この豊かさ、とは何であるか。勿論、多くのアナグマとの思い出の多さや、残してくれた知恵や工夫の多さのことも含めていのであるが、それだけではないように思われる。アナグマとの思い出も、教えてくれた知恵や工夫も、モグラには切り絵、カエルにはスケート、きつねにネクタイ、ウサギの奥さんには料理と、それぞれの動物固有のものである。その動物一人だけのものであった思い出、知恵や工夫が皆で共有されることになった。そして自分の知らないことを教わり、自分の知っていることを他の動物に教えることで動物全体の暮らしが良くなった。この皆で共有し、暮らしが良くなる為の話し合い、助け合う共有が、アナグマの残してくれたものの豊かさであるように私は思う。そしてその豊かさを日常で目にするたびに皆はアナグマを思い出す。この豊かさこそがアナグマの言う「心は残る」の心ということだろう。

本作品には続編がある。「わすれられないおくりもの」の過去が描かれた二つの物語、「アナグマのもちよりパーティー」と、「アナグマさん

は「ごきげんななめ」である。前者ではモグラがアナグマに助けてもらうという話で、後者はアナグマをモグラが元氣付けるといふ話である。この話を紹介することで、子どもたちはよりいっそうこの物語を理解することが出来るだろう。



あらしの夜に（木村裕二）

一 作者と作品について

東京都生まれ。多摩美術大学卒業。造形教育の指導、テレビ児童番組への出演などを経て、絵本・童話作家となる。絵本・童話創作に加え、戯曲やコミックの原作、小説など多方面で活動。五〇〇冊以上の著書を持ち、海外で翻訳出版されているものも多い。中でも『「あいさつあそび」に始まる「あかちゃんのアソビえほん」シリーズは累計九〇〇万部のベストセラーとなった。

代表作『あらしのよるに』で、講談社出版文化賞絵本賞、産経児童出版文化賞、JR賞受賞。舞台脚本「あらしのよるに」で斎田喬戯曲賞、松尾芸能財団研修奨励賞、厚生大臣賞、東京都優秀児童演劇優秀賞を受賞、同作は二〇〇五年には映画化もされた（こちらの脚本も自身が担当）。二〇〇五年度より東京純心女子大学客員教授を勤めている。

「あらしのよるに」は、一九九四年に講談社から発行された絵本である。教科書で取り上げられたのは全七シリーズのうちの第一作目。ある嵐の夜、小屋で偶然出会ったヤギとオカミはお互いが自分と同じ動物だと思い込む。二人は勘違いしたまま話を続け、やがて不思議な友情が芽生えていく、

堀内 厚志、松原 綾子、和田 詠理子

という内容の物語である。当初は第一作のみで完結する予定であったが、その好評を受けてシリーズ化され、第六作「ふぶきのあした」までが制作され、一度は完結した。しかしその後も人気はとどまることを知らず、特別編「しろいやみのはてで」が制作され、さらに映画化を受けて、第六作の続編にして再びの完結編「まんげつのよるに」が制作され、ようやくシリーズの完結をみた。挿絵は全シリーズあべ弘士（あべひろし）が担当している。

シリーズの販売部数累計は三〇〇万部を超え、おとなも子どもも楽しめる作品として初版から十年以上経った現在も人々に愛されている作品である。

二 叙述について

ごうごうとたたきつけてきた。

主語を省略することで、突然物語が始まった印象を与える。また「何が？」と主語を読者に考えさせることで、早く先を読み進めようという気にさせる。

それは「雨」というより、おそいかる水のつぶたちだ。



雨（＝無生物）というより、水のつぶたち（＝敵意を持つて向かってくる生物）のように表している。

あれくるった夜のあらしは、そのつぶたちを、ちつぽけなヤギの体に、右から左から、力まかせにぶつけてくる。

「あれた」ではなく「あれくるった」、「ちいさな」ではなく「ちつぽけな」とあらしの激しさやヤギの弱さを強調的に表すことで、ヤギにとつていかに過酷な状況かを表している。「右から左から」より、あれくるつてくるあらしなので、あらゆる方向から雨がぶつかってきている。また「ぶつけてくる」と擬人法で雨つぶの敵意を表している。

白いヤギは、やつとの思いでおかをすべり下り、こわれかけた小さな小屋にもぐりこんだ。

「やつとの思いで」から、いかにあらしが激しく、ヤギにとつて過酷なものかを示す。また「かけ下り」ではなく「すべり下り」であることから相当急いでいる様子が伝わる。さらに「小屋」ではなく「小さな小屋」と二重に「小」の字を重ねることで、小屋の小ささを強調している。

暗やみの中で、ヤギは体を休め、じっと、あらしのやむのをまつ。

「暗やみの中で」とあるので、小屋に明かりはない。「体を休め」とあるが、似た漢字で子どもは読み間違えやすいだろう。「まつ」と現在形で臨場感を与え次の文につなげる。

ガタン！

「！」で昔の大きさを強調。本文全体で一度しか現れない。この後に続くオオカミの登場シーンの重要さを感じる。

だれかが小屋の中に入ってくる。

「入ってくる」と現在形が続く。緊張感が感じられる。

ヤギはじっと身をひそめ、耳をそばだてた。

「じっと身をひそめ」からはヤギの緊張感や警戒心、「耳をそばだてた」からは、相手の正体を自分の存在に気付かれるよりも先に把握しようとするヤギの様子が読み取れる。

コツン、ズズ、コツン、ズズー。

二度目に「ズズー」とあることから何かを引きずっているようすを予想できる。後の場面への伏線。

一步、一步、かたいものがゆかをたたいてやってくる。

「一步、一步、」と繰り返しかつ合間に句読点を入れることで、徐々に近づいてくる様子を表している。また「かたいもの」「たたいてやってくる」と足で床を踏んでいるとはつきり言わないことで後の場面につながる伏線となっている。

なあんだ、それならヤギにちがいない。

「なあんだ」と警戒心を解き、「ちがいない」と相手の存在

をやギだと断定している。強く思いこんでいる様子が読み取れる。

「すごいあらしですね。」

初対面の相手に失礼のないように丁寧語を使っている。

「え？おや、こいつはひつれい、ハア、ハア、ハア、しゃした。まっ暗で、ちつとも、ハア、ハア、気がつきやせんで。」

話し言葉の合間に「ハア、ハア、」と挿入され、オオカミの息が切れている様子を読み取れる。「しゃした」「やせんで」などと話し言葉に特徴を持たせることで、会話が中心となつて進むこの話でヤギの口調と差別化している。

あいてはちよつとおどろいて、あらい息で答える。

「ちよつとおどろいて」とあり、誰かがすでにいたことに驚いたが、ヤギの話しかけた声が静かだったため極端には驚かなかった。

「まったく。…おかげで足はくじくし、おいらはもうさんざんですよ。ふう。」

「おかげで」はひどいあらしのおかげでの意味。「ふう」からはひとまず落ち着ける場所に来たというオオカミの安堵感がある。「くじく」「さんざん」は語句説明の必要があると思われる。

あいては、やつと大きくため息をつき、つえにしていたぼう切れをゆかにおく。

「やつと」とあるのでこれまで気を張っていた。「つえにしていたぼう切れ」ヤギがひづめと勘違いしたものの正体が明かされる。また、ぼう切れをつえにしていた状況からオオカミはこの物語では擬人化され二足歩行することがわかる。

ということとは……。

読者に事態を想像させる間。

そう、そのつえをついてやってきた黒いかげは、ヤギではなく、オオカミだったのだ。とくに、このオオカミ、するどいきばをもち、ヤギの肉が好物ときている。

事態のタネ明かし。「そう」は読者の「相手はヤギではない」という想定を踏まえての一言。「とくに」「〜ときている」と、ヤギにとつていかに悪い状況かを強調している。

「あなたが来てくれて、ほつとしましたよ。」

警戒心よりも心細さが勝っていたための言葉。

ヤギのほうは、あいてがオオカミだとは、まだ気がつかない。

読者は状況を把握したのにヤギ本人は「まだ気がつかない」。また、いずれ気づくことをにおわせる。

どうやらオオカミのほうも、あいてがヤギだとは気づいてい

ない。

第三者の視点からの推測。

ヤギは、「あら？ひづめにしては、ずいぶんやわらかいな。」
と思ったが、きつと今当たったのはひざなんだと思いこむ。

思い込みが強く、相手がヤギ以外の存在（オオカミ）だということに微塵も疑いを抱かない。

「わたしもなんですよ。おかげでぜんぜん、においがわからないんです。」

たがいに思い込みに気付かない仕掛け。

「エへへ、今わかるのは、おたがい声だけってわけっすよね。」

唯一勘違いを解くためのヒントとなる条件の提示。

オオカミのわらい声を聞いて、ヤギは思わず、「オオカミみたいなすごみのあるひくいお声で。」と言いかけたが、失礼だと思ひ、口をとじる。

唯一のヒントから勘違いに気づきそうになるが、初対面の相手への礼儀を考え、思ったことを言わない。勘違いはまだ続く。

オオカミのほうも、「まるでヤギみたいにかん高いわらい方でやんすね。」って言おうとしたが、そんなことを言ったらあいてが気を悪くすると思ひ、やめることにする。

ヤギと同様。しかし「と言いかけた」と「って言おうとした」や「失礼だと思ひ」と「あいてが気を悪くすると思ひ」のようにそれぞれの言葉遣いの違いが表れている。

「ええ？バクバク谷ですって？あっちの方はあぶなくないですか？」

「へえ、そうでやんすか？ま、ちよつとけわしいけれど、すみごちはいいでやんすよ。」

勘違いの対比。バクバク谷はオオカミのすみかなのでヤギにとつては危険。オオカミにとつてはすみかなので危険でも何でもない。

うまい食い物とは、ヤギのことである。

オオカミの観点。

「ほんとに。わたしもぺこぺこですよ。」

オオカミの話に共感している。



「わかります、わかります。わたしも今、おんなじことを思つてたんです。」

「おや、ぐうぜん。わたしもですよ。」

繰り返しの「わかります」で強い共感を表す。さらに「おんなじことを思つてた」と共感を表す表現を重ねている。「おや、ぐうぜん。」と意外な共通点にさらにヤギのオオカミに対する親近感が強まる。

「ううん、その言い方、ぴったりですよね。」

「ううん」は否定ではなく感嘆的な用法であることを確認する必要がある。

「あのおいしい……。」

二ひきが同時に言う内容と、そこから勘違いが解けることへの期待感をあおる間。

「草」とヤギが言い、「肉」とオオカミが言った。

初めてはつきりと声に出された二ひきの相違点。聞き取れていれば勘違いに気付いたかもしれない。

けれども、ガラガラと遠くで鳴ったかみなりに、ちょうどその声はかきけされた。

間一髪、偶然で二ひきの勘違いはさらに続く。

「あら、わたしですよ。『そんなんじや、いざというときに速く走れないでしょ。速く走れないと生きのこれないわ。』って、食事のたびに母親にね。」

「いざというとき」はオオカミに襲われたとき。「速く走れないと生きのこれない」理由はオオカミから逃げられないから。

「そうそう、おいらのうちも、同じ言い方ですよ。『速く走れ

ないと生きのこれないわよ』って。」

同じ言い方でも内容は全く別物。「早く走れないと生きのこれない」理由はえさであるヤギをとれないから。

「ハハハ、わたしたち、ほんとによくにてますねえ。」

「へへへ、ほんと、まっ暗でおたがいの顔も見えないっすけど、じつは顔までにてたりして。」

実際は全然似ていない勘違いの面白さ。「じつは顔までにてたりして」顔が見えれば勘違いがわかるという布石。

そのとき、すぐ近くでいわずすが光り、小屋の中が昼間のようにうつし出された。

読者に勘違いが解けてしまうという緊張感を与え、この後の展開への期待感をあおる。

「あつ、わたし今うっかり下をむいてましたけど、今、わたしの顔、見えたでしょ。にてましたあ？」

「……それが、まぶしくて、おいら思わず目えつぶちまってる。」

互いに偶然によって勘違いが継続していく。

思わず二ひきは、しっかりと体をよせ合ってしまう。

体を「よせ合った」ではなく「よせ合ってしまう」から勘違いが解けうる、ヤギにとって危機的状況に陥ったことを感じさせる。

「ふう、おいらもなんですよ。はあ、びっくりしやしたね。」
 「ふう」「うですよう」「はあ」とオオカミがかみなりの音に気弱になっている様子。

「いいっすねえ。ひどいあらしで、最悪の夜だと思ってたんすけど、いい友だちに出会って、こいつは最高の夜かもしれないえす。」

初めてヤギのことを「友だち」と認める発言。しかも、何かと気の合う「いい友だち」であり、そのため「最悪の夜」も「最高の夜」かもしれないと思えるようになった。

「おや、もうすっかりあらしもやみましたねえ。」
 気がつけば「あらしも」、最悪の夜だと思っていた気持ちもおさまった。

「きまり。でもおたがいの顔がわからなかったりして。」
 ここまで常に丁寧語を使ってきたヤギが唯一丁寧語なしでオオカミと話した言葉。気心が知れ友だちと認めたために出た発言と考えられる。

「じゃあ、気をつけて、あらしの夜に。」

「さいなら、あらしの夜に。」

合いことばを使い、互いのことを友だちと認め合っている様子がうかがえる。

さつきまであれくるっていたあらしがうそのように、さわやかな風がふわりとふいた。

ヤギやオオカミの勘違いと、何度も互いの正体がわかり勘違いが解けそうになるという不安定な状況を、「あれくるっていたあらし」の様子とかけ、また、その不安定な状況から一転して、何事もなく互いを友だちと思いきみ、最高の夜だと勘違いした二ひきの心情をふわりとふく「さわやかな風」とかけていると考えられる。

夜明け前のしずかなやみの中を、手をふりながら左右にわかれていく二つのかけ。

視点の遠のき。山を遠くから見ていることから、物語自体もフェードアウトしていくことをにおわせる。

明くる日、このおかの下で、何が起こるのか。木の葉のしずくをきらめかせ、ちょっぴりと顔を出してきた朝日にも、そんなこと、わかるはずもない。

だれにもこの後の二ひきがどうなるのかわからないという、続きの物語を期待させる文の結び。

三 考察

(一)「あらしの夜」である効果

この「あらしの夜に」という作品は、どうしてあらしの夜

でないといけないのか。少し考察してみたい。

一つ目として、あらしである効果を考えたい。あらしとは、暴風雨のことであり、強風と豪雨を伴う状態である。文中にも、豪雨について、「おそいかかる水のつづ」や、「ヤギの体に、右から左から、力まかせにぶつけてくる」などの記述がある。その激しい雨のせいでおオカミがはなかせをひいてしまい、においがわからないという状況も不自然ではない。また、雨が右から左からぶつかってくる状態から、強風が吹いているであろうこともわかる。さらには、何度か雷が鳴る場面もあり、以上からあらしのすごさが伝わってくるだろう。あらしによる、雨や、風・雷の音により、さまざまな大事な言葉がかき消されるという効果もある。

そして、あらしがやってくると、普通不安な心情になるのではないだろうか。一人だと、余計にである。この作品に出てくるヤギも、おオカミが現れて「あなたが来てくれて、ほっとしましたよ。」と述べており、おオカミでさえも「こんな小屋にひとりぼっちじゃ、心細くなっちゃいますよ。」と述べている。

あらしによる、雨や、風・雷の音により、さまざまな大事な言葉がかき消されるという効果もある。

次に夜である効果についてである。もちろん一つ目の効果として夜は暗いため、お互いの顔が見えない。したがって、ヤギとおオカミともに姿がわからない効果を持っている。この効果はこの物語にとって、大変重要である。

さらに、夜というのも、人を不安にさせる要素があると考え

えられる。ヤギは、群れで生活をする生き物なのに、夜に一人でいつもとは違う場所にいるのは大変不安なことであろう。それは、おオカミも同じである。

以上のことを踏まえ、「あらし」と「夜」それぞれが持つ効果、そして、その両方が持つ不安にさせる効果がわかる。「あらし」であるだけで不安な気持ちなのに、さらに「夜」のため、もつと不安な気持ちが高ぶり、ヤギ・おオカミともに、異種の存在を受け入れるに至ったのだと考えられる。

(二)「勘違い」成立のしくみ

この物語のポイントは、「勘違い」である。それは「なあんだ、それならやぎにちがいない。」というヤギの思い込みに端を発している。物語は、お互いの正体が明らかになってしまいそうなピンチが幾度となく起こるが、「勘違い」によって難を逃れる。そうして二匹の間に「種族の壁を越えた友情」が芽生えていくのである。児童にはこの絶妙な「勘違い」によって話が進んでいく面白さに気付かせたい。そして「あらしのよる」という特異な状況がこの不思議な友情の成立に大きく影響していることを考えさせ、題名との関連に気付かせる。

この物語の展開には「あらしのよる」という特別な天候が作用しているところが大きい。雷や風や雨の音。これらの環境条件が重なって「勘違い」がスムーズに進んでいく。例えば、二人が「おいしいえさ」について話をする場面では、あわや二匹が自分たちの関係に気付いてしまいそうになる。しかしこれ以上ないという絶妙なタイミングで「かみなり」が

鳴って声がかき消され、気付かずにはすむ。このように「あらし」であること、「よる」であることに助けられる場面は本文中に何カ所か見受けられる。作者の仕組んだ巧妙なしかけであることがうかがえる。

また、物語が進行していくうえで、この二匹の性格が関係している場面がいくつか見られる。例えば、

と言いかけたが、失礼だと思い、口をとじる。

また、

あいてが気を悪くすると思い、やめることにする。

このように、二匹は相手の気持ちを考えることのできるやさしい性格であることを読み取ることができる。このやさしさのおかげで「勘違い」は成立しているのである。

二匹の会話に注目してみると、話しかけているのはほとんどの場合ヤギである。ここから好奇心旺盛で積極的な性格であることがわかる。二カ所だけオオカミから話しかける場面があるのだが、それは両方とも「えさ」の話である。食べ物に執着心が強く、その話になると特に饒舌になるオオカミという動物の習性がうかがえる。しかしこの物語に登場するオオカミは、雷が苦手というおちやめな一面もある。ここからわかるように、他のヤギやオオカミではなく、この二匹であ

ることで物語は成り立っている。主人公はこの二匹である必要があり、これも「勘違い」成立のためのしかけだと言えるだろう。

実際の授業では、二匹の違いや共通点について本文に書いてあることを中心に児童に考えさせ人物像をつかませ、この二匹であることの必然性に気付いてほしい。

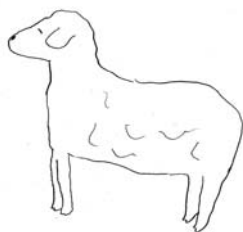
この作品は、ほとんどが二匹の会話で構成されているが、物語のはじめとおわりにはまとまった地の文章がある。会話文が多い分、物語状況を把握するうえで非常に重要な部分があるので、そこで使われている対比的なことを取り上げてみる。

ごうごう、おそいかる、あれくるった、
ちからまかせ、

さわやか、ふわり、しずかな、きらめかせ、

朝日

このように天候の変化を書くことで、二匹の心情の変化を暗に示していると考えられる。



手ぶくろを買いに（新美南吉）

小石川 ゆき、森本 弥徳、奥田 晴香、平井 恵理子

一 作者と作品について

新美南吉。大正二（一九一三年）〜昭和一八（一九四三年）。童話作家。本名渡邊正八。大正二（一九一三）年、渡邊多蔵、りゑの次男として生まれる。大正六（一九一七）年、南吉四歳のときに、母りゑが亡くなる。大正八（一九一九）年に、多蔵が継母しんと入籍し、異母兄弟となる弟の益吉が生まれる。大正十（一九二一）年に、同町東平井二の新見志も（実母りゑの継母）の養子となるが、三ヶ月ほどで実家へ戻る。

中学二年時に友人と同人誌「オリオン」を出し、十六歳のとき童謡一二二篇・詩三三篇・童話一五篇を書く。翌十七歳の時の日記にも文学各領域にわたっての創作が記されている。昭和六年半田中学卒業、岡崎師範を受験したが虚弱で不合格、ために母校半田第二尋常小（現在、岩滑小）の代用教員となり「赤い鳥」に『ごんぎつね』（昭和七）を発表する。昭和七年東京外語英語部に入学し、童謡・童話・小説を書く。昭和一八（一九四三）年、結核のため亡くなる。彼が残した作品は、童話・小説・童謡・詩・戯曲・俳句・短歌など多岐にわたり、その数は一五〇〇を超える。

教科書に掲載されている代表的な南吉作品としては、「ごんぎつね」、「手ぶくろを買いに」、「おちいさんのランプ」がある。

新美南吉は、ふるさとの知多半島を舞台に庶民の生き様や子どもの生活、身近な動物たちを描きながら、心の通い合いや美しい生き方といった普遍的テーマをストーリー性豊かに表現した。その物語は美しい文章、巧みな心理描写、ユーモアに彩られ、彼の死から六十年以上経った現在でも、多くの読者に愛されている。

「手ぶくろを買いに」は、新美南吉が東京外国語大に在学中の昭和八年に書かれた。原稿の末尾には「一九三三・一二・二六よる。」と書いてある。発表は没後の昭和十八年で、『牛をつないだ樁の木』（童話集）においてである。銀狐の親子が主人公で、比喻による情景描写で場面が展開していることから、幻想的なイメージを持つ。一方で、母ぎつねの人間についての思い出や、ぼうれい屋の子ぎつねに対する態度などは現実的であり、対照的に感じられる。

現在東京書籍の三年生用読み物教材として教科書に収められている。以前は日本書籍の小学校三年生用教科書教材として使われていたことがあり、母子の気持ちを読み取ったり、

情景描写に注目して読む活動がなされていた。

本作品は数ある南吉作品の中でも「ごん狐」と並んで人気の高い作品で、多くの画家の手で絵本にもなっている。とくに黒井健による絵本（偕成社）は、フランス、韓国、アメリカでそれぞれの言葉に翻訳され、出版されている。

二 叙述について

手ぶくろを買いに

文として完成していないことで、「だれが」「いつ」「どこへ」「手ぶくろを買いに行くのか」が気になる題名になっている。

寒い冬が、北方から、きつねの親子のすんでいる森へもやってきました。

季節が初冬であることがわかる。「親子」なので、きつねが複数いることが分かる。

「あつ。」とさけんで、目をおさえながら母さんぎつねの所へ転がて来ました。

何が起こったのかは現時点でわからない。目に異変があったことだけがわかる。「転がて来る」という表現から、大変あわてている様子や、きつね自身が幼くて小さいきつねであることが想像できる。

「母ちゃん、目に何かささった。ぬいてちょうだい。早く、

早く。」

子どもらしい口調で、とてもあわてている。後に目に何か刺さったわけではないことが分かる。

母さんぎつねがびつくりして、あわてふためきながら、目をおさえている子どもの手をおさるおさる取りのけてみましたが何もささってはいませんでした。

きつねの親子は母と子の二匹であることがわかる。とても心配している母きつねの様子から、母親らしい愛情が感じられる。

雪を知らなかった子どものきつねは、あまりに強い反しやを受けたので、目に何かささったと思ったのでした。

雪がたくさんふって厚く積もっていることと、今は昼で太陽がとても明るい良い天気であることが想像できる。また、雪を知らないということは、生まれて一年もたっていないと思われるので、とても幼いきつねだとわかる。この勘違いも子ども特有の微笑ましいものに見える。

まわたのようにやわらかい雪の上

まわたは繭（まゆ）をワタ状に引き伸ばしたもの。昔はこれをワタとよんでいて、あまりに高級で一般の庶民には使用できなかった。そのあと木綿（コットン）ができて一般に使用されるようになり、このコットンをワタと呼び、繭からできたものを「まわた」と呼ぶようになった。

ドタドタ、ザーツと、ものすごい音がして、パンこのような
 こな雪が、ふわあつと子ぎつねにおつかぶさつてきました。

パン粉にたとえられるような、降りたての新しい雪である
 ことが分かる。「おつかぶさる」は「かぶさる」を強めた語。
 「覆いかぶさる」こと。

雪の中に転がるようにして十メートルも向こうへにげました。
 あまりに驚いて、必要以上に走って逃げてしまった。

まだえだとえだの間から、白いきぬ糸のように雪がこぼれて
 いました。

太陽の光に反射してキラキラしているので、絹糸のようだ
 ったのだろう。

「お母ちゃん、おててがつめたい、おててがちんちんする。」
 口調がとても幼い。冷たくて「ヒリヒリ」していることを
 「ちんちん」と表現した。

ぬれてぼたん色になった手を

花の牡丹のように、赤紫色のことを「ぼたん色」と呼ぶ。

はあつと息をふきかけて、ぬくとい母さんの手でやんわりつ
 つんでやりながら、

子どもに対する母親の優しい行動である。限りなく人間ら

しい行動で、共感と呼ぶ。「ぬくとい」とは「あたたかい」の
 方言。

「もうすぐあたたかくなるよ。雪にさわると、すぐあたたか
 くなるもんだよ。」

「雪に触つても、手を包めばすぐにあたたかくなるから大
 丈夫」と、子ぎつねを安心させるために言った言葉である。
 母親の保護的な対応が見受けられる。

かわいいぼうやの手にしもやけができてはかわいそうだから、
 夜になったら、町まで行つて、ぼうやのおててに合うような、
 毛糸の手ぶくろを買つてやろうと思いました。

夜になったら町に出ることは、なんらかの意味がありそう
 である。多くの人間は昼に行動することから、人間を避けて
 いるのではないかと予想される。

暗い暗い夜が、ふろしきのようなかげを広げて、野原や森を
 つつみにやってきましたが、雪はあまり白いので、つつん
 もつつんでも白くうかびあがっていました。

擬人法を使って、夜が訪れる様子を巧みに表している。雪
 の白さと夜の黒が対照的で色彩豊かである。

「母ちゃん、お星様は、あんなひくい所にも落ちてゐるのねえ。」
 町の明かりをお星様だと勘違いしている。子どもらしい発
 想である。また「ひくい所」ということは、今親子は町を見

下ろせるような丘か山にいる。

その時母さんぎつねの足はすくんでしまいました。

子ぎつねに「町のひ」であることを教える前に、足がすくんでしまっている。反射的に町の灯りに恐怖心を抱いてしまったのだろう。母ぎつねのトラウマであることがわかる。

そこで、しかたがないので、ぼうやだけを一人で町まで行かせることになりました。

「しかたがない」ということは、なんらかのやり取りがこの間にあったと思われる。また、行かせることに「した」ではなく、「なった」という言葉を使っていることから、母さんぎつねがぼうやを行かせようとした意思はあまりないことが表現されている。

その手を、母さんぎつねはしばらくにぎっている間に、かわいい人間の子どもの手にしてしまいました。

しばらくにぎるといふ行為によって手を変身させる能力をもっている。

ぼうやのきつねはその手を広げたりにぎったり、つねってみたり、かいでみたりしました。

「なんだかへんだな、母ちゃん、これなあに？」

と言って、雪明かりに、また、その人間の手にかえられてしまった自分の手を、しげしげと見つめました。

ぼうやは人間を見ることが分かる。何に変えられたか分からず、不思議に思っている。

まず、表にまるいシャツポのかん板のかかっている家を探すんだよ。それが見つかつたらね、トントんと戸をたたいて、こんばんはって言うんだよ。そうするとね、中から人間が、少うし戸を開けるからね、

母さんぎつねは人間のことにについて詳しい知識を持っている。情報が流れているのか、それとも、手ぶくろを買いに行くように買い物にでかけたことがあるのか。けれども、ぼうやを一人で行かせるぐらい人間を恐れているのだから、買い物にでかけたことがあるとは考えにくい。

「どうして？」と、ぼうやのきつねはきき返しました。

ぼうやの何も知らない無垢な様子がよく表れている。

それどころか、つかまえておりの中へ入れちゃうんだよ。人間ってほんとにこわいものなんだよ。

母さんぎつねの人間に対しての恐れが表れている。この文だけでも、母さんぎつねには人間とのいやな過去があることが予想できる。

ふうん。

母さんぎつねの人間への恐怖心とは対照的に、話をきいてもあまり人間への恐怖心は感じていない。

決して、こっちの手を出しちやいけないよ。こっちのほう、ほら、人間の手のほうをさし出すんだよ。

その前のセリフでも、念をおしているのに、さらに念をおしている。それだけ恐怖は大きい。

母さんのきつねは、持って来た二つの白どうかを、人間の手のほうへにぎらせてやりました。

母さんのきつねが白どうかをにぎれたということは、子どもはきつねにもにぎることはできる。それなのに、人間の手のほうににぎらせたのは、お金を差し出す一連の流れの中で、人間の手をだせるようにするために、人間の手のほうににぎらせた。また、人間のお金を持っていることがわかる。どのようにして手に入れたのかはよく分からない。

雪明かりの野原をよちよちやっていききました。

雪明かりだから、周りに光を放つものはないことがわかる。ただ、降り積もった雪だけが、白く浮かび上がり、あたかも明るいように感じさせる景色を想像させる。よちよちという表現から、幼い子どもらしい描写になっている。

はじめのうちは一つきりだったひが二つになり、三つになり、はては十にもふえました。

たくさんの家の光が見えるようになってきたことから、だんだん町に近づいていることが間接的だがわかる。

きつねの子どもはそれを見て、ひには、星とおなじように、赤いのや黄色いのや青いのがあるんだなと思いました。

星には様々な色があることは知っている。ひはどうかのか、それまでは知らなかった。というより、この段階で子どものきつねには電気というものの存在が分からず、家の明かりをひだと思い込んでいる。

高いまどからあたたかそうな光が、道の雪の上に落ちているばかりでした。

あたたかそうな光という表現で、家の中で家族の楽しそうな様子が思い浮かぶ。それを連想することで独りぼっちで雪の中を歩く子どものきつねの姿が対照的に浮かび上がる。

とうとうぼうし屋が見つかりました。

すぐに見つかったのではなく、色々探してついに、とうとう見つかったのである。

すると、中では何かコトコト音がしていましたが、やがて戸が一すんほどゴロリと開いて、光のおびが道の白い雪の上に長くのびました。

コトコトと音がしていることと、やがてという表現から、夜に訪問客などないと思っていた人間が中で準備をして出てくる様子がわかる。また、ゴロリと開くものだから、押して引く式のドアじゃなく、引き戸のようなものだとわかる。

子ぎつねはその光がまばゆかったので、面くらって、まちがったほうの手を、――お母さんが出しちゃいけないと言ったよく聞かせたほうの手を、すき間からさしこんでしまいました。

面くらうほどの明るさは夜の暗さを強調する。面くらうほどだったのであるから、子どものきつねにとつては予想もできなかった明るさだったのである。その瞬間に人間の手ではない手、つまり、きつねの手をさしこんでしまう。「まちがったほうの手を、――お母さんが出しちゃいけないと言ったよく聞かせたほうの手」とすることで、子ぎつねがきつねの手を出したことの重大さ（人間につかまえられて、おりに入れられないのではないかということ）を強調している。

するとぼうし屋さんは、おやおやと思いました。

ぼうし屋さんは、何かおかしいことに気づく。

きつねの手です。

それまで過去形が使われていたのに、現在形が使われている。きつねの手であることを強調している。

きつねの手が手ぶくろをくれと言うのです。

ここでも現在形が使われている。「きつねが」とするのではなく、「きつねの手が」とすることで、「手」というものに注目させている。

これはきつと木の葉で買いに来たんだなと思いました。

ぼうし屋さんは、きつねが木の葉をお金に化かして、手ぶくろを買いに来たと思っている。きつねの手を見た時の、ぼうし屋さんの心情が順を追って丁寧に描かれている。

「先にお金をください。」

子ぎつねが本当のお金で手ぶくろを買いに来たかどうか確かめるためである。木の葉のお金をもらっても、ぼうし屋さんには何にもならないからである。

子ぎつねはすなおに、にぎって来た白どうかを二つ、ぼうし屋さんにわたしました。

子ぎつねの純粹さ、素直さが伝わってくる。

ぼうし屋さんはそれを人さし指の先にのつけて、かち合わせしてみると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんとお金だと思いましたので、たなから子ども用の毛糸の手ぶくろを取り出して来て、子ぎつねの手に持たせてやりました。

ぼうし屋さんが子ぎつねの持って来たお金が本物かどうか、念入りに調べている様子を、丁寧に描いている。ぼうし屋さんは、本当のお金であることを確かめた上で、子ぎつねに手ぶくろを持たせている。もし、子ぎつねの持って来たお金が木の葉であつたら、ぼうし屋さんは、子ぎつねに手ぶくろを持たせていないかもしれない。

「お母さんは、人間はおそろしいものだっておっしゃったが、ちっともおそろしくないや。だって、ぼくの手をみてもどうもしなかったもの。」

ぼうし屋さんにきつねの手を出しても、何もされず、手ぶくろをわたしてもらえた。このことから、子ぎつねは、人間のことをおそろしいものとして捉えていない。むしろ、人間はやさしいもの、いいものとして捉えている。子ぎつねは、母さんぎつねの「人間はおそろしいもの」とする考えとは、別の考えをもつことになる。

けれど子ぎつねはいったい人間なんてどんなものかみたいと思いました。

子ぎつねは、人間はおそろしいものではないことがわかって、もっと人間について知りたいと思ったのではないか。

なんとというやさしい、なんとという美しい、なんとというおっとりした声なんでしょう。

「なんとという」を続けて使っていることから、非常にやさしい、美しい、おっとりした声であることを強調している。子ぎつねは人間をやさしいもの、いいものとして捉えているので、人間の声がそのように聞こえたのかもしれない。

「ねむれ ねむれ
母のむねに、

ねむれ ねむれ

母の手に――」

聞こえてきた声は、子守唄であることがわかる。

子ぎつねは、その歌声は、きつと人間のお母さんの声にちがいないと思いました。

子ぎつねは、子守唄を歌っている、やさしくて、美しく、おっとりした声は、人間のお母さんの声だと確信している。

だって、子ぎつねがねむる時にも、やっぱり母さんぎつねは、あんなやさしい声でゆすぶってくれるからです。

子ぎつねは、自分を寝かしつける時に、母さんぎつねがやさしい声でゆすぶってくれることから、やさしくて、美しく、おっとりした子守唄を歌う声は、人間のお母さんの声だと確信している。人間のお母さんもきつねのお母さんも、やさしい声で子どもを寝かしつけている。母親のやさしさにおいて、人間ときつねの共通点を表している。

それを聞くと、子ぎつねは急にお母さんがこいしくなあって、母さんぎつねの待っている方へとんでいきました。

子ぎつねは人間の子どもとお母さんとのやり取りを聞いて、お母さんのことがこいしくなってくる。そして、早く母さんぎつねに会いたいと思い、母さんぎつねのもとへと急ぐ。

母さんぎつねは、心配しながら、ぼうやのきつねの帰って来

るのを、今か今かとふるえながらまっていますので、ぼうやが来ると、あたたかいむねにだきしめてなきたいほどよこびました。

「今か今か」からはぼうやのきつねの帰りを焦って待つ母さんぎつねの不安な気持ち表れている。また、「ふるえながら」は母さんぎつねの人間に対する恐怖の気持ちが詰まった言葉である。我が子が人間に追いまくられていないか、つかまえておりの中に入られれていないか不安で、ぼうやのきつねの無事を祈っている。

「泣く」には悲しみ、苦しみなどを抑えることが出来ず涙が出る意味と、うれし泣きのように、嬉しくて泣くという意味がある。今回の場合は、後者の嬉しくて泣いているの意。「なきたいほど」なので実際には泣いていない。

月が出たので、きつねの毛なみが銀色に光り、その足あとには、コバルトのかげがたまりました。

「月が出たので」という描写はぼうやのきつねが無事帰ってきて、銀ぎつねの親子がまた一緒に歩きだすことができたという母ぎつねの安堵の様子と、母さんぎつねのもとに帰ってこれたぼうやのきつねの安心感、双方の気持ちと繋がった記述である。銀ぎつねの毛なみの色が分かるほど、周囲は月の明かりに照らされて明るくなっている。この文章に出てくる色（月光・銀色・コバルト）はすべて明るい色である。ここから、銀ぎつねの親子の安心感が伺える。

「母ちゃん、人間ってちつともこわくないや。」

「ちつとも」とは全然、少しも、全くということ。つまりぼうやのきつねは人間を全く怖がっていない。

「ぼう、まちがえてほんとうのおてて出しちゃったの。でもぼうし屋さん、つかまえやしなかったもの。ちゃんとこんないいあたたかい手ぶくろくれたもの。」

「くだもの」「くだもの」には不平や不満、または甘えの気持ちを込めて文章を言い切るという意味がある。今回は子ぎつねの母ぎつねに対する甘えの気持ちがある。

手ぶくろのはまった両手をパンパンやつてみせました。

あたたかい手ぶくろを母さんぎつねに見せようとしている。

「まあ！」とあきれましたが、

「あきれる」は予想外の事態に出会って、対処の方法や対応すべき言葉を失うの意味。母さんぎつねは思いもしなかったぼうやのきつねの行動に驚き、言葉を失っている。

「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。」とつぶやきました。

「かしら」には不審、疑問の意味がある。なのでここで、母さんぎつねは人間を完全にいいものとは思っていない。しかし、ぼうやのきつねとぼうし屋という人間との間に起こった触れ合いによって、人間のことを以前よりも少しはいいも

のと思えるようになっていく。「つぶやく」とは小声でものを言うこと。独り言をいうことの意味。この台詞を二度繰り返すのは、母さんぎつねが、自問自答しながら、人間について深く考えているから。

三 考察

「手ぶくろを買いに」という作品の中で気になる二点を取りあげること、どのような作品として捉えることができるのかを言及する。その二点というのは「なぜ、母ぎつねは人間を危険なものとしながら、そんな危ないところに子ぎつねを一人で向かわせたのか」ということと、『本当に人間はいいものかしら、本当に人間はいいものかしら』という母ぎつねのつぶやきにはどのような意味が込められているのか」ということである。

(一) 矛盾が生み出したもの

「手ぶくろを買いに」を読んだとき、子ぎつねの子どもらしい可愛らしさに魅了される。しかしそれだけでなく同時に、大きな疑問も感じてしまう。それは母ぎつねの判断である。なぜ、母ぎつねは人間を危険なものとしながら、そんな危ないところに子ぎつねを一人で向かわせたのか、ということである。確かに過去の経験から人間を怖いものと考え、町に行きたくないという母ぎつねの心情も分からないわけではない。しかしこの母ぎつねは、子ぎつねに対して保護的な対応をと

っている。子ぎつねを結局一人で町へ行かせるというのは、非常に矛盾した判断である。ただ単に、この判断は母ぎつねの人間不信によるものだっただけのだろうか。その背景にあったものは一体何だったのか。この部分は物語を展開する上で重要なものとなると考えた。

この作品の主題を考えるにあたり、注目したい文は、

「母ちゃん、何してんの。早く行こうよ。」

そこで、しかたがないので、ぼうやだけを一人で町までいかせることになりました。

という二か所である。子ぎつねの台詞から子ぎつねは無邪気で人間に恐怖心を抱いていないので、早く町に行きたがっている様子がわかる。そして、母ぎつねが町に行きたくないから「しかたがないので」子ぎつねを一人で町へ向かわせたのか。もしそうだとしたら、「しかたがないので、ぼうやだけを一人で町までいかせることにしました」という文になるのではないだろうか。しかし、ここでは「なりました」という語を使っている。よって母ぎつねの意思ではなく、町へ行くという子ぎつねの意思が大きく働いているのではないかと考えられる。子ぎつねを町に一人で行かせた背景には、洪々行かせなければならぬ母親の苦渋の決断があったと思われる。この二つの文は子ぎつねの意思が大きく影響している言い回しである。つまり母ぎつねが、町に行かせたのではなく、子

ぎつねが最終的に一人で町に行くことを決意したのだということが考察できる。

一人で町に出かけた子ぎつねは所謂「はじめてのおつかい」を経験する。この経験が子ぎつねの成長、母親からの自立を促すことになる。無事に手ぶくろを買い終え、帰路に向かう時、

「お母さんは、人間はおそろしいものだっておっしゃったが、ちっともおそろしくないや。だって、ぼくの手を見てもどうもしなかったもの。」

という。これは、母親の言葉を信じていた子ぎつねが、母親の人間に対する先入観を否定する言葉である。今まで頼っていた存在の教えに疑念を抱くことで、自分の認識を信じるという一種の自立が確立する。そして、子ぎつねの新しい人間に対する認識によって、今度は母親が教えられている。これは今までの親子の関係に少し変化があったとみてよいだろう。

また、同時に注目したいのが、「親子」であるのに、「父ぎつね」が不在であるということである。子は勿論母を守る存在としての父がいらないことで、母を守る存在へと成長する子ぎつねを際立たせているのである。狐は子どもを大切に育てるとする一面があり、他の子どもにまで餌を与える習性がある事が知られている。特徴的なのが夏の終わりから秋にかけての「子別れ」の季節だ。ここに来て親狐の行働は、とても厳しいものに変化し、子に対して本気で威嚇、さらには嗜

みつきもみられ、徹底的に突き放す行動をとるという。この「手ぶくろを買いに」では、この「子別れ」を後に予感させる。子ぎつねの成長物語と言えるのではないだろうか。母の手から離れ、だんだんと自立していく様子は、人間の子の成長にも共通するところがあり、共感が持てることであると考ええる。

母ぎつねの子ぎつねを大切にしながらも、一人で町に向かわせるという一見矛盾している判断があったからこそ、このような子ぎつねの成長、親子関係の変化が結果的に生まれたことになる。

ただ、子ぎつねの愛らしさ、純真さを読み取るだけではなく、またただ単に銀ぎつねの親子の愛情というだけでもない。子ぎつねが一人で町に手ぶくろを買いに行く「はじめてのおつかい」という自立の第一歩的な儀式を通して、親から少し離れていく子ぎつねの成長があり、そしてその出来事によって変わった親子の関係という主題が含まれている。

(二) 新美南吉と「手ぶくろを買いに」――不信感と希望の光
この作品は、母さんぎつねの「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。」という言葉で締めくくられる。この言葉からは南吉自身が人間不信であったのではないかと思わされる。南吉がこの作品に描きかけたことは何なのだろうか。

まず、新美南吉童話の本質についてとりあげたい。『新美南吉童話の本質と世界』では以下のように述べられている。

新美南吉童話の本質、それは（私なりに）一言すれば（母恋い）童話である。さらに敷衍して言う、ほのぼのとした温かさ、安らぎのある、（他者との結びつき）を切なく冀った（人間恋い）童話である。それほど、新美南吉という作家は幼少年時代より孤独であった。

その孤独は、四歳時に生母と死別し、その後すぐに継母が家に入ってくる、そんななか生母方の実家へ養子に出され結局は戻って来ることになる、幼少年期に遡っていく。その間に、生来の性向もあつてか、（他者との結びつき）における極度の「障害」——対話により共感を育み、交流することが困難である——が形成される。そうした対人関係における深刻な「障害」を、既に幼少年時代において抱え、思春期や青年期を生きていくことになる。幼少年期からの、未だ満たされずにきた、（他者との結びつき）における最大の空白（すなわち飢餓感）——（失われた母の愛）のぬくもりや安らぎ感——は、生存自体をさえ危機に陥れるほどの欠落感（「寂しさ」）として（絶えず無意識層から噴き出してきて）南吉を襲い、空想世界での（母恋い）童話として文学作品上に実現されていた。

このように、南吉は母親の愛情を渴望していたのはいうまでもなく、対人関係への深刻な問題を小さいころから抱えながら、他者との結びつきを冀っていたことがわかる。

また、この作品の原稿の末尾には「一九三三・一二・二六

よる。」と記されている。昭和八年（一九三三）の春に『赤い鳥』のために尽力していた北原白秋と鈴木三重吉が決別し、『赤い鳥』から去っていく。このため、白秋門下であった南吉らは同年四月号を最後に『赤い鳥』への投稿を止めざるをえなかった。それまでに『赤い鳥』に童謡をほぼ毎号、童話は「ごん狐」など四篇を選ばせてきた南吉にとって重要な作品発表の場を失うことになった。その後、白秋門下の若手詩人達と語らい、新しい童謡雑誌を作ろうとする。しかし、その計画でさえ、白秋に反対され、諦めざるをえなかった。これが一九三三年一月二四日のことであった。

ここで、原稿の最後に付された日付が白秋に反対された日時と結びつくのである。南吉は『赤い鳥』への投稿を止めざるをえなかったということ、新たな計画を白秋に反対されて、諦めざるをえなかったという二つのショックを一九三三年に受けている。

これらを踏まえると、南吉はこの時期、人間への不信感を抱くとともに、自分の居場所を求めて他者との結びつきを大変強く渴望していたと考えられる。新しい計画で他者と結びつく場所を作ろうとしたことも、白秋に反対される。このことで、白秋門下の若手詩人たちの新たな結びつきが失われたことはもちろん、師匠として敬愛している白秋と南吉自身の結びつきにも不安を感じ、寂しく思っていたのではないだろうか。

南吉の背景を考えると、「手ぶくろを買いに」という作品は、南吉の人間への不信感を描くとともに、「信じたい」、「本当は

結びつきがほしい」という思いが込められ、描かれているのである。

この観点から作品を分析すると、母ぎつねの人間への不信感だけを描くのではなく、無知だからこそ人間と上手く結びついていく子ぎつねの描写がなされていることに気づかされる。そこに南吉の子ぎつねに対する羨望のまなざしが存在しているのである。

作品の中で、子ぎつねが出会った人間はいい人間だったのだろうか。いい人間であつたのかもしれないが、全ての人間がそのような人間だと言えるだろうか。たまたま今回出会った人間がいい人間だっただけかもしれない。今回は、たまたま恐ろしい目にあわなかっただけかもしれない。

現に、ぼうし屋さんは、子ぎつねに「先にお金をください。」と言ひ、そのお金が本当のお金かどうか確かめている。これも、木の葉のお金だったかどうかだろうか。捕まえられておりの中にこそ入れられないとしても、手ぶくろは売ってもらえないだろう。

また、本文に「けれど子ぎつねはいつたい人間なんてどんなものか見たいと思いました。」とあるように、子ぎつねはまた、人間の姿を見ていない。ぼうし屋さんの後に出てくる、人間のお母さんと子どもの場面でも、人間の声しか聞いていない。子ぎつねは、人間の姿を見ていないということから、人間のいい部分しか見ておらず、まだ人間の恐ろしい部分を見ていないという風にもとれる。それは、子ぎつねが雪で遊ぶ場面でも示されているのではないだろうか。まわたのよう

にやわらかい雪が、突然、ものすごい音を立てて子ぎつねにおつかぶさってくる。美しくやさしいものが、突然、恐ろしくこわいものになる場面である。これは、人間のもつやさしい部分と恐ろしい部分を示しているのではないだろうか。

そして、子ぎつねが「幼く、弱々しく、無知の存在」であることが強調されている。子ぎつねのことを「子どものきつね」、「ぼうやのきつね」などということ、幼く、弱々しい印象を読者に与える。母さんぎつねが、人間は恐ろしいものであることを教えたり、町のことに於いて教える場面で、この傾向はより見られる。ほかにも、子ぎつねが、雪の上で反射した太陽の光を目に受けて目に何かささったと思ったり、町のひをお星様だと思ったりする場面がある。これらは、子ぎつねが幼いこと、幼いが故にまだ何も知らないこと、つまり、子ぎつねの無知を強調していると言える。よって、人間に対する場面でも、まだ何も知らないから（まだ人間の恐ろしいところを知らないから）子ぎつねは、人間ってこわくないと言えるのである。

南吉は無知だからこそ恐れもなく純粋に人間に近づいていく子ぎつねに理想を重ね、母ぎつねに自分自身を重ねている。「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。」という言葉は、信じていいのかという不安を表現するだけでなく、できれば「信じて」「つながりたい」という願望をこめているのである。

きつねの窓（安房直子）



一 作者と作品について

安房直子（一九四三～一九九三）は、日本女子大学国文科在学中の一九六二年に同人誌『目白児童文学』創刊号に原稿を寄せた。これをきっかけに山室静に師事した。一九六六年に同人誌『海賊』の創刊にかかわった。一九七〇年同誌発表の「さんしょっ子」で日本児童文学者協会新人賞を受賞した。その後、『北風のわすれたハンカチ』（一九七一年、旺文社）でサンケイ児童出版文化賞推薦を受け、『風と木の歌』（一九七二年、実業之日本社）で小学館文学賞、『遠い野ばらの村』（一九八一年、筑摩書房）で野間児童文芸賞、『山の童話 風のローラースケート』（一九八五年、筑摩書房）で新美南吉児童文学賞と高い評価を得てきた。

同じ日本女子大出身の児童文学者に立原えりか、あまみきみこがいる。いずれの作家の作品も教科書に掲載されている。教科書に掲載された安房直子の作品は、「きつねの窓」の他、「青い花」「秋の風鈴」「すずめのおくりもの」「たぬきの糸でんわは森の一ばん」「つきよに」「ねずみの作った朝ごはん」「はるかぜのたいこ」「ひぐれのお客」「やさしいたんぼぼ」がある。

寺田 守



「きつねの窓」は一九七一年三月に雑誌『目白児童文学』九号に発表された。翌一九七二年刊行の短編集『風と木の歌』（実業之日本社）に収められている。主人公が現実世界から非現実世界に入り戻ってくるという往還型の物語である。非現実世界は青と白との色彩のコントラスト（対照）が基調となっている。人間に化した子ぎつねが不思議な窓を作るファンタジー作品である。

教科書には、一九七七年（昭和五十二年）度版、教育出版「小学国語六下」から掲載された。現在まで掲載され続けている。一九七〇年代後半から一九八〇年代にかけて、「きつねの窓」のようなファンタジー教材を、どのように授業で扱うかということが議論された。作品が語りかけてくる言葉を、学習の最後に、主題という短文の形で一つにまとめることが困難だと考えられたためである。「きつねの窓」と共に、同時に教科書に掲載され始めた「白いぼうし」（あまみきみこ）、「やまなし」（宮沢賢治）、「空中ブランコ乗りのキキ」（別役実）などが、読むことの学習指導の在り方を問い直す契機となった。

教科書で「きつねの窓」を学ぶ子どもたちは以下の作品を学習してきている。二年生以降、各学年にきつねの登場する

物語がある。とりわけ四年「こんぎつね」、五年「雪わたり」、六年「きつねの窓」はいずれもきつねと人間との関わりを描いている。

一年 けむりのきしや（矢崎節夫）、おおきなかぶ（ロシア民話、うちだりさこ訳）、けんかした山（安藤美紀夫）、うみへのながいたび（今江祥智）、お手がみ（アーノルド・ローベル）

二年 ひっこしてきたみさ（安藤美紀夫）、きつねのおきやくさま（あまんきみこ）、かさこじぞう（岩崎京子）、アレクサンダとぜんまいねずみ（レオ・レオニ）

三年 消しゴムころりん（岡田淳）、わすれられないおくりもの（スーザン・バーレイ）、のらねこ（三木卓）、おいたのぼうし（あまんきみこ）

四年 やい、とかげ（舟崎靖子）、一つの花（今西祐行）、アジアの笑い話、こんぎつね（新美南吉）

五年 五月になれば（加藤多一）、大造じいさんとがん（椋鳩十）、雪わたり（宮沢賢治）

六年 美月の夢（長崎夏海）、川とノリオ（いぬいとみこ）
（二〇〇五年度版教育出版より物語教材を挙げた。）

二 叙述について

歩き慣れた山道を、鉄砲をかついで、ぼんやり歩いていました。

ぼくは狩りを生業とする猟師なのか。それとも狩りを娯楽として楽しむハンターなのか。「大造じいさんとがん」の大造じいさんは前者であり、「注文の多い料理店」の二人の紳士は後者である。ぼくには生活をかけて獲物と対峙する大造じいさんのような厳しさがみられないことから後者であると考えられる。

（渋谷昌美、渋谷孝・市毛勝雄編、『「きつねの窓」の言語技術教育』、明治図書、一九九七年、五九頁）

昔大好きだった女の子のことなんかを、とりとめなく考えながら。

ぼくが自分の指で作った窓で最初に見た女の子である。とりとめなく考えていたのだから、まとまりなく、あれこれと、なんとなく考えていた。つまりぼんやりしていた。

ぼくは息をのみました。

息をのんだのだから、はっと驚いた。歩き慣れた山道で、広々とした野原一面の青いききょうの花畑にでくわしたことに驚いた。見たことのない場所であることや空も地面も青い世界であったことが理由だろう。

ぼくは、自分に命令しました。

ぼくの心が立ちすくんだぼくの体に命令した。普通の状態ならば命令しなくても思ったり感じた瞬間に体は行動する。すでに心と体がばらばらになっている。

なんだか、そらおそろしいほどに。

そらおそろしいとあるので、先のことを考えると危ぶまれる、不安な気持ち。何がおそろしいのかはつきりわからない。突然現れた景色があんまり美しすぎるので、対照的にとても悪いことが起こりそうな予感がした。

そして、そこにいる親ぎつねをしとめたいと思ったのです。

ぼくが子ぎつねにだまされたふりをする理由である。できれば、親ぎつねがいいのだから、子ぎつねをしとめても良い。ぼくはどちらも獲物として狙っている。

うまいぐあいに、はぐらかされたと思いました。

うまくまかれた、逃げられたと思った。

ぼくには、すぐわかりました。

子ぎつねが子どもの店員に化けているとわかった。子ぎつねは、一度逃げ切ったのに、再びぼくの前に姿を現した。子ぎつねにとって、目的は逃げることなのでなく、何か別の意図があるのだろう。

すると、胸のおくから、おかしさが、くつくつとこみあげてきました。

くつくつとこみあげてきたのだから、抑えきれずに、ふつふつと、くつくつと笑いたくなるように、おかしく感じた。

ぼくは、子ぎつねに対して、不安やおそろしさを感じていない。なぜ再び姿を現したのだろうと疑問も感じていない。

ふうん、これはひとつ、だまされたふりをして、きつねをつかまえてやろうと、ぼくは思いました。

ぼくは、だまされたふりをして、逆にきつねをだまそうと考えた。

はい、なんでもお染めいたします。

ぼうし、マフラー、くつ下、ズボン、上着、セーター、指物だけでなく、体も染められる。心も染められるのかもしれない。

と、きつねは、ぼくの身なりをしげしげと見つめて、こう言いました。

子ぎつねは、染められる物がないかと、確かめるように、しばらくの間、じろじろとぼくを見た。

きつねは、きつとお礼がほしいでしょう。

ぼくはきつねが見返りを求めてくることを予想している。

ぼくは、一人でうなずきました。

うなずくことで、首を縦にふり、納得した。ぼくはきつねの意図を一人で想像し、納得した。ここから最後まで子ぎつねを疑わない。

そこで、ぼくは、しぶしぶ窓の中をのぞきました。

しぶしぶとあるので、嫌々ながら、仕方なく窓をのぞいた。

これで、自分の正体がばれてしまったことも気づかずに、話し続けました。

窓の中の白いきつねが母さんだと言うことで、正体がばれてしまったということに、きぎつねが気づいていない。そう思っているのはぼくである。きぎつねはぼくに母さんが鉄砲で殺されたことを伝えたかったのだろう。

これ、人情っていうものでしょ。

人情は人ならばだれでももっているはずの心の働き。ここでは死んだ母さんの姿を一回でも見たいと思う気持ち。きぎつねはきぎつねだって人間と同じような心を持っていると伝えている。

なんだか悲しい話になってきたと思いながら、ぼくは、うんうんとうなずきました。

ぼくはきぎつねに同情した。母ぎつねを鉄砲で撃ったのが自分かもしれないとは思っていない。先ほどまで母ぎつねを狙っていたことへの罪悪感もない。

(西郷竹彦、『教科書指導ハンドブック小学6年の国語』、明治図書、一九八七年、九六頁)

ぼくはもう、さびしくなくなりました。

いつでも母さんの姿を見ることができるようからさびしくないとやっている。本当にさびしくないのだろうか？もう会えない人の過去の姿を見るだけというのは、かえってさびしい気持ちになることもある。

ぼくは、すっかり感激して、何度もうなずきました。

ぼくの気持ちが一番大きく変化した一文である。最初は母ぎつねがいなければきぎつねをしとめても良いはずだった。もうきぎつねをしとめる気持ちがなくなっている。

実は、ぼくも独りぼっちだったのです。

ぼくも独りぼっちだからきぎつねの気持ちがよく理解できた。きぎつねが逃げないでぼくの前に現れたのは独りぼっちだから友だちが欲しかったのかもしれない。「きぎつね」のさんと兵十も独りぼっちだった。

昔大好きだった、そして、今はもう、決して会うことのできない少女なのでした。

死んでしまっても会えない。地理的に遠くへ行ってしまうと会えない。大好きだったから結婚してしまっても心理的に遠くへ行ってしまうと会えない。今でも身近にいるが、昔大好きだった頃の少女とは、似ても似つかぬ女性になってしまった。会うことのできない理由は色々想像できるが、窓に映る母ぎつねや妹はいずれも死んでいることから、少女も亡くなつて

しまったと考えるのがよいだろう。

（関口安義、「教材分析から多義的な〈読み〉へ」、『教育科学国語教育』、三四八号、明治図書、一九八五、一九頁）

きつねは、とても無邪気に笑いました。

無邪気とあるので、悪気がない、こだわりがない笑いである。子ぎつねは本当に指を染めることがいいことだと信じている。何かたくらんでいるとは思われない。

そんなら、鉄砲をください。

子ぎつねははじめからぼくの鉄砲をとりあげたかった。鉄砲でぼくに復讐したいわけではないだろう。鉄砲をもらうためにぼくの前に姿を現したのだろう。

ぼくは、気前よく、鉄砲をきつねにやりました。

鉄砲と窓とを比べて、ぼくは、窓を選んだ。ぼくにとって鉄砲は、手放すところと困るものである。しかし生きていくなくなるほど大切なものではないということである。気前よくとあるから、執着もなく、きつねにやった。大造じいさんなら鉄砲を手放さないだろう。

なめこは、ちゃんと、ポリぶくろに入れてありました。

最後にぼくの手元に残るのはなめこだけである。窓を失い、子ぎつねとも二度と会えない。なめこが残っていることで、子ぎつねとの出会いが夢でなかった証拠となる。

林の中を二百メートルほど歩いたら、ぼくの小屋に出るのだと、きつねは言いました。

子ぎつねはぼくの小屋を知っている。

すると、今度は、窓の中に雨が降っています。

窓の映像が変わっている。

ああ、あの葉をつみに、母は庭に出てこないのでしょうか…。

ぼくが見たいのは母親である。しかし二度目の窓に人は現れない。窓の中でも会いたい人の姿を見ることができないので、ぼくはとてもせつなくなる。

あれはぼくの声、もう一つは死んだ妹の声…。

ぼくの妹も死んでいる。窓からは音が聞こえてくる。妹の姿も見ることができない。

ぼくはその晩、もらったなめこを食べるのもわすれて、がっくりとうなだれていました。

うなだれていたとあるので、がっかりして、落ち込んで首を前へ垂れた。

ききょうの花畑など、どこにもありはしないのでした。

ききょうの花畑も子ぎつねのつくり出した世界だった。ぼくは、子どもの店員に化けた子ぎつねにだまされたふりをし

た。しかし、本当は子ぎつねの方が先にぼくを化かして、ききょうの花畑におびき寄せていた。

が、あれっきり、一度もぼくは、きつねに会うことはありませんでした。

鉄砲と交換したものは窓でなくなめこだった。鉄砲をもたないぼくに子ぎつねは再び姿を現さない。子ぎつねにぼくはうまく化かされた。

三 考察

(一) 境界を結ぶきつね

「きつねの窓」において「ぼく」は鉄砲を持ったハンターである。一人ぼっちの「ぼ



く」に対して、母親を鉄砲で殺され一人ぼっちになった白い子ぎつねが関わろうとして対話を求めてくる。子ぎつねは撃たれる危険を冒しながらあえて「そめものききょう屋」として「ぼく」の前に姿を現したのである。テキストでは語り手でもある「ぼく」が子ぎつねとの関係で主導権を握っているかのような語りがなされている。子ぎつねを見つけて追いかけたのは「ぼく」の意思である。また正体を見破ってだまされたふりをしたのも「ぼく」の意思である。しかし実のところ、語り手である「ぼく」がそのように思いこんでいるだけのように思えてならない。その証拠に出来事は子ぎつねの思惑通りに展開していく。「ぼく」はついに自分の意思で気前よ

く鉄砲を手放してしまふ。白い子ぎつねは「ぼく」を自らの意思で行動しているように錯覚させながら、意図的に誘い込んでいなのだ、と推測することもできるだろう。

「そめものききょう屋」として登場する白い子ぎつねの現われ方は日常の論理を超えている。子ぎつねは非日常の行為によって、きつねの世界と人間の世界との境界を越えたのである。非日常の行為によって境界がいまいなものとなったからこそ、「ぼく」と子ぎつねとの対話が成立し得たのだと言えるだろう。

野生のきつねと人間とは本来、互いに侵すべからざる領域を持つている。互いの境界を侵す時、きつねは人間に害（いたずら）をもたらしたし、人間はきつねを捕えようとした。通常きつねと人間とが境界を越えることは衝突を意味する。ところが「きつねの窓」をはじめとするきつねの物語においては、この境界をきつねが結んでいるところに類似性を見出し得る。きつねの行為は境界を越えるだけでなく境界そのものをあいまいにしている点が特徴的である。そこではきつねの行為はいずれも例外的な逸脱である。

「ごんぎつね」では、ごんがおつかあの亡くなった兵十に、くりやまつたけなどを毎日届ける。ごんの行為はうなぎを逃がしたといういたずらに対するつぐないであった。同時に、一人ぼっちのごんが、やはり一人ぼっちとなった兵十に向けて行う求愛でもあった。つぐないにせよ求愛にせよ、小ぎつねごんの人間への接し方は、きつねとして逸脱した行為である。ごんの逸脱はきつねの世界と人間の世界との既存の境界

線、不幸な関係をあいまいなものにした。そして、ほんと兵十は友達になって分かり合えるのではないか、という希望(幻想)を読者に与えることになった。ごんはつぐない、あるいは求愛によって人間ときつねとの新しい境界を切り結んだ。

「手ぶくろを買いに」では、子ぎつねが自分の手ぶくろを一人で買いにでかけることになる。母さんぎつねはどうしても足がすすまなかった。人間に追いまくられて命からがら逃げた経験を持っていたからである。子ぎつねは貨幣と手ぶくろとを交換するために町に出かける。それは子ぎつねの人間観察でもあった。手ぶくろを手に入れるために子ぎつねが境界を越えていく。

「チロヌップのきつね」では、ちびこぎつねがきつねの家族に愛されて育っている。しかし無邪気さ、あるいは思慮の無さから人間の前に姿を現した。まだ警戒を知らないちびこは小屋までついて行き、じいさんとばあさんの娘となった。ちびこはそこでも二人に愛された。ちびこは愛される存在、愛を享受する存在である。求愛によって境界を結ぶごんとは対照的である。愛を享受することではちびこは境界を越えた。言いかえると、ちびこは人間に所有されることで境界を越えた。ばあさんのつけた赤いリボンがその象徴であると言えるだろう。やがて、ちびこは再び境界を渡ってきつねの世界に戻っていく。ばあさん達が島を離れることになり、きつねの家族のもとに返されることになったのである。赤いリボンははずされず、ゆるめられて、逸脱者としての徴(しるし)を身につけながら帰っていく。ちびこぎつねは愛の享受によって

人間ときつねとの境界を横断した。

(二) 逸脱の結果

きつねが境界を結ぶことで、きつねと人間との関係は流動化する。「きつねの窓」の「ぼく」は白い子ぎつねと対話することで、お互い一人ぼっちであることを知った。お互い一人ぼっちでさみしいのだと理解したのである。ごんが兵十に対して抱いたように、「ぼく」は子ぎつねに対して親近感を覚えた。

しかし「ぼく」と子ぎつねは本当に分かり合えたわけではない。親近感を覚えたのは「ぼく」の一方的な思いである。子ぎつねが一人ぼっちとなったのは母親が鉄砲で撃ち殺されたためであり、「ぼく」は他ならぬハンターなのである。あいまいとなった境界によってきつねと人間とが分かり合えるかもしれない。読者の抱くこのような希望は、かえって本当には分かり合えない両者の断絶を強調することになる。死の影が絶えずきつねの物語を覆っているのである。

「きつねの窓」の死の影とはなんだろうか。母ぎつね、大好きだったあの子、母親、妹と亡くなった人物が語られる。また私は「ぼく」の死を連想せずにはいられない。「ぼく」と子ぎつねの間には窓と鉄砲の交換という契約が成立した。それにも関わらず、物語の最後には喪失感とわずかばかりのなめこだけが残される。精神的な死、あるいは狐憑(こりょう)と言い換えても良いだろう。「きみはへんなくせがあるんだな」と笑われるのも、続く「ぼく」の崩壊の物語を予兆しているように思

われる。記憶の中にしかなかった思い出が、像として表れることを知り「ぼく」は心を奪われた。指を洗ってしまうのも、鉄砲を自分の意思で手放したのと同様に子ぎつねの思惑通りであったのではないだろうか。一連の出来事を夢であつたと納得しようにも、なめこの存在がそれを拒否する。

きつねが境界を結ぶことで、お互いが分かり合えるのではないかというわずかな希望が生じることになる。しかし、その希望は本当には分かり合えないのだという断絶を強調し、不幸な境界線が増幅されていくのである。きつねの物語を覆う死の影は、きつねのみならず人間をも包み込んでいる。きつねの物語に通底する低周波は表面の明るさや素朴さと裏腹に深い断絶を奏でている。「手ぶくろを買いに」において、無事にきつねの世界へ帰りついた子ぎつねの説明に対して、母ぎつねの抱く疑問がこの深い断絶を表している。「本当に人間は、いいものかしら。本当に人間は、いいものかしら。」とつぶやく母ぎつねは、子ぎつねの人間に対する素朴で性善的な見方が、偶然によって形成されたものであることを言語化できないところで看破しているのではないだろうか。

(三) 隣人を象徴するきつね

人間ときつねとの境界を強調する限り、お互いの関係は不幸なものであり続ける。しかしそれでも物語の中できつねと人間とは関わり続けていくのだろう。きつねの物語はわずかな希望が残されている点でも類似している。

「ごんぎつね」では、ごんの最期の時にはじめて兵十との間

に心の通じ合いが起こった。兵十がごんをうたなければ、あるいは分かり合える時が来たのかもしれない。このような希望が残されることになる。

「手ぶくろを買いに」では、手ぶくろと人間の子守唄とが境界を無効にする可能性を示している。きつねも人間も寒さに震えることもあれば、親の愛に包まれることもあるのだ。共有できるものがあるのだという希望が残されている。

「チロヌップのきつね」では、きつねざくらが象徴となつた。きつねざくらが語られる時には、同時にちびこぎつね達の悲しみをよみがえらせることになるだろう。きつねざくらに意味が付与され続ける限り、同じような悲劇を起こさない、あるいは起こして欲しくないという希望が生き続けることになる。

きつねの物語においてきつねと人間とは、境界を接しながらも隣人として生き続ける存在として描かれている。現代の私達の生活ではきつねと境界を接する機会ほとんど存在しないと行って良いだろう。それにもかかわらずきつねの物語は私に現実感や切実さを持つて迫ってくる。「きつねの窓」をテキストとして読んだ時、私の前にはきつねの存在が、現実の何者かの隠喩(メタファー)として立ちあがってくるのである。その何者かは、私にとつて隣人であるだろう。彼(彼女)とは、分かり合いたいと思っているのに分かり合えない関係であるだろう。もはやきつねの物語は彼岸の物語ではあり得ないのである。

お母さんの木（大川悦生）

寺田 守



一 作者と作品について

大川悦生（一九三〇～一九九八）は、学生時代に大隈講堂で観た「ぶどうの会」の『夕鶴』公演に感銘を受け、庶民の口づたえの物語に確かなものがあると考え始めたという。六〇年代より全国各地を歩いて民話を集めた。本作は現代民話集『おかあさんの木』（ポプラ社、一九六九年）の一編として発表された。

「お母さんの木」は、現代民話と戦争児童文学という二つの顔を持ったテキストである。民話のような親しみ深い語り口で、現代の庶民の物語を綴れないものだろうか、という意図をもって執筆された現代民話である。再話や創作民話に対する現代民話とは何かについて西田良子は次のように説明している。（注¹）

ところで、これらと相前後して現れた〈現代民話〉は、題材は創作民話のようなフィクションではなく、現在ひとびとの間で噂になっている出来事を、語り伝えるために作品化したもので、最初は大川氏の『お母さんの木』や山口勇子氏の『おこりじぞう』、松谷みよ子氏の『まちゃんと』『ぼうさまに

なつたからす』のように、戦時体験の作品化が主であったが、最近民話の研究会が集めた「現代民話」のように、学校に伝わる怪談や武勇伝、汽車や自動車に乗っていて体験した奇妙な出来事、アパートの中で噂されている不思議な出来事なども〈現代民話〉として語られるようになった。

大川は、執筆後活字にする前に学校で読み聞かせの実践をしてもらったと語っている。語られることを強く意識した民話の文体が「お母さんの木」の特徴である。だから音読の指導や読み聞かせに馴染みやすい。

他方で平和教材としての側面がある。あの戦争といかに向きあうか、という問題が作者の執筆の動機であったし、「お母さんの木」の読者にも問われることとなる。大川悦生は執筆に到った経緯を次のように述べている。（注²）

実際には殺しあいの場に立たなかったし、炎のなかを逃げまどったりもしなかった十五歳の少年に、これだけ死を思い詰めさせた戦争ってなんだろう？ ほんとうに修羅場に立たされ、軍隊と戦争の実態をいやというほど見てきた人たちはどうなのだろう、と、わたしは考えた。そして、少年期の終わ

りから三十代に至るまで、いつも次の二つのことがからみあって離れなかった。

一つは、教育が持つ魔力とでもいったらいいだろうか。もう戦争で死ぬことはなくなっただと思ったとき、それと反射的に、ぼくらはずっとお国のために喜んで死ぬる男になることしか教えられなかったじゃないか、これからどうしてくれるんだと叫びたい気がした。(中略 寺田)

もう一つは、敗戦後のおとなたちの変わりようと、決してありのままを明かしはしないことへの不信だった。急にガラリと態度を変え、俺はなにもかも最初っからわかっていたんだとうそぶく教師があった。戦争も軍隊も要領次第さ、勝とうと負けようとどっちにも俺のやりようがあると笑って、ヤミ商売にかけまわる兵隊帰りがあった。ぼくたちを置き去りにして、おとなはなぜ勝手に変わることができるんだと、わたしは本気で憤慨した。

こうした作者の思いに教師の思いが重ねられ教室で扱われてきた。あの戦争が何だったのかを、子どもたちが(私)の問題として引き受けるためにも、「お母さんの木」が提出している問題領域を適確に扱い、意味を問うことが重要である。なお教科書には二社(一九七七、一九九二、一九八〇、二〇〇〇)の小学五年に採られたが、現在は掲載されていない。

(注1) 西田良子「(現代民話)を語り継ぐことの意味」安藤美紀夫編『文学教材の研究2』教育出版、一九八二年、六

六頁

(注2) 大川悦生「一五歳の夏を起点として」日本児童文学者協会編『国語教科書攻撃と児童文学』青木書店、一九八一年、一五四―一五五頁

二 叙述について

お母さんの木

お母さんの植えた木(きり)のことなのか、それとも、お母さんの思い出の木(かしぐるみ)のことなのか。本文中には、むすこたちのきりの木、おばあちゃんのくるみ、という表現が出てくる。いずれの意味であっても、木の話を通してお母さんという人物について語られる物語だ、という点で共通している。

少し昔のことだけどー

昔々の話ではない。

あるところに、一人のお母さんがおって、そのお母さんには、七人のむすこがおったそうなの。

場所は特定されない。民話の語り口による物語。

昭和十二年という年(一九三七年)、中国との戦争が起こって、なかなかやまんで、とうとう世界中を相手にするような大戦争へ広がってしまった。

時ははっきりと記されている。日中戦争から太平洋戦争にかけての物語。広がってしもうた、というところから、戦争が広がって欲しくなかったという思いが、語り手にあることがわかる。実際には自然に広がったわけではない。日本が戦争を広げていったという認識がない。

大きくなったむすこたちは、一番上の一郎から順々に、陸軍だの、海軍だのへ、兵隊にとられていった。

とられていった、とあるので進んで兵隊に行つたのではない。職業軍人ではない。「一つの花」のゆみ子のお父さんのように徴兵されていったのだろう。

そのとき、お母さんは、何と思いなさつてだろう。

むすこが出征した時のお母さんの思いが物語の関心の中心である。

毎朝、その木に水をやるやら、支えを立ててやるやらしては、「一郎、おはよう。」「二郎、おはよう。」「三郎、おまえも戦地で元気かいな。ひきょうなまねはせんと、お国のために、手がらをたてておくれや。」と言いなさつたそう。

水をやるやら、支えを立ててやるやらして、とあるので、そのほかにも手をかけて世話をした。名前をつけて、話しかけているので、お母さんにとってきりの木は、むすこの代わりだった。それほど大事なむすこだった。

ひきょうなまねをせんと、というのは戦争の相手の国に対

してひきょうなまねをするなという意味ではない。相手にうそをついたり、だましたりするな、罪のない人を殺すな、という意味ではない。自分だけ助かりたいという思いで戦いから逃げたりせずに一生懸命戦つて手がらをたてなさいという意味である。

どうせ植えるなら、葉っぱばかりの木よりか、実がなつて食べられる木のほうがいいよ、とも言うた。

末のむすこたちは、お兄さんの代わりとしての木に、あまり関心がない。

それでもなんでも、お母さんは、わたしの好きですることだからと言いなさり、大事に、大事に、むすこたちのきりの木を育てた。

末のむすこたちと対話が成り立っていない。それでもなんでも、という表現が、物語中に四回でてる。いずれもお母さんが、誰がなんと言おうと、どんな状況になろうときりの木を大切にする場合で使われる。

そして、だれのいたずらだら、〈二郎〉の葉がむしられておるのを見ては、「おお、二郎、どこぞぐあいを悪くしたか。早くようなれ。戦地の水は悪いで、生水など飲んだらいけんぞ。」と案じなさる。

案じなさる、とあるので、二郎のことを心配なされる、気かけられる。お母さんは、きりの木の変化が、二郎の変化

に結びついていいると思つていいる。きりの木がむすこたちそのものとなつていいる。

また冬の日、はだかの枝先が、北風にヒュンヒュンふるえておるのを見ては、「これ、おまえたち、しつかりせえや。うんと氣を張つておれば、かぜもひかんものだにな。」とはげましなざるししたのだそふな。

はげましなざる、とあるので、お母さんがこどもたちに元氣を出すように力づける。ヒュンヒュンふるえて、とあるので、風を切つてぐるぐる揺れる。お母さんはむすこたちも北風に吹かれていいると思つていいる。

三年過ぎ、四年がたつた。

過ぎる、経つ、共に年月が経過するといいうこと。

むすこたちのきりの木は、四本に増え、五本に増えして、少しづつちがうせたけで、すつくらとのびた。

四本に増え、五本に増えして、とあるので、五人のむすこが出征した。三年過ぎ、四年がたつた、と響き合ひ、一度でなく徐々にむすこたちがとられていつた。すつくらと、とあるので、すくすくと、すつくりと、うまい具合に伸びた。

ところが、ある日、その木は何の変わりもなかつたに、役場の人が改まつてやつてきて、一郎が中国大陸で、メイヨノセンシヲトラレタといいう、知らせをくれた。

その木は何の変わりもなかつたに、と逆接で結ばれていいる。木とむすことの因果関係は本来ない。お母さんにとつては、すでに木とむすこが切り離しがたい関係で結びついていた。メイヨノセンシヲトラレタは、戦死を伝える定型文。戦死が名誉であるといいう価値観が示されていいる。

お母さんは、むねもつぶれんばかり、たいそうおどろきなさつたけれど、じつところえて、手をついて、「ご苦労さまでござんした。あの子が、お国のお役にたてて、うれしゅう思ひます。」といひなさつた。

むねもつぶれんばかり、とあるので、驚きや悲しみに心がひどく動揺した。じつところえて、とあるので、我慢して、耐えて。お国のお役にたてて、とあるので、ひきよなまねをせず戦死することが国のためになるといいう価値観を示していいる。

そのときも、お母さんは、人前では、なみだ一つこぼさんかつた。

本当は悲しい。しかし、うれしゅう思ひます、といいうお母さんは一郎の死を誇りに思つていいる姿を人前で示していいる。軍国の母としてふるまつていいる。

（一郎）の木にとりすがり、かたい幹にほおずりしながら、「一郎、一郎、さぞつらかつたらうね。たまに当たつて、どんなにかいたかつたらうね。死にたくなかつたらうね。」といいうて、

泣きなさったそうな。

死にたくなかったろうね、とあり、うれしゅう思います、という言葉と対照的である。子どもは本音と建前という関係を読み取るだろう。しかし、相反することばのどちらもお母さんの本音であると考えるべきである。人前でのことばは、嫌々言わされているのではなく、すすんで軍国の母として振舞い発せられているから。とりすがり、とあるので、離れまいとして、しがみつく。

前には、「ひきょうなまねはせんと、お国のために手がらをたてておくれや。」そう言いなさっておったのが、「二郎も、三郎も、四郎もな、一郎兄さんみたいに死んだらいけん。手がらなんて、たてんでもいい。隊長さんにほめられんでもいい。きっと、生きて帰っておくれや。」と言いなさるようになった。

きりの木の前では、お母さんは、いつも本音を語っている。ひきょうなまねはせんと、から、きっと、生きて帰っておくれや、へと変化したのは、建前と本音でなく、お母さん自身の認識の変化を示している。きっと、生きて帰って、とあるので、必ず、確実に生きて帰ってほしいという強い願い。

お母さんの所へ来て、なじるように耳うちして、「そんなこといひのれば、戦争に協力しない非国民と言われます。世間の口はうるさいで、氣いっけなされ。」と言ったり、変にえんぎをかついで、「きりの木は、冬、葉が落ちるからいいけん。みな、

お墓の木になるに、ぬいてしまいなさるがいい。」と言ったりしたのでそうな。

なじるように、とあるので、過ちを責めるように、問い詰めるように、詰問するように。耳打ち、とあるので、口を耳に寄せて、他の人に聞かれないうちに、ささやいて。非国民、とは国民としての義務にそむく者、戦争に協力しないことが、義務に背いているという考えを示している。世間の口はうるさいで、とあるが、耳うちしている人自身が、世間を代表している。えんぎをかついで、とあるので、将来の悪いことを思わせる前ぶれと考えている。この言葉を言った人は、葉が落ちること、お墓の木になることから、お母さんのむすこが死んでしまう前ぶれだと考えている。

それでもなんでも、お母さんは、今までとちつとも変わらず、大事に大事に、むすこたちのきりの木を育てた。

それでもなんでも、とあるので、何を言われても。ちつとも、とあるので少しも、全く。人の言葉に聞く耳をもたない。

そして、あるときは、一郎の写真をだきしめだきしめして、「今だから言うよ。おまえが、お国のお役にたてて、うれしいなんて、ほんとうなものか。戦争で死なせるために、おまえたちを産んだのでないぞえ。いっしょうけんめい大きくしたのではないぞえ。」と、生きている人に話しかけるように、言いなされた。

今だから、とあるので、一郎が死んでしまった今だから。

うれしいなんて、ほんとうなものか、とあるが、最初はきりの木にも、ひきようなまねはせんと、と言っている。一郎が死んでしまった今となつては、お母さんの考えが大きく変わったことを示している。

あるときは、また、遠い戦地の空のほうを、ながめながめして、「みんなのむすこや、父さんたちをたくさん死なせ、外国の町だの村だのをとったって、何のいいことがあるのかの。早く、戦争やめて、仲直りすればいいに。」と、やりきれない思いで言いなされたそう。

みんなの、とあるが、日本のみんなの、であるか、外国の町だの村だので暮らす人も含んだみんなの、であるかよくわからない。後のお母さんの言葉に、日本じゅうが不幸せになつてしまった、とある。ここでも日本のみんなの、という意味だろう。仲直り、とあるので、お母さんは戦争と喧嘩とを似ていると考えている。やりきれない、とあるので、我慢できない、たまらない、たえられない思い。

お母さんは、いなかのふつうのお母さんだから、むずかしいことなど、何一つ知りなさん。

むずかしいこと、とは、なぜこの戦争をするのか、戦争がどういふ状況なのか、戦争がこの先どうなるのか、といったこと。そういつたことは都会の専門家が知り、考えることだという認識が示されている。だから戦争を喧嘩と似ているものと思うことしかない。

また、二郎や、三郎や、四郎が、元気で帰ってくるときのことを思うて、せつせこ畑を耕し、いもやら、きびやら、豆やらを、たくさんに作りなされた。

せつせこ、とあるので、せつせと、休まずに、一生懸命に。

うらの空き地には、いつやら七本のきりの木がならんで、すつくら、すつくらとのびたが、あべこべに、お母さんのこしは、少しづつ曲がつていつたそう。

いつやら七本のきりの木がならんで、とあるので、そうこうしている内にもいつの間にか、七人のむすこ全員が出征した。あべこべに、というのは、反対に、対照的に。木がまっすぐ伸びていくのに対して、お母さんの腰がだんだん曲がつていくということ。

長い八年もの戦争じやつた。

昭和十二年七月七日から昭和二十年八月十五日までの八年。

東京や、大阪が丸焼けになって、大勢の人が死んで、広島と長崎には、ピカドンの原ばくが落とされ、また、数えきれんほどの人が死んだ。

東京大空襲は三月十日午前〇時七分から。大阪大空襲は三月十三日午後十一時五十七分から。広島への原爆投下は八月六日午前八時十五分。長崎への原爆投下は八月九日午前十一時二分。いずれも昭和二十年。

そして夏の暑い日のこと、いなかに月おくれのおぼんが来たとき、日本は負けた。

月おくれのおぼんとは、八月十五日のお盆。旧暦のころは七月十五日に行われていた。

お母さんは、がらんとした家の中で、お仏だんの前にすわって、じゅうずをもみながら、「とうとう、日本じゅうが不幸せになつてしまったのう。今では、もう、むすこたちみんなを返してと、いのることもできん。けど、一人でいいに、一人だけでいいに、どうぞ返してくださいや。」と言いなさったそう

な。
がらんとした、とあるので、家にお母さん以外誰もいない様子がわかる。むすこたちみんなを返してと、いのることもできん、とあるので、自分だけむすこにみんな帰ってきて欲しいといのるのは許されないと考えている。日本じゅうのお母さんがむすこを失っているから。

それでもなんでも、お母さんは毎日毎日、「一人でいいに、一人だけでいいに、どうぞ返してくださいや。」といのって、帰りを待った。

それでもなんでも、とあるので、全員のむすこが生きたくないと思われ状況であっても、それでも。

やがて、秋が来て、うらの空き地のきりの葉が、はたりほた

りと散り始めた。

はたりほとりと、とあるので、はらりと、静かに軽く落ちる様子。

すると、お母さんは、散り落ちた葉を、一まい一まい、「この大きいのは、二郎の葉……この厚ぼったいのは、三郎の葉……先がとがって、細長いのが、四郎の葉……これは五郎、すばしこくて、負けん気で、たまになど当たる子でなかったに……これは六郎、兄弟のなかで、いちばんやさしい子じやったが……そして、この小さいのが七郎の葉。」と、つぶやきつぶやき、拾いなさった。

むすこたちの特徴が表れている。二郎は、体格が大きい。三郎は、太く重そうな体格。四郎は、痩せて背が高い。四郎までは、葉の形と対応しているが、五郎からは、気質を表している。五郎は、機敏で負けず嫌い。六郎は、やさしい。七郎は、おそらくまだ少年だった。つぶやきつぶやき、とあるので、生きている人に話しかけるような様子と対照的に、独り言のように。

それから、深い息をして、こずえのほうを見上げながら、「なにも、おまえたちのせいではないぞえ。日本じゅうの、父さんや母さんが弱かったんじゃない。みんなして、むすこを兵隊にはやられん、戦争はいやだと、いっしょうけんめい言うておつたら、こうはならなかったでなあ。」と言いなさったそう。

日本じゅうの、父さんや母さんが弱かったんじゃない、とある

ので、親が戦争を止めなかったことが原因だと認識している。「こうはならなかった」とは、日本が戦争に負けて、日本じゅうのむすこが死んでしまったり、日本じゅうが不幸せになつたりはしなかったということ。「ひきょうなまねをせんと」、「お国のお役にたてて、うれしゅう思います」、「死んだらいけん」、「早く、戦争やめて、仲直りすればいいに」、「一人だけいいに、どうぞ返してくださいされや」、「戦争はいやだ」といっしょうけんめい言うておつたら、こうはならなかった」というお母さんの認識の変化は、多くの日本人の認識の変化の典型であるように思われる。

ぼつりぼつり、生き残つた兵隊が帰ってくると、お母さんは待ちきれなくてならなくて、汽車が来るたび、雪の線路ばたへ出てみなさつた。

待ちきれなくてならなくて、というのは、待つていられなくて、というほどの意味。

それでもなんでも、また秋が来て、きりの葉がはたりほとりと落ち始めると、「この大きいのは、二郎の葉……この厚ぼつたいのは、三郎の葉……先のとがって、細長いのが、四郎の葉……これは五郎、すばしこくて、負けん気で、たまになど当たる子でなかったに……。」と、つぶやきつぶやき、拾いなさつたのだそう。

それでもなんでも、とあるので、一年過ぎてでも誰一人帰つてこない状況でも。

そんなある日、はがき一まい来なんだが、破けた服を着、右足を引きずつた兵隊が、汽車からおりた。

はがき一まい来なんだが、とあるので、生きていたのか、いつ帰るとかの連絡もなかったが、突然に。兵隊、とあるが、一人の下級の兵士のこと。兵士の集団ではない。

歩いては休み、休んでは歩きして、お母さんの家のほうへやってきた。

やってきた、とあるので、視点がお母さんの家にある。

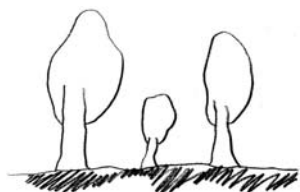
やつとこ、戸口へたどり着くと、兵隊は、なつかしように顔を上げ、「お母さん、おどろかんでください。五郎が、今、生きて帰ってきましたよ。」と言うた。

やつとこ、は、やつとこのことで、やつとこさ、ようやくのこと。おどろかんでください、とあるので、五郎は自分が生きて帰ってくることをお母さんが知らないと思つていて。お母さんがおどろくと思つて

夢ではない。

お母さんの夢ではない。

でも、なぜかしらん、家の中はひっそりとしておつて、返事一つ聞こえなかった。



ここから視点が五郎によりそっている。なぜかしらん、とあるので、五郎に理由はわからないが。返事一つ聞こえなかった、とあるので、五郎には聞こえてこなかった。

「お母さん、お母さん……。」とよんでも、ゆすぶっても、もう、目を開けてはくださらんかったそう。

もう、目を開けてはくださらんかった、とあるので、お母さんは、すでに亡くなっている。「くたそうな」とあるので、この物語が後に伝え聞いた話であることがわかる。

しばらくして、五郎は、お母さんの思い出に、丸い実のなるかしぐるみのなえを一本植えた。

教科書では、丸い実のなるかしぐるみ、とあるが、ポプラ社刊『おかあさんの木』では、あまい実のなるクルミ、とある。出征前に、どうせ植えるなら、葉っぱばかりの木よりか、実がなって食べられる木のほうがいいよ、と言っている。

水をやるやら、肥やしをやるやら、大事に、大事に、その木を育てた。

お母さんがきりの木を大事に世話したように、五郎も大事にかしぐるみの木の世話をしている。

そのとき、五郎はいつも、お母さんの思い出話を聞かせてやり、子どもらの頭をなでながら、「おばあちゃんが生きてくれたように、わたしは、もう二度と、おまえたちのためのきりの

木を、植えたくはないのだよ。」と言うのだそう。

おまえたちのためのきりの木を、植えたくはないのだよ、とある。が、本当はきりの木を植えたくはないのではない。子どもを出征させたくない、という意味である。

三 考察

お母さんの人物像を探ろうとするとときにまず気が付くのは、お母さんの発言が、いずれも対話になっていないという点である。対話状況の中でも、相手の反応を求めて投げかけた言葉でなく、モノローグとなっている。したがって、お母さんの発言の意味を考えようとすると、お母さんの発言の変化に注目することとなる。

お母さんの発言は、一貫して息子への慈しみの思いに溢れている。が、一方で、おなじきりの木に投げかけた言葉であっても、「三郎、おまえも戦地で元気かいな。ひきょうなまねはせんと、お国のために、手がらをたてておくれや。」と、「二郎も、三郎も、四郎もな、一郎兄さんみたいに死んだらいけん。手がらなんて、たてんでもいい。隊長さんにほめられんでもいい。きつと、生きて帰っておくれや。」との発言の間には、大きな変化がみられる。後者がお母さんの本音だとすると、前者はどのように理解したらよいのだろうか。

「お母さんの木」の場合、学習目標は、教科書も実践報告も一貫している。教科書は、お母さんの気持ちの変化を捉えるための手引きを用意しており、実践報告は、ほとんどの場

合、お母さんの変容を捉える学習目標を設定していた。そうした授業においては一郎の死の知らせを受ける次の場面が重要となる。

ところが、ある日、その木は何の変わりもなかったに、役場の人が改まってやってきて、一郎が中国大陸で、

メイヨノセンシヲトゲラレタ

という、知らせをくれた。

お母さんは、むねもつぶれんばかり、たいそうおどろきなさったけれど、じっとこらえて、手をついて、

「ご苦労さまでござんした。あの子が、お国のお役にたてて、うれしゅう思います。」
 と言いなさった。

涙もこぼさず「うれしゅう思います」と言ってしまうお母さんの気持ちを、授業でどのように扱うかという点に、「お母さんの木」の実践上の課題がある。表一はこの場面の授業記録が掲載されている文献をまとめたものである。そして多くの実践報告で、非国民、本音と立て前という概念を用いて、「うれしゅう思います」と言ったお母さんの気持ちを説明しようとしている。関可明はこうした理解を批判している。^(注3)

金城氏は、母親の内面を矛盾し合うものをはらんだものとしてとはとえていないようである。授業の中で、本音と立前

論が児童から出された時、それを是認している。(中略 寺田) 本音は、泣きたい気持ちであったが、非国民と批難される状況にあったので、「お国のお役に立てて、うれしゅう思います。」と言わざるをえなかったのだと読みとるだけでは、戦争への認識は深化しないだろう。不本意であっても手をついて「お国のお役に・・・」と言う行為自体が、戦争の流れに身を任せることにならないか。戦争という巨大な状況を作り出した者だけでなく、この状況に流された者の行為をも問わなくてはならない。本音と立前の二元論的な解釈では、主体の内部をとらえきれないし、人物の行為の意味、社会的に果たしたその役割を不問に付すことになってしまう。「日本じゅうの、父さんや母さんが弱かったんじや。」という言葉の深い意味やこのように自己反省する主体の弱さの根源に目を向けることが重要である。

さらに、息子が死んでも泣けないお母さんについて、「立て前と本音の微妙な違いについて考えさせる」授業の問題点を岩田道雄は次のように指摘している。^(注4)

状況としての把握が弱いのである。お母さんのこの言動は、当時の状況を押さえることなしに考えることはできない。本音と建前論は、その状況のきびしさを意識に入れているようではあるが、それはちがう。なぜなら「うれしゅうおもいます」といった時、お母さんはまだ、自分の本音には気づいていないはずだ。公報がきて、遺骨がきて葬式がとりおこなわ

れる中で、一郎の死が実感となり、悲しみとなって、やがて、手がらをたてることやお国の役に立つこととの矛盾に気づいてくるのだ。

そうでないとして、「三郎おまえも戦地でげんきかいな、ひきょうなまねをせんと、おくにのために、てがらをたてておくれや」といったこれより前の場面がまったく無視されることになる。あるいは、そこでのことはもたてまえになつてしまう。そうではない。元気で戦場で戦うこと、お国のためにてがらをたてること、それははじめのうち、お母さん自身が望んでいたことなのだ。侵略戦争を美化し、戦争で死ぬことを名譽とする非人間的・戦争の論理に当時の日本国民の大多数は毒されていた。このお母さん自身もはじめは例外ではなかったのだ。そういう戦時下の状況の中で母親の言動なのだ。立て前でそう言わせられたのではなく、死の知らせに対する動転驚愕の中で、軍国の母として戦争の論理で対応しているのだ。このあとである。お母さんが自身の中の本音に気づいてくるのは。

自分の息子の死も、すなおに悲しめない。そういう非人道的状況の中に戦時下の国民は追いこまれていた。(しかもそのことの非人間性に多くの人々は気づいていなかった。)それが戦争の本質なのだ。いかにも軍国の母的な形象を創り出すことによって、作者は戦争の本質を描き出しているのである。そこをとらえなければ、なんのために戦争児童文学をとりあげるのかわからなくなる。

そして、そうとらえたとき、泣けなかった理由を追及する

ことの授業の話し合いの弱さは明らかだろう。「人前で泣くとはずかしい」「役場の人からおかしいと思われる」「お国のお役にたつてくれといっていたから」等の発言を出発点にして状況の問題へ突っこんでいかなければならないのに、授業はそのまま流れている。その形象を状況としてとらえる教師の読みがなかったのではないだろうか。

岩田ははじめのお母さんの言葉もお母さん自身が望んでいたことなのだと指摘している。一郎の死の悲しみと、お国の役にたつこととの矛盾に気づいてくるお母さんの姿を、発話から読み取っている。この点で、一郎の死に対して「うれしゅう思います」といったお母さんの言葉が立て前である、という解釈と鋭く対立することになる。

たしかに、お母さんの発言は、少なくとも、きりの木に向けて投げかけられた言葉には、立て前はないはずである。そうでなければ、「ひきょうなまねをせんと、おくにのために、てがらをたてておくれや」と言ったときのお母さんの言葉が嘘になる。一郎の死の悲しみと、お国の役にたつこととは、どちらもお母さんの本音であり、だからこそ葛藤が生じているのだ。

現在のわが国の状況において、本音で「うれしゅう思います」と言ってしまう心境を、子どもたちが実感として理解することは難しいかもしれない。一郎の死の悲しみだけを母親の本音と把握する方が現在の価値観からも理解しやすい。非国民と言われるので、仕方なく立て前で「うれしゅう思いま

す」と言ったのだと理解すると、お母さんもまた戦争被害者であり、かわいそうな人ということになる。金城敏子は授業の振り返りの中で次のように述べている。(注⁵)

この授業も、できるならそのあたりまで(寺田注¹¹状況認識まで)話を発展させてみたいと思ったのであるが、教師の力量不足で、そこまではいかず「お母さんは、あわれだ、戦争は恐い、せつない悲しい。だから戦争は、ぜったいやつてはいけない。」という読みとりで終わってしまったが、それで満足したいと思っている。

しかしながら、「うれしゅう思います」という論理と、「そんなことをいければ、戦争に協力しない非国民と言われます。世間の口はうるさいで、氣いつけなされ。」という論理は、同根である。お母さんも、一郎の死の前は、うるさい世間の口に加担していたはずである。また逆に、お母さんになじるように耳うちした人も、大切な家族を兵隊にとられていった、いなかのふつうのお母さんだったはずである。

私たちは、テキストに向きあうとき、自分の所属する状況の論理を用いて理解しようとする。そのため異なった時代や文化の異なった論理を実感として理解することが難しい。そういうものだとしか理解しようがない。しかし、理解できない論理を、すべて自分の手持ちの論理だけで回収してしまわないことも、時に大切である。(ひっかかり)を(留保)しつづけることもあるいは読むことの方略の一つと言ってよいの

かもしれない。

「お母さんの木」における他のテキストに置き換えることのできない独自の意味は、息子に対する慈しみの論理と、お国のために役にたつてほしいという論理との間の緊張関係である。お母さんが両者を抱えざるをえないところに、葛藤が生じることとなる。こうした点に注目することがお母さんの人物像を探る上で有効だろう。

(注3) 関可明『「お母さんの木」授業小史』『国語の授業』

一九八二年二月、二七頁

(注4) 岩田道雄『読みの授業の基礎理論』一光社、一九九〇年、一三二〜一三三頁

(注5) 金城敏子『「おかあさんの木」(大川悦生作・箕田源二郎絵)―平和を希求する心を―』『季刊文学教育』一九八〇年八月、八一頁

[illegible]

・授出者	実践⑤	実践⑥	実践⑦
（内藤節子「国語の授業」 （一九九八年））	吉木才三「どの子も伸びる」 （一九九四年）	原田順彰「文学作品の指導計画と実践」 （一九九八年）	
目単 標元	①戦争の息子の無事を祈り、生還を願う母親の行為が、独自の観点から、戦争の考え方の変わりようを語ることができる。 ②戦争の息子の無事を祈り、生還を願う母親の行為が、独自の観点から、戦争の考え方の変わりようを語ることができる。 ③戦争の息子の無事を祈り、生還を願う母親の行為が、独自の観点から、戦争の考え方の変わりようを語ることができる。 ④戦争の息子の無事を祈り、生還を願う母親の行為が、独自の観点から、戦争の考え方の変わりようを語ることができる。	①戦争の息子の無事を祈り、生還を願う母親の行為が、独自の観点から、戦争の考え方の変わりようを語ることができる。 ②戦争の息子の無事を祈り、生還を願う母親の行為が、独自の観点から、戦争の考え方の変わりようを語ることができる。 ③戦争の息子の無事を祈り、生還を願う母親の行為が、独自の観点から、戦争の考え方の変わりようを語ることができる。 ④戦争の息子の無事を祈り、生還を願う母親の行為が、独自の観点から、戦争の考え方の変わりようを語ることができる。	
目時 標元	●一戦時下の戦況を伝えることができる。 ●一戦時下の戦況を伝えることができる。	●一戦時下の戦況を伝えることができる。 ●一戦時下の戦況を伝えることができる。	●一戦時下の戦況を伝えることができる。 ●一戦時下の戦況を伝えることができる。
記 録 業	●一戦時下の戦況を伝えることができる。 ●一戦時下の戦況を伝えることができる。	●一戦時下の戦況を伝えることができる。 ●一戦時下の戦況を伝えることができる。	●一戦時下の戦況を伝えることができる。 ●一戦時下の戦況を伝えることができる。

トロッコ（芥川龍之介）

一 作者と作品について

芥川龍之介（一八九二—一九二七）は東京生まれの小説家。生母発病のために生後七ヶ月で芥川家の養子となった。第一高校、東大英文科に在籍し、翻訳や小説を発表した。大正五年二月、久米正雄、松岡譲、成瀬正一、菊地寛とともに第四次『新思潮』を創刊する。これに載せた『鼻』が夏目漱石に評価されて、文壇に出た。主に短編小説を中心にして多くの作品を残した。昭和二年七月二十四日、「唯ぼんやりとした不安」により服毒自殺、享年三十六歳。

芥川の短編小説は、中学・高校の教科書によく採られている。高校の教科書には「羅生門」「鼻」などが掲載される。物語のみでなく、詩の「相聞」も採用されている。また、道德の副読本に「蜘蛛の糸」も用いられる。それは巧みに計算された構成や、ユーモアや世の中を批評する鋭い視点、描写の力による。「トロッコ」は雑誌『大観』第五卷第三号（大正十一年三月一日発行）からの出典である。この作品は芥川には珍しく一夜でできたといわれている。

「トロッコ」は、湯河原出身の力石平蔵が、幼年時代に熱海軽便鉄道が人車鉄道から軽便鉄道への切り替えを行って

徳原 唯、山田 智美、四方田 育恵

る工事を見物したときの回想を記した手記を、芥川が潤色したものである。良平のトロッコへの感情の変化が情景描写とともに巧みに描かれている。最後の段落で、大人になった良平の思い出として回想するという構成になっている。

教科書には、昭和四七年に初めて教材として登場して以来、現在に至るまで三省堂『現代の国語』に、中学一年生の教材として載せられている。初期の教科書には、最後に描かれている良平の現在の部分は削除されていた。

平成二十二年度現在、教科書で「トロッコ」を学ぶ生徒たちは、以下の文学教材を学習している。

- ・ 竜（今江祥智）
 - ・ アイスキャンデー売り（立原えりか）
 - ・ 空中ブランコ乗りのキキ（別役実）
- 生徒が近代文学に初めて触れる作品が、この「トロッコ」ということになる。

二 叙述について

小田原・熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。

小田原は神奈川県、熱海は静岡県にある。良平の年齢は、この物語の語りの時点で、少なくとも二十六歳を超えている。よって、これは二十年以上前の記憶を回想した物語である。

工事を——といったところが、ただトロッコで土を運搬する——それが面白さに見に行つたのである。

良平は、ただ純粹にトロッコの行き交う様子だけを楽しみにしていた。

煽るように車台が動いたり、土工の柵の裾がひらついたり、細い線路がしなったり——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思う事がある。

あおるようには、ここでは良平を対象にした表現であり、土工のはんてんの裾のひらつく様子や、細い線路のしなりなどとも結びつき、トロッコが良平の好奇心を掻き立てるものということを表している。トロッコを扱い仕事をする土工は、良平にとって魅力的であつた。

良平はのとき乗れないまでも、押すことさえできたらと思うのである。

「さえ」は「せめて」だけでも」という意味。押すことだけでもできたら……という未知のものであるトロッコに対する強い憧れがわかる。トロッコに乗ることが一番やってみたことではあるが、トロッコを扱うだけでも行ってみたくてという欲求を持っている。

ある夕方、——それは二月の初旬だつた。

仕事が終わわり、仕事場に人気がなくなる時間帯であつた。

二月の夕方というときまだ日が落ちるのも早く、夜になると相当寒い。これを念頭において読むと、この後の一人で家まで帰る場面はどれほど暗く寒いものであつたか容易に想像がつく。

良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行つた。

トロッコという乗り物は良平だけでなく、その頃の子どもたちにとって魅力的な乗り物のひとつだつた。

良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかつた。

良平の恐怖心や誰かが来たかどうかという不安に、以前から持っていた好奇心が勝り、トロッコの「ごろり」という音には一瞬戸惑つたが、すぐに楽しみに変化したことを表している。

良平はもう好いと思つたから、年下の二人に合図をした。「さあ、乗ろう！」

良平が主体となつて、弟たちに指示し、トロッコを操っている。そこには意気揚々とし、早くトロッコに乗ってみたくて仕方がないという子どもの無邪気な冒険心が表れている。

年下の子どもを引き連れて率先してトロッコに乗る良平は、ここではガキ大将のようなイメージを与える。ここまでの弟たちに対する態度から、普段はとても元気で好奇心旺盛な子どもであるということも分かる。

顔に当たる薄暮の風、足の下に踊るトロッコの動揺、――良平はほとんど有頂天になった。

薄暮とは夕暮れのこと。動揺とは、ここでは「物体が揺れ動くこと」。有頂天とは、もともとは世界の最上を表す言葉、転じて「我を忘れ、夢中になり、他をかえりみないさま」で、ここではこちらの意味。良平の気持ちの高ぶりが、風やトロッコの様子を通して伝えられている。短い時間ながらも初めての体験に良平の気持ちが高揚した場面である。今後はこまめで気分が高揚した表現はでてこない。



其処には古い印袴天に、季節外れの麦藁帽をかぶった、背の高い土工たちが佇んでいる。――そう云う姿が目にはいった時、良平は年下の二人と一緒に、もう五六間逃げ出していた。

トロッコに夢中になっていた中でも、ある程度は大人が叱りに来たらどうしようという不安を三人は持っていたため、瞬間的に逃げる事が出来た。

それきり良平は使の帰りに、人気のない工事場のトロッコを

見ても、二度と乗ってみようと思った事はない。ただその時の土工の姿は、今でも良平の頭の何処かに、はっきりした記憶を残している。

怒鳴られたことの恐怖が脳裏に強く焼き付き、トロッコがどんなに魅力的でも近づいてはならないということが良平の頭の中に強く意識された。

薄明りの中に仄めいた、小さい黄色の麦藁帽、――しかしその記憶さえも、年ごとに色彩は薄れるらしい。

この一文で、実はこの物語は回想であることがわかる。また、「色彩は薄れる」と表現することで、ある程度の年月が経っていることが予想できる。ただ「記憶が薄れる」のではなく、「色彩」と表現することで、一気に年月の経過を感じせるとともにこの後の描写をより鮮やかに感じさせる、表現の巧みさがある。過去の鮮烈な記憶も徐々に薄れていってしまいうほど、語りの時点では時間が経過したことを示している。

その後十日余りたってから、良平は又たった一人、午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた。

良平はやはりトロッコのことが気になって仕方がなく、もう一度乗ってみたいという気持ちがまだまだ強いということが表れている。

「この人たちならば叱られない」――彼はそう思いながら、トロッコの側へ駆けて行った。

怒鳴られたことの記憶がまだ鮮明で、トロッコに近づくのにも慎重になっていたが、先日に叱られた土工とは違って、親しみやすそうな若い男がトロッコを扱っていることに安心し、もう一度トロッコに乗ることを試みようとしている。

「おじさん。押してやろうか。」

素直に「乗せてください」というのではなく、「手伝ってやろう」という言い方をしてあわよくば乗せてもらおうとするところに、良平の子どものらしい、ほほえましい計算が見え隠れする。

「もう押さなくとも好い」——良平は今にも云われるかと内心気がかりでならなかった。

大人たちは仕事であるため、邪魔になれば簡単に自分はい追ひ払われるのではないかという不安を感じている。トロッコに再び乗れるかもしれないという期待とは対照的な感情である。

良平は「優しい人たちだ」と思った。

以前に怒鳴られた大人に比べると、予想したとおり、優しい大人であったと改めて実感した。しかしこれは子どもからの感想で、本当に子どものことを考えていた土工はどちらか、後でわかることになる。

良平はすぐに飛び乗った。

いよいよ待ち望んでいたトロッコに乗ることが出来るので、待ちに待った瞬間という風で、素早く反応した。

「登り道のほうがいい、いつまでも押させてくれるから。」

下りになってしまうと終わりが見える：いつまでも憧れのものに触れていられるという思いから、労力を必要とする上り坂の方がよいと感じたのである。押しながら、当たり前のことを、しかし普段は下る楽しさに目を奪われ、見落としがちなることを考えている。

「押すよりも乗る方がずっと好い」——良平は羽織に風をはらませながら、当り前の事を考えた。

初めは、乗ることが叶わなくても、トロッコを押すことだけでも出来たらと思っていたが、やはり良平がトロッコに惹かれていたのは、それに乗ることの楽しさであったと改めて実感されている場面。

「行きに押す所が多ければ、帰りに又乗る所が多い」——そうもまた考えたりした。

行きに頑張って押せば、帰りは乗る時間も長くなり、大変な作業も、楽しみにつながる仕事だと思えた。

と同時に良平の頭には、あまり遠く来すぎたことが、急にはつきりと感じられた。

そんなトロッコの面白さを楽しむ反面、見知らぬ風景が広

がつていくことへ少し不安を感じ始めた。直前にも「薄ら寒い」とあるように、見知らぬところへ来てしまった不安や焦りが表れている。それは、この前後に寒々しい表現が集中していることから推測できる。

しかし良平はきっきのように、おもしろい気持ちにはなれなかった。

良平にも薄々遠くまで行き過ぎるのではないかという不安が出てくる場所である。家がどんどん遠ざかってしまい、トロッコに乗っていると、自分の知らない土地が広がって来て、元々居た場所に帰れなくなるのではという不安を徐々に感じ始めている。

良平はいらいらしながら、トロッコの周りを回ってみた。

「悠々と茶などを飲み始めた」土工と対比がなされている。早く帰らないといけないと焦る気持ちと、それに対する呑気な土工との対比はこの後まで続いてゆく。自分のことを考えてくれないような無責任な大人に苛立ちを募らせている。あんなに自分を楽しませたトロッコでさえ何だか恨めしく感じられ、不安に駆られている。

良平は冷淡に「ありがとう」と云った。が、すぐに冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。

ここでの良平は、自分の機嫌だけで相手に接しては悪いと思える礼儀を弁えた子どもである。

菓子には新聞紙にあつたらしい、石油のにおいがしみついていた。

主に視覚から得られる描写が続いていたが、ここで味覚についての描写も出てくる。石油のにおいがするということは、菓子はおいしくなかったのである。早く帰りたいという気持ち、菓子をおいしくなくとも感じさせている。些細な感覚も細かく描写して気持ちを表すことが、この表現の優れているところでもある。

良平は車に手をかけていても、心は外の事を考えていた。

もうすっかり、トロッコのことは頭から抜け、ただ早く家路につかなければという不安だけに囚われている。

トロッコの車輪をけつてみたり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押してみたり、――そんなことに気持ちを紛らわせていた。

遅刻しそうなときなど、とりあえず何か身体を動かさずにはいられないという経験は、おそらく誰にでもあるのではないだろうか。また、このようにして態度に表すことで土工たちに帰らなければならないということを伝えようとしたかもしれない。ここでのトロッコは良平にとって、もはや楽しみの対象ではなく、苛立ちや不安を募らせるものではない。なかつてしまひ、蹴つたり無理に動かしてみたりと乱暴な扱いをするまでになっている。

ところが土工たちは出てくると、車の上のまくら木に手を掛けながら、無造作に彼にこういった。

土工は「無造作に」言ったのだから、良平の事情などはまったく気にかけた様子もないのである。または、土工たちは良平を置き去りにするなどという悪意などなかっただろう。しかし、良平にとってこの過酷な宣告は、「無造作に」言い放たれたと感じたのだろう。

良平は一瞬間呆気にとられた。

土工たちの、無責任とも思える言葉に驚き、思考が瞬間停止してしまっている。

良平は殆ど泣きそうになった。が、泣いても仕方がないと思っただけ。

恐れていた不安が現実のものとなってしまったから、ショックのあまり泣きそうになった。現状で土工たちが自分を家に送ってくれることは、彼らの言葉から絶望的であると悟ったから。

彼は若い二人の土工に、取ってつけたようなおじぎをする、と、どんだん線路伝いに走り出した。

この大人たちは自分を救ってくれなかったというショックを隠しきれずにいる。しかし、今は一刻も早く家に帰らなくてはという思いからすぐに駆けだした。

良平は、いよいよ気が気でなかった。

家に帰れなかったらどうしようと、絶望的な思いだけが良平の中で膨らんでいる。

「命さえ助かれば。」——良平はそう思いながら、滑つてもつまずいても走っていった。

線路は工事中であるので、とても不安定で暗い道である。まったく灯りのない中で、加えて野犬などの恐怖もあっただろう。一人ぼっちの帰り道で、絶望的な不安が巨大化し、良平の中では「死」という最悪の事態までもが想像されている。助かりたい一心で、とにかく家に帰ることを目指して走っている。

彼のうちの門口へ駆け込んだとき、良平はどうとう大声にわっと泣きださずにはいられなかった。

無事に家に帰れた安心感から、こらえていたものが溢れ出し、大声で泣いた。我慢しようと思っても出来なかった。今まで泣きそうになっても決して声を上げて泣かなかった良平がここでは堰を切ったかのように号泣している。

殊に母は何か云いながら、良平の体を抱えるようにした。

突然泣き出した息子を優しく抱きかかえ、落ち着かせてその理由を聞こうとしている。

が、良平は手足をもがきながら、嘔り上げ嘔り上げ泣き続けた。

抱きかかえようとする母親の腕の中に落ち着くこともなく、とにかく泣いて何かを表現しようとしている。幼い良平はこの時、様々な思いを泣くことでしか表現することができなかったとも考えられる。主に挙げられるのは恐怖だろうが、走りきった後でなお号泣するのには他にも理由があるのでないだろうか。優しい人だと思っていた土工たちから突き放されたことに対して、幼い彼は「裏切られた」という思いも少なからずあるはずである。

あの遠い路を駆け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、……

あまりにも長い道のりをたった一人で駆け抜けるにあたって感じた心細さ・不安・絶望感などをこらえきれず流した涙とともに思い出し、誰かに満たしてほしいと思い、泣くことで無意識的に誰かの慰めを求めている。

全然何の理由もないのに？

疑問形にすることで、本当は思いつくには理由があるということを表示している。おそらく、大人になった彼は全てが順調にいつているわけではなく、仕事や人間関係などによって疲れきった日々を送っているのであろう。

―塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりそのときのように、薄暗いやぶや坂のある道が、細々と一筋断続している。

「断続」とは切れたり続いたりすること。「薄暗いやぶ」や「坂のある道」は、絶望や不安の象徴として良平の中に描かれ続けている。つまり、塵勞に疲れた現在の良平にも不安や絶望がそばにあるということ。この最後の段落より、この体験は大人になっても忘れがたい強烈な経験だったということがまず分かるが、おそらく芥川はそれだけを書きたいがためにこの作品を書いたわけではないだろう。最後の段落は、この作品が教科書に掲載される中で削除され、また再度掲載されるに至った部分である。それは、中学生に人生の辛さや不安を教えるのには早すぎるという考えからである。この作品で重きを置く部分は良平の心情の移り変わりとそれに伴う風景の描写である。したがって、この部分を重点的に指導する必要はないが、生徒が大人になつてから本場にこの一文の意味を理解するようになるための、この部分も触れておくべきである。また、教師もこの比喻に対して考えを深めておくことが求められる。

三 考察

(1) 良平を通してみる心情の移り変わり

この作品では、良平の心が移り変わっていく様が巧みに描写されている。まず、前半を通して描かれているのが、良平のトロツコへの強い憧れの気持ちである。最初は、ただ見て

いるだけで満足していたが、それでは抑えきれずに人のいないのを見計らい、年下の子どもを連れてトロッコに乗ることを決行する。大人に見つかって叱られ、人気がなくても二度と乗るまいと決意するのだが、結局は、一度味わった快感とその奥にあるさらなる快感を欲して、再びトロッコに関わろうとする。これらの行動に、トロッコへの強い憧れと、良平の自分の欲求に素直に従う子どもらしさが描かれている。

二度目にトロッコに触れた時は、大人という以前に叱られた存在である人の了承を得てトロッコに触れているのであり、前回のようないくつかのことはない。しかし、今度はいつトロッコを押す役目からの解放を宣言されるかということに不安を感じる。若い二人の男は、良平のトロッコへの関心を察しているのか、良平が思ったようなことは決して言わなかった。下りに来たら、トロッコに乗れとさえいった。いつまでも押せるから上りの方がいいと考えていた良平だが、いざトロッコに乗るとやっぱり乗る方がいいと感じる。このあたりまえのことを感じるあたりの単純さが、子どもらしい良平を象徴しているように思われる。

しかし、こんなに素直な気持ちで憧れていたトロッコであるが、それは、自分の身が平穏な状況であるからこそその憧れなのである。しだいに辺りが暗くなっていき、帰宅を気にしだした良平はトロッコを押しても気は別の方を向く、といった状態になる。あんなに憧れていたトロッコがどうでもよくなるのである。そして、一人で帰宅することが決定的となったとき、命の危険まで感じだし、迫りくる恐怖や不安に

負けないように、ただひたすら走る。そして、家へ着いても、その不安や心細さを思い出し、ただひたすら泣くのである。憧れという概念は、いかにもろく、儚いものであろうか。

自分が安全で、平穏な状況にいるときはいくらでも強く思えるものであるが、一旦自分の身が不確かな状況に置かれると、そんなものは存在しなかったかのように、頭の中から消えてなくなる。そして、後年の記憶に残るのも、憧れていた気持ちよりも自分に襲いかかってきた不安や恐怖の気持ちの方が強いのだ。だから、似たような「この先」への不安を感じた時に、記憶が蘇るのである。このトロッコでは、欲求に率直で好奇心旺盛といった子どもという存在である良平を通すことで、人間の心情というものがその置かれた状況に伴い、いかに変わりやすいかを表現している。

(2) トロッコに見る芥川の人生

この作品はもとも芥川が年少者に向けて書いたわけではない。芥川の児童向けの作品は以下にあげるものである。

- ・蜘蛛の糸（大正七年四月）
- ・犬と笛（大正七年七月）
- ・魔術（大正八年一月）
- ・杜子春（大正九年六月）
- ・アグニの神（大正九年十二月）
- ・仙人（大正一一年三月）
- ・三つの宝（大正一一年十二月）
- ・白（大正一二年七月）

・三つの指環（大正一二年）

最後の「三つの指環」のみ未完成の作品である。これらの作品の特徴は、超常現象や不可思議なもの、空想上のものなどが登場し、教訓めいたものもあることが特徴である。しかし、トロツコは主人公の回顧録であり、特に教訓めいたものは見当たらない。強いていえば、遠くに不用意に行くところがなく、とも読めるが、良平の心に悪意なるものは存在しておらず、子どもらしい好奇心が招いた一連の出来事が回想の形で述べられている。よって、この作品の重きをおくべき場所は、自業自得の顛末を追うよりも、素直な子どもの心の動きである。この作品が中学校の教科書に採られたことも、良平の心の動きと心象風景を追っていくことを目標にしていると思われる。また、文学作品に親しむことを考えた場合、この作品は最後の一段落に至るまでの時間の経過とそれに伴う良平の心の動きが非常に明確であるという点も、読解力をつけるという点において好ましい作品である。中学の教科書で他の作品ではなくこの作品が採用されていることはそのような理由もあると考えられる。中学の国語の教科書で、幼少時代の体験を回想するというかたちで書かれているものは、他に「大人になれなかった弟たちに……」（米倉斉加年）や「少年の日の思い出」（ヘルマン・ヘッセ）などがある。これらも少年の登場人物の心の動きを中心に読みを深めていく必要がある教材である。前者は、作者の実体験を元にした作品でありながら、平和への切なる願いがある。

この「トロツコ」も、心象風景や登場人物の心の動きを読むことを中心とするのならば、どうして芥川が幼い頃を振り返って、人生の辛さを振り返る最後の一段落を入れたのだろうか。一つには、これは大人向けの作品であることがあげられる。幼いころのどきどきするような体験や、取り返しのつかないことをしてしまったことに対する焦りは多くの人が共感できるものである。しかし、昔を振り返って、今の生活と比べて懐かしんだり、あのとときの言葉にはこんな意味があったと分かるようになったりすることは、大人特有のものである。大人になった筆者は執筆活動に不安などの暗い感情を募らすこともあったという。子どものころの無邪気さを思い出すとともに、人生の辛苦も思い出している。

中学生もこのような芥川の意図するところをなんとなくは分かるかもしれない。しかし、終わりの見えない仕事に対する絶望や不安はまだ経験していない年齢である。その生徒たちに、無理に人生はこのように暗いものである、と決め付けて教えてしまってはならない。これはあくまで芥川の厭世観と、子ども時代に体験するような不安とどうしようもない局面を重ねているわけで、絶対のものではない。「主人公はこう重ねている」ということを押さえさせることに重きを置きたい。そして、この教材で読解し、頭の片隅に残った「細々と一筋断続している」道がどのようなものか生徒たちが分かる日も来るはずである。

ふる場の散髪―続岳物語―（椎名誠）

小倉 歩、靱山 小奈津、森川 みど梨、山本 舞



一 作者と作品について

作者、椎名誠（本名は渡辺誠。椎名は旧姓で、結婚したときに妻の渡辺一枝の姓に合わせ渡辺姓となった。）東京都世田谷区三軒茶屋生まれ。父親は公認会計士。千葉市立千葉高等学校卒業。東京写真大学（現東京工芸大学）中退。

異母兄弟を持ち、下から二番目に生まれ、長兄とは約二十歳離れている。読書が好きで、SFやナチュラリズム系の本、海外旅行記などを好んで読んだ。また映画少年でもあり、小学校から高校時代に掛けてカメラ小僧であった。

小学校六年の時に父親が亡くなり、中学に進学するとガラの悪い学校で、以降、高校まで喧嘩にあけくれたという。一方、中学三年でハミリの自主ニュース映画を撮った。

流通業界の専門誌『ストアーズレポート』を現在刊行しているデパートニューズ社（現・ストアーズ社）に入社。編集者として才能を発揮し、ストアーズレポートは椎名が企画し創刊、編集長を務めていた。同社勤務中、同僚の目黒孝二、菊池仁らと一九七六年、『本の雑誌』を創刊。『本の雑誌』誌上での椎名の「面白文体」の文章が評判となり、一九七九年『さらば国分寺書店のオババ』（情報センター出版局刊）でエ

ッセイストとしてデビューする。その軽快で口語調の文体は昭和軽薄体と呼ばれ、一躍マスコミの寵児となり、ストアーズ社を退社して執筆業に専念する。

その後は小説に進出、私小説、SF小説、超常小説を多数発表。文筆活動以外にも、辺境の地への冒険をライフワークとし、ドキュメンタリー番組によく出演するほか、旅先での写真を多数発表。また本好きの習性として、旅先にも大量の本を持参して読了している。写真好きでもあり、写真と文章とを収録した著書も多数発表している。

本作品は、「続岳物語」を出典とする。教科書に収録するにあたり、若干の改変を施し、文章の題名も「ふる場の散髪―続岳物語」とした。

父と子の物語であり、強制的な散髪を拒むことで、子の小さな自立が開始される。いつかそんな日が来ると予感しながら、子の成長の突然の発露に面食らう父の姿、不用意に親離れを宣言してしまった後で、もう後戻りができないことを知った子のとまどいが描かれる。やり取りの中で、二人は少しずつ溝を埋めていく。新しい父と子の関係を模索していくのである。

「続岳物語」は「岳物語」の続編である。「岳物語」は、椎

名誠の息子、渡辺岳の成長を捉えた私小説である。娘（岳から見た姉）の渡辺葉については本人の希望により一切書かれていないため、岳が一人っ子のように描かれている。作品中では家族名が（「渡辺家」ではなく）「シーナ家」となっていることから、出版社の目録では「フィクション小説」と扱われる場合が多い。椎名自身はさらに長期にわたって書き続ける予定であったが、息子が、小説の登場人物にされるのを嫌がるようになり、中断した。

二 叙述について

夏は少年にとって大きな脱皮の季節なのだろう。

物語の設定が、夏であることがわかる。脱皮という表現から、少年の成長をイメージできる。

すでに声変わりし、顔つきになんとはなしの「男の意志」のようなものが表れてきた。

岳の父の視点から述べられている。「すでに」から、父が思っている以上に早く声変わりしたと考えられる。容姿での少年から男性への変化が感じられる。

わたしが今までずっとふる場で刈っていたしろうととこ屋をいやがるようになったのは、そのシベリアの旅から帰ってすぐのころだった。

シベリアの旅の前までは、父に髪を刈ってもらうことを嫌

がっていなかった。

すると岳は「まだいいよ。」と、わたしの顔を見ずに言った。父に散髪されることをはっきり断っていない。しかし、顔も見ずに答えていることから、断ることを少し遠慮している。父に散髪されたくない気持ちがあり、散髪を先延ばしにしようとしている。

すると岳はその時もわたしの顔を見ずに「まだいいよ。」と言ったのだ。

前と同じ返答をしていることから、岳の意志が変わっていないと考えられる。また、父の申し出を断る返答が思いつかなかったのではないだろうか。

「まだいいよじゃないよ。来い。いつしよにふる場に来い！」最初は語尾に「よ」がついているが、その後が命令形になっていることから、父が徐々に岳にいらだっていることがわかる。

わたしはなんだかみようにいら立ちながら、わたしを見ようとしないうつ顔をにらみつけた。

父は、いら立ちの正体がわかっていない。今まで岳に対して、いら立ちを感じたことはほとんどないのではないだろうか。いつもは素直に従う息子が散髪を拒否したことに驚きも感じている。

岳はふくれつつらをしていたが、黙ってわたしの言うことを聞いた。

「ふくれつつら」とあり、岳が不機嫌であることが分かる。しかし、父の勢いに圧倒されて、黙って父の言うことを聞いている。

いつもだったら、わたしが電気バリカンの用意をしている間に、．．おとなしく頭を刈られるのを待っているのである。

以前の岳は、ふる場での散髪を嫌がらずにすんなりと受け入れた前文の岳は、父に言われても座ったまま動かないとあるので、ここで岳の変化がわかる。

そしてかたくなに動こうとしなかった。

「かたくなに」とあり、ふる場についてから、岳が座ったまま微動だにしていなかったことがわかる。岳は、これまで父に對してなかなか思ったことを言うことができていない。うまく伝えられない思いを抱えたまま、ただ言うことを聞かずに座っていることが彼の唯一の父への抵抗である。

わたしはかれが腹を立てているらしい、ということを知って、



わたし自身も少し腹を立て始めていた。

父は、まだ、岳の変化に気づいていない。この時点では、いつもと同じように自分は散髪してやろうと思っているにもかかわらず、前までは素直に自分に従っていた息子が腹を立てていることにいら立っている。

するとその時、岳は片手でわしづかみにしているわたしの手首を逆ににぎり、頭だけくるとふり返るとそのままわたしをにらみつけた。

今まで動かなかった岳が、ここではじめて父への抵抗を別の形で示している。父の顔を見ずに「まだいいよ。」と言っていた彼が、父をにらみつけていることから、勝手に散髪されることが相当不満であったことが考えられる。

「おとうはよ、こんなふうに勝手に自分の好きなように人の頭を刈っていつておもしろいか！」

ここで、はじめて岳が口を開く。「勝手に」とあるので、岳の意志に関係なく頭を刈るという意味。

いつになく強い調子だったので、わたしは少しおどろいてしまった。

父は、岳の今までとは違う様子に少し驚いている。こんなに強く自分の気持ちをぶつけられたのは、初めてだったのではないだろうか。ここで、岳の変化に、父は少し気づき始めた。

そこまで言うとな鼻の付け根の辺を赤くし、わたしをにらみつけながら不意にぼろぼろと大つぶのなみだをこぼし始めた。

怒りと興奮で、感情のコントロールがうまくできずに泣いている。岳が父に対してここまで感情をあらわにしたのは、これが初めてではないだろうか。

岳のそんな反応を見るのは初めてだったので、わたしはそこで本当におどろいてしまった。

岳の反応は父の予想をこえたものであった。まだまだ子どもだと思っていた岳の変化に父がようやく気づいた瞬間ではないだろうか。

「何だ？ぼうずにされるのがいやなのか？」

怒っていた父だが、会話が疑問形になっていることから、なんとか岳の気持ちをくみとろうとしている。

「そんなことは言っていないよ。」

前述の父の問いに対しての答えである。岳も父の反応に少し落ち着きを取り戻し、会話をしようとしている。

黙っていることで、なんとなくやつの言おうとしていることがわたしには分かってくるような気がした。

父は、岳の黙っている行為が何かのメッセージであると感じた。「分かってくる」とあるので、父は分かるうとしたので

はなく、雰囲気伝わってくるものを感じ取った。

わたしも少し黙り、次に何を言おうか考えた。

岳に言う言葉が見つかっていない状態。岳と同じように黙ることで、何か言うことが見つかると思ったのではないだろうか。

そしてその気配はなんとなく一つのことに固まりつつあった。

その気配とは、黙ることで岳の言おうとしていることが父になんとなく伝わりうとしていることである。つまり、父は、岳の伝えたいことを自分の中で一つに絞ることができた。

わたしはそのことをもう一度、今度は静かな口調で言った。

静かな口調で言うことで、岳が答えやすくしていると考えられる。ここでの父は冷静に岳と向き合っている。

岳は黙ったままだった。

父の発言にどう答えようか考えている。岳は、思ったことをすぐに口に出すことはなく、自分の中で考えてから話すことが多くと考えられる。

岳はわたしに背を向けたまま低い声で言い、足下のタイルを足の親指でゆっくりなぞった。

父の申し出を断ることに、岳は少し抵抗があるのではないだろうか。そのため、父を見ずに背を向けたまま答えた。ま

た、足下のタイルを親指でなぞることで、緊張を紛らわそうとしている。

岳は何も答えず、みように長い沈黙が続いた。

今までも最も長い沈黙。岳は父の質問が予想外のもので少し戸惑っている。

岳はすぐには答えず、右足の親指でゆっくり何度もタイルの一边をなぞり続けた。

ここでも岳はじつくりと自分の中で言葉を考えている。

岳はまたしばらく黙りこみ、それからしゃべりながら、自分の言うことを、一つずつ確かめていく、というような感じで、「別におとうにやられるからいやだというわけではなくて、こうやって、突然おとうの気まぐれで、勝手にふる場に連れてこられて、それで、好きなように、おとうの好きなように、どんどん、刈られていく、っていうのが、ぼくはいやなんだ……。」

読点を多用することで、岳が慎重に言葉を発していることがより強調されている。岳の発言にも読点が多用されており、岳が懸命に父に気持ちを伝えようとしていることが感じられる。

しゃべり終わると、岳はまた右足の親指でゆっくりタイルをなぞり始めた。

しゃべっている最中は、タイルをなぞることをやめていた。

それにしても岳の言っていることはなかなか説得力があった。

父が思っていた以上に岳はしっかり自分の意志を持っていて、それを伝えられていた。また、父が息子の成長を実感していることもわかる。

「やっぱりなあ、だんだん反抗期になってきているよ。」

父は、岳がはじめて自分に反抗したことが強く印象に残っている。「やっぱりなあ」とあり、以前からその予兆があったのではないだろうか。もしくは、成長段階としての反抗期を迎える年頃であることを受けての発言であると考えられる。私たちのグループでの話し合いの結果、父のふる場での驚きようから、後者の結論に至った。

「反抗、とかいうのではなくかれの自立、というようなものじゃないかしらね。」

岳の母の会話である。母は、岳が自分の意志を父に伝えたことを自立と捉えている。今回の岳の行動は、母にとっても彼の成長を感じさせるものだった。

妻は少しこしゃくなことを言った。

「こしゃく」とは、どこことなく生意気で、しゃくにさわるという意味である。父が妻に対してこのように思うということ

とは、自分の方が岳のことをよく理解しているという自負があった。

反抗ではなくて自立、というふうに理解するとわたしは少しやわらかい気持ちになった。

父は、反抗されることに少しさみしさを感じているのではないだろうか。しかし、自立となると少し前向きに岳の変化を捉えることができ、見守ろうと思うことができた。

三 考察

(1)

この物語には、作者と作品でも触れたように子の成長とそれに面食らう親の様子について描かれている。本作品のキーワードは岳の「自立」だと考えられる。子どもの「自立」する瞬間を、日常のありふれた「散髪」という一見「自立」とは何の関係もないような行為を通して表現されている。この日常の一コマを取り上げた点に、多くの読者は共感を覚えるのではないだろうか。読者自身も日常の中で、親に対して反抗したことはあるだろう。その時(主に思春期)に感じていた不安や憤りや反発心を思い出させてくれることが、当作品の魅力だと考えられる。

本教材は中学校の教科書に掲載されている。小学校高学年(中学生にかけて)の子どもの多くは、周りの大人に対して反発し自我が芽生え始める。丁度「自立」をし始めている子ど

もたちが本教材を読んで岳に共感できる部分は多いだろう。だからこそ「学習の手引き」においても「岳の気持ちを想像しよう。」といった課題が取り上げられている。また、主人公であるわたしを通して「自立」しかけている子どもの様子を見ることで、子どもたちは思春期を迎えた子に接する親の気持ちを疑似体験できる。

次に岳の人物像と成長過程について考えてみる。本文より岳は「声変わり」をしていることから、思春期を迎えていると考えられる。また岳の顔つきには「男の意志」が表れ始めていたと本文に記されている。この「男の意志」には少年の頃とは違い、岳の凜とし始めた様子、頼もしくなってきた様子を連想させる効果がある。岳が少年から男へと移り変わってきていることが読み取れる。

しかし、主人公のわたしは岳の成長を認識できていない。何となくわかつているのかもしれないが、わたしは岳の成長に向き合っていない。いつまでも岳を小学校三・四年生くらいの子どものように扱ってしまっている。岳の成長を理解しきれないために、わたしは岳にイラつき高圧的な物言いや態度をとってしまう。

そんなわたしに反発心を抱きながらもまだ幼さの残る岳は、物語中盤部分までわたしにはつきりと気持ちを伝えられないけれども、態度ではわたしに対する反抗を表している。例えば、シャツを脱ぐように言われてもかたくなに動こうとしない場面である。わたしの言うことを聞かないことで、自分の意志に反していることを伝えたがっている。このとき、初め

てわたしは岳の異変に気づく。岳がわたしの言うことを聞かないことは珍しいことであり、わたしはつい怒ってしまう。それまでの岳の態度はわたしにとって、成長としてではなく単なる我儘として映った。

(2)

岳の人物像

物語の前半では、何となく父親に対する抵抗を見え隠れさせながらも、黙って風呂場まで父親についていった岳が、物語の後半に入ると父親に対しての怒りをはっきりとあらわしている。そんな岳に対する父親の反応が「少し驚いてしまった」「本当に驚いてしまった」とあることから、岳は普段、父親に対して怒る、反抗するといった態度を見せることがとても珍しいことだと分かる。それまでの岳は、父親のいうことに対して反抗することなく素直に従ってきた少年であった。さらに、父親の問いかけに対して黙り続けていたり、途切れ途切れで答えている岳の様子から、岳は頭に浮かんだことをすぐに言葉に出すのではなく、自分の中で時間をかけてよく考慮した上で言葉にする、といった慎重であり真面目な性格である。また、父親に自分の本心を伝えている場面では、岳は足でタイルをなぞるという行動を繰り返している。父親と顔をつき合わせて自分の言いたいことをズバズバ言うのではなく、顔を合わせずに、足でタイルをなぞっているという様子から、今までずっと従ってきた父親に対して反抗している今のこの状況を、どこか恐れているような、戸惑っているよ

うな岳の様子がうかがえる。

反抗期の「始まり」

この物語の段階では、岳は父親への反抗の態度をあらわし始めてはいるが、黙り込んでしまったり、言葉につまったりして、父親の言葉を頼りにしながら自分の考えを言葉にしている。岳自身も父親の言うことに従うことはもう嫌なのだが、それをどのように言葉にしているのか分からない。自分でも自分のモヤモヤしている気持ちをうまく言葉で言い表すことが出来ない様子がうかがえ、反抗期の「始まり」ということをよく象徴しているように感じる。

父親の成長

この物語は、「岳の自立への成長の一步」を通して、岳だけでなく、父親の精神的、心理的な成長も描かれている。初めは、岳の自分に対する反抗に対して、どこかモヤモヤ、イライラしていた父親だが、岳が本気で何かを自分に訴えようとしているということを感じ取ると、段々と岳の今までは違う心の変化に気付き始め、感情的に怒るという態度を見せなくなっている。そして、物語の終盤で、母親の「男の自立期」という言葉を聞いて、「少しやわらかい気持ちになった」とある。今まで自分の言うことに素直に従ってきた岳が反抗した態度を見せたことにより、自分の思い通りにいかずイライラしていた父親だが、それが単なる自分への反抗なのではなく、我が子の成長の兆しなのだと理解し、父親としてやわ

らかい、あたたかい気持ちになっている。反抗に対してイライラしている時の父親は「一人の人間」としての気持ちがある。われているように思え、対して、子どもの成長に気付いた時の父親は「父親」としての目線からの気持ちに変化している。



サーカスの馬（安岡章太郎）

神田 達也



一 作者と作品について

高知県高知市帯屋町で郷氏の家柄に生まれる。陸軍獣医官の父に連れられ千葉、ソウル、青森、東京と転居する。青南小学校から第一東京市立中学校に入学するも、素行不良の為、肋膜炎を患う三年まで教師の実家の禅寺に寄宿生活を強いられる。青南小学校に転入してから酷い精神的虐めを受けた。ここでのいじめは余程酷かったらしく、病気や落第とともに何度もエッセイに登場している。城北高等補習学校で浪人生活を送り、毎日古山高麗雄と遊び歩いた。松山高等学校（現在の愛媛大学）などの受験に失敗し、慶應義塾大学文学部予科に入学するも、その三年後陸軍に召集され東部第六部隊へ入営し満州に送られた。翌年肺結核により除隊処分となり内地送還され、復学するも父は敗戦により失職してしまい、極端に生活環境が悪化して脊椎カリエスを患うも英文学科を卒業した。一九五一年『ガラスの靴』が芥川賞の候補作に選ばれ、文壇に注目される。その二年後『悪い仲間』『陰気な愉しみ』が芥川賞を受賞。一九五四年には脊椎カリエスが完治し、以後創作活動に意欲的に取り組んでいる。

本作品『サーカスの馬』では、何のとりえも個性も無い「僕」

が、サーカスの小屋の裏手につながれた貧相な馬に親近感を覚えるも、その馬が実は花形であったということが分かり、「僕」が夢中になって手を叩いている場面で締めくくられている。文芸雑誌の「新潮」昭和三〇年一〇月号に掲載。

二 叙述について

鉄筋コンクリート三階建ての校舎は、そのころモダンで明るく健康的と言われていたが、僕にとつてそれは、いつも暗く、重苦しく、陰気な感じのする建物であった。

「僕」はこの校舎に悪い印象を持っているが、記述を見るにそのような客観的な要素はなく、むしろ「モダンで明るく健康的」と好評価である。となると、「僕」が他人と違った価値観を持っている、この校舎に嫌な思い出がある、あるいは霊的なものを感じている、など「僕」側に要因があるものと思われる。現時点ではその要因が何なのかはわからない。

僕は全くとりえのない生徒であった。

「僕」の人物像について書かれた第一文目である。人間だれでも一つはとりえがあるものだが、この主人公に関しては

この後に本当に全くとりえがないということを学業、芸術、体育など様々な面から具体例を羅列して強調している。

おまけに僕は、全く人好きのしないやつであった。

「人好き」とは人に好かれること。人好きのしない、とは人に好かれないう意味になる。食事に關して意地汚く、食べ癖も悪い「僕」の性格がこの後に続くが、何もここまで書かなくても、と感じるほど救いようのない人物であることが印象づけている。また一人称の文章であるのでこの作品は中学生の「僕」を未来の「僕」がふりかえって自分で書いたという設定になり、とことん自分をさげすんでいることから、自己嫌悪の激しさを思わせる。

僕はまた、あの不良少年というものでさえなかった。

「僕」の人物像紹介の最後の段落である。同じ型はずれでも、格好良いイメージがある不良ですらない。またポケットの中に入っているのは不潔なものばかりであり、読者にさらに「僕」が他人に好かれるような人間でないことを印象づけている。

そんな時、清川先生はもう怒りもせず、分厚い眼鏡の奥から冷たい目つきでじつと僕の顔を見る。

もう、とあるのだから以前は更生させようと担任の清川先生も「僕」を叱っていたのだろう。「怒られているうちが華」とよく言われるが、「僕」はもうすでに怒られなくなってしまう

っている。「冷たい目つき」とは諦めの気持ちがこもった視線なのだと思う。

すると僕は、くやしい気持ちにも、悲しい気持ちにも、なることができず、ただ心の中をからっぽにしたくなって、目をそらせながら、（まあいいや、どうだって。）と、つぶやいてみるのである。

「なることができず」という表現から、悔しさや悲しさが心の底にはあるのに、それを引きずり出して感情を表に出すといったパワーが「僕」にはないということがわかる。だから「心の中を空っぽにしたくなって」とあるようにそれらの心の底にある感情を捨て、（まあいいや、どうだって）と逃避してしまうのである。「目をそらせながら」という表現も、先生の目線からという解釈の他に、自分の本当の気持ちから目をそらしている、と読み取れる。また「つぶやいてみるのである」という表現はより意識的につぶやいたという印象が強く、まあいいや、という気持ちを自分自身に思い込ませているのではないだろうか。

けれども僕は、教室の中にいるよりは、かえってだれもいない廊下に一人で出ている方が好きだった。

廊下に立たされるということは世間的には嫌な気持ちになることであるが「僕」は好きだという。一人を好む「僕」の心の閉鎖した感じが表れている。

たまたまドアの内側で、先生がおもしろい冗談でも言っているのか、級友たちの「わっ」という笑い声の上がつたりするのが気になることはあつたけれど…。

「僕」もまだ中学生であり、教室の中がにぎやかだと気になるのは自然なことである。一瞬、普通の中学生の顔を「僕」に垣間見ることができる。

そんな時、僕は窓の外に目をやって、やっぱり、（まあいいや、どうだって。）と、つぶやいていた。

窓の外に目をやるというのは現実から目をそらすことの暗示か。「やっぱり」という表現から先の服装検査の場面以外にも（まあいいや、どうだって）という気持ちになることがしばしばあつたのではないかと推測できる。また服装検査のときは「つぶやいてみるのである」と意識的なニュアンスがあつたがここでは「つぶやいていた」と無意識的なものになっている。ここから無意識のうちに自分の感情や思いを捨てようとしている姿が見て取れる。

やがて、オートバイの曲乗りや、楽隊の音や、少女の合唱や、客を呼ぶ声が、参詣人の雑踏に交じって毎日、絶え間なくひびき、それらの物音が、土ぼこりに混じった食べ物物のおいのただよう風に送られてくると、校庭で叫ぶ教官の号令の声さえ聞き取れなくなってしまうのだ。

校庭で教官が、とあるので恐らく体育の授業中である。学校の隣からお祭り準備の喧騒や食べ物のにおいがただよって

きたら、たしかにそちらに気を取られてしまうだろう。まあいいやどうだってと、何にでも投げやりな主人公だが、靖国神社でのお祭りはやはり気になるらしい。さすがに教官の声が聞き取れなくなるほど、とは集中力に欠けているが。

そして、教室の校庭に面するすべての窓からは、そうしたテントの街の裏側をすっかり見わたすことができたのである。

お祭りの盛大な風景、始まる前の高揚感が「すべての窓から」と強調することにより表されている。また、このあとの主人公の視点が教室から窓の外を眺めているのだと自然にわかるようになる。

いつか僕は、目立って大きいサーカス団のテントの陰に、一匹の赤茶色い馬がつながれているのを目にとめた。

主人公と馬の出会いである。大きく派手なサーカス団のテントを強調している。

それは肋骨が透けて見えるほどやせた馬だった。

これ以降主人公の馬との出会いと馬の外見的特徴の記述が続く。

いったい、どうしてそんなに背骨がへこんでしまうことになったのか、僕には見当もつかなかったが、それは見るからに、痛々しかった。

前文までの馬本体を表現する文章から、また目立って大き

いテントの陰という表現からも相対的に、馬のみすぼらしさがよく読者に伝わってくる。中でも大きくへこんだ背骨が印象深いようである。

自分一人、廊下に立たされているぼくは、その馬について、いろいろに考えることが好きになった。

窓際で馬を見ながら考えるわけではない。馬が見えない廊下に立たされてもお馬のことが気になっている様子が読み取れる。またそのうちに馬のことを考えることが好きになったという心の小さな変化を読み取ることができる。

彼はたぶん、僕のようになまけて何もできないものだから、曲馬団の親方にひどく殴られたのだろうか。

これ以降主人公が馬を外見だけで判断した推測が続く。ここでは「僕のようになまけて何もできないものだから、」と根拠のないままに怠惰な自分と同一化を図っている。

それで、ああやって殺しもできないで毎年連れてきては、お客の目につかない裏の方へつないでおくのだろう。

この前文にあるが、殴ったら自分の馬が死にそうになりびつくりした↓殺すことができない、という説明は一見すると納得できるようだが、よくよく考えるところまぐつながらない。サーカス団に芸もできないお客の前にも出せない馬が一頭だけいても、えさ代がかかるばかりで何の役にも立たないのだ。これは怠惰なまま過ごしていてもなんとかなるという主人公

に都合のよい屁理屈にも思える。あるいは主人公が馬に愛着を持っているのなら殺せずに残されている理由にもなるのだが、これはつまり馬に自分を重ねている主人公も、周囲に愛情を求めているのではないかと考えることもできる。

……そんなことを考えていると僕は、黙って時々自分のつなかれたくりの木のこずえの葉を、首を上げて食いちぎったりしているその馬が、やっぱり、（まあいいや、どうだって。）と、つぶやいているような気がした。

そんなこと、とは馬の背骨がへこんだ顛末のことだろうが、そこから主人公自身の無気力さの表れである（まあいいや、どうだって。）を馬からも感じたのだという。みじめな人生を送りつつもただうなだれるばかりでなく、暴れだすでもなく、何も考えてなさそうに葉を食べる馬の様子が自身と重なったのではないだろうか。

「おい、やすおか！」と名前を呼ばれて、清川先生から、「お前はいつたい、そんなところで何をしているのだ。みんなが一生懸命働いている時に自分一人が休んでいて、それでいいのか。」と、そんな風に言われても僕は何も答えることがない。作者本人と同名なのはやはり主人公が作者自身であるということを表しているのだろうか。

別に見ようと思っただけを見ていたわけでも、休もうと思っただけで休んでいたわけでもないのだから。

皆が働いているのに自分だけ休むという社会的道徳的に明らかに間違っている主人公の行動であるが、本人は休もうと思って休んだのではなく、気がついたらぼうっとしているのであるという。

「……」仕方なしに黙っていると、清川先生のくちびるは三角形に曲がり、目がいらだたしそうに光って、分厚い手のひらが音を立てながら僕のほっぺたに飛んでくる。

今では見られない教師の体罰である。この文を見る限り、黙っているだけの主人公にカツとなり感情的にふるった暴力のように読み取れる。

けれども僕はなんともなしに境内をあちらこちら人波にもまれながら歩いていった。

この前の文章から、主人公にはお祭りよりも日比谷や新宿で映画を見たいという意思が見て取れる。しかし無意識のうちにお祭りのほうに足を運んでしまうという。これにはそれほど映画やレビューに興味があるわけではない、あるいは近所のお祭りは行くまでの労力が少なく行きやすい、などの理由があると思われるが、無意識にという表現からこれもまた主人公の意志の弱さ、集中力の欠如が表れている。

僕はむしろ敷きの床の上に、汚れた湿っぽい座布団を敷いて、熊の相撲や少女の綱わたりなど同じようなことが果てもなく続く芸当を、ぼんやりながめていた。

「汚れた湿っぽい」「同じようなことが果てもなく続く芸当」など必要のないマイナス表現が多く使われていることから主人公はこのサーカス、あるいはお祭り自体にいい印象を持っていないように読み取れる。ただそれでも「ぼんやりながめていた」というのだから、やはり主人公は明確に自分の意志を持って行動することが難しい少年なのだと思われる。

が、ふと場内を見わたしながら僕は、はっとして目を見張った。

「はっとして」という表現も「目を見張る」ということばもそれまでぼんやりしていた主人公に合わない。それほどまでに馬を見つけたときの衝撃が大きかったのだとわかる。少年の心の中を占める馬の存在の大きさがうかがわれる。

僕は団長の親方がにくらしくなった。

みすばらしさから主人公自身と同一化をしていた馬が見世物にされるとなり、それまでぼんやりしていた主人公だったのが怒りという明確な感情が表れるようになった。これはこの話を通して珍しいことで、これまでならたいいのことは「まあいいや、どうだって」と目をそらしていた。よほど団長が許せなかったのであるう。

すると高いポールの上上がった曲芸師が、馬の背中に――ちようどあの弓なりにへこんだ所に――飛びついた。

主人公が馬のもっともみすばらしいところと感じていた背

中のへこみが、実は見事な芸をこなす為の、長年の努力の跡だった。見かけで判断してはいけないという教訓である。

人間を乗せると彼は見違えるほど生き生きした。

動物愛護の点から背中が大きなへこみというのはいかがなものかと思われるが、馬自身はむしろそのへこみがあるからこそそこに人間を乗せ、生き生きするのである。

けれども、思い違いがはつきりしてくるにつれて僕の気持ち
は明るくなった。

思い違いとは、この馬が主人公自身と同じでとりえのない情けない存在であつたと思つていたら実はサーカス団の花形であつたという点であろう。自身と同一化して見ていたものが華々しい姿を見せたことによって、主人公はそれが自分のことのように感じられ嬉しくなつたのであろう。

息をつめて見守つていた馬が、今火の輪くぐりをやり終わつて、やぐらのように組み上げた三人の少女を背中に乗せて悠々と駆け回っているのを見ると、僕は我に返つて一生懸命手をたたいっている自分に気がついた。

これまで主人公が無意識的に取つていた行動は、ぼうつとながめるだの、人波に流されるだの、受動的で、感情の起伏のない客観的なものばかりだつたのだが、最後には夢中になつて一生懸命拍手をするという行動がみられた。

三 考察

この物語は国語の教材でありながら、道徳的な要素を多く含んだものと言えよう。主人公のヤスオカ少年は、自分を卑下し、毎日を何となく過ごしていた。しかし、一頭の馬との出会いがヤスオカ少年を変えることになる。見た目から、自分と同じように何の才能もないと思つていた馬が、実は、サーカス一座の花形であり、その馬の活躍を見たヤスオカ少年は心を動かされ、希望がわいてくるというストーリーである。

本作品の特徴の一つに、全く特徴のない主人公の人物設定がある。というのは、大抵の物語において主人公はサッカーが好きだとか、勉強はできないが絵は得意であるとか何かしらの個性を持つているものだが、本作品の主人公は勉強も運動も芸術も苦手、趣味も特技も根性すらもなく、どの分野を探しても伸ばせるような個性が見当たらない。パラメータで表示すると彼は(運動面だけ少しへこんだ)小さくきれいな円を描くだろう。むしろこのように個性がないことが個性だと言えるのかもしれない。

そして突出した個性がないということは、たとえどんな読者であっても主人公と読者自身を同一化しやすくなるということにはならないだろうか。つまり読者自身のパラメータと物語の登場人物のそれを重ね合わせたときに、運動が苦手な人はサッカー少年のサッカーにかける思いがわからないなどのように、自分のパラメータからはみ出す部分が多い登場人

物ほど同一化しづらくなる。その点本作品の主人公は、大抵の読者のパラメータの中にすっぽりとおさまってしまうので感情移入がしやすい。

また主人公は学習者と同じ中学生という設定であり、つまり本作品は、どんな生徒でも自身と主人公を同一化しやすい教材として優れた点を持っているのである。

同一化といえば、本文中で主人公はサーカスセントの裏にいたみすばらしい馬と自身とを同一化させている。このとき「その馬について、いろいろに考えることが好きになった」というくらい彼は馬と自身をしつくり重ね合わせていたようである。彼が遠くから外見だけで判断した馬のパラメータの形が自身のものとかかなりピッタリと重なったのだろう。だが最後に、サーカスで華々しく活躍する馬を目の当たりにしてパラメータは大きくずれてしまった。

ここで疑問に思うのが、このときの主人公が明るい気持ちになったという点である。一文解釈でもわかるようにこの主人公はあまり前向きな考え方ができない。自分にとって都合の悪い場面に出くわすとその現実を受け止めどう乗り越えようかなどとは考えず、目をそらし、どうだっていいやとその現実から逃げ出してしまうような性格である。自分と同じなんのとりえもない、ダメなやつだと思っていた馬が実はすごいやつだったなんて知ってしまったら一人取り残されたように感じてしまうのではないか。

だがこのとき主人公がどう思うかということは決めつけることはできない。似た者同士だと思っていた馬が活躍する姿

を見てまるで自分のことのように嬉しくなる、ということはいかにもありえそうだし、自分もがんばればできることがあるかもしれないと自身に可能性を見出すというような反応もないとは言い切れないのである。そしてこの主人公はこの話の最後に前向きな姿勢を見せてくれたのである。

ところがこの話は最後のサーカスのシーンで終わってしまっていて、その後主人公がこれを機に「よし、僕も頑張ろう」と努力をし始めた、などというようなところまでは言及していない。本作品は「主人公は今後どのように生きていくと思うか」というような発問を通して生徒の読解力や想像力を伸ばすこともできる。

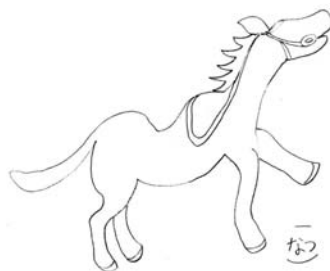
この「同一化」は、主人公と読者の間でも成り立つ。物語の序盤では、ヤスコカ少年が自分のことを卑下する内容が所々につづられている。この物語はヤスコカ少年の目線から書かれているのだが、ヤスコカ少年は自分のことを客観的に見ることができ、今の自分を決して良いとは思っていない。かといって、今の自分を変える気にもなっていないことが、この物語の中でも多く登場する「まあいいや、どうだって。」というヤスコカ少年のつぶやきに表れている。生徒の中にもヤスコカ少年のように「自分には何の才能もない」、「自分なんか何をしてても駄目なんだ」という思いを持ちながら毎日を経過している子もいるだろう。この物語を教材として用いる際は、「ヤスコカ少年」読者（生徒）という視点を持たせながら読み進めていくことがポイントとなるだろう。今の自分を決して肯定はしていないヤスコカ少年は、一頭の馬との出

会いによって自分を変えるきっかけをつかむことができた。人が変わる際には「きっかけ」というものが非常に大切になつてくるのではないだろうか。ヤスコカ少年と同じような思いを抱いている生徒にとって、この物語がそのきっかけになるような授業展開が必要となつてくるだろう。そして、最終的には、生徒たちが「どのような人間でもこの馬のようになれるんだ」、「決して自分のことを卑下するようなことなんてないんだ」という考え方ができるようにしていくことがこの物語を用いて授業をする際の一つのポイントとなるであろう。

国語的な観点から言うと、二つのポイントがある。一つは、ヤスコカ少年が自分とサーカスの馬を同化して物語が展開していくことに着目する点である。「……そんなことを考えていると僕は、その馬が、やっぱり、（まあいいや、どうだって。）とつぶやいているような気がした。」という箇所があるが、馬のつぶやきが実は自分のつぶやきであると解釈することもできる。これは、殴られてあんな姿になつてしまった馬を自分と同化させ、どうしようもない自分が他人にまでひどい思いをさせられている（清川先生に冷たい目で見られたり、廊下に立たされる場面がある）ことをかわいそうに感じていると考えられるからである。馬のつぶやきをヤスコカ少年のつぶやきと捉えるという考え方は少し難しいかもしれないが、こういった細かい点にまで解釈を広げられるような授業が理想的だと考える。

もう一点は、ヤスコカ少年の心情の変化である。大きな心

情の変化は最後の場面のみだが、前半のヤスコカ少年の様子や行動と後半のそれとを比較することで、どの文章から心情の変化が読み取れるかという点を生徒に考えさせながら授業を展開させることが重要であると考ええる。



ゼブラ（ハイム・ポトク）その一

一 作者と作品について

作者のハイム・ポトク（Chaim Potok）は、一九二九年二月十七日ニューヨークのブルックリンで、ポーランド系ユダヤ移民のベンジャミン・マックス・ポトクとモリー・フリードマン・ポトクの間に生まれた。父は、第一次世界大戦でオーストリア軍のポーランド部隊に所属しており、ユダヤ人集団虐殺の暗い過去を背負っている。その姿は、一九七五年に出版された『始まりへの旅（In the Beginning）』でも描かれている。

ニューヨークシティ生まれのユダヤ系アメリカ人の作者は、一六歳で小説を書き始める。一九五九年には、ペンシルヴァニア大学大学院に入学する。フィラデルフィアの Har Zion Temple という場所に住み込み、教員を経験する。また、一九五五年から五六年にかけて、従軍牧師として駐留した経験を持つ。代表作は、『The Chosen 選ばれし者』『My Name is Asher Lev 我が名はアサーレヴ』などである。

『ゼブラ』は、交通事故が原因で片腕が不自由になった少年アダム、通称ゼブラが主人公である。腕の痛み悩んでいたときに、ベトナム戦争で片腕を失くしたアーティストであ

るウイルスン講師と出会う。彼の夏期講座を受けているうちに、少しずつ指が動くようになっていく。その経験を通して、それまで気付かなかった周囲の人々の思いに気付くようになる。そして、自信と勇気を持って生きる実感を取り戻すという話である。

二 叙述について

本人もいつからそうよばれたのかは覚えていない。

主人公である男の子、アダム・マーティン・ゼブラの「ゼブラ（しま馬）」というあだ名についての叙述である。いつからそう呼ばれ出したかは覚えていないということは、このあだ名は、かなり前から定着しているということだ。また、このあだ名をアダムも気に入っている。ここから、アダム（以下、ゼブラ）は、以前から走ることがかなり好きだったことが分かる。

フランクリン通りの急な坂の上にくると、ゼブラは足が軽くなって、走らずにはいられなくなる。

ゼブラがどのくらい走るのが好きだったかが分かる。特に、

佐藤 茉奈美



スピードを出すことが快感だったのだろう。

しま馬ではなく、わしになったような感じだ。

わしは、地面に向かってかなりのスピードで急降下する鳥である。その「わしになったような感じ」ということは、フランクリン通りを駆け下りている時のゼブラはかなりのスピードだっただろう。

ところが一年前、フランクリン通りを駆け下りてわしになったとき、大きな影が目の端に現れた。

ここまでは、人物像についての叙述だった。しかし「ところが」とあるため、ここから話が展開する。「わしになったとき、大きな影が目の端に現れた」という表現から、いつものように坂を猛スピードで駆け下りたとき、横から自動車が走ってきたことが分かる。しかし、ここでは「大きな影」と言っている。このことから、ぶつかった時点では、何にぶつかったのかゼブラにははっきり分かってなかったと思われる。

そして次の瞬間、暗い闇の中に投げ飛ばされてしまった。

その走ってきた自動車とぶつかってしまった。「暗い闇の中に投げ飛ばされてしまった」とは、衝撃で気を失ってしまったことと、以前のように走れなくなったことでゼブラの心が暗く閉ざされてしまったことを意味しているのではないかと考えられる。

ときどき、首からつっている左手が痛みだすということがある。

「ときどき」とあるので、いつも痛みがあるのではない。痛みがあるというのは、左手が治っていない証拠である。医者、以前のように走ることはできないだろうということ、足のほうは一、二年でギプスも外れるだろうが、手のほうはどうなるか分からないと言われたことを痛みが思い出させるのだろう。痛むたびに、走れなくなったことを実感するゼブラの姿が読み取れる。

「ウィルスンさん、事務室にはウィンター先生とイングリッシュ先生の部屋があるけど、イングリッシュ先生の部屋を先に行ったほうがいいと思うよ。」

ゼブラが自らウィルスンさんに声をかけ、美術の講師になるためには、イングリッシュ先生に頼んだほうがいい、とアドバイスしている。自分と同じように左手が使えない彼についてもっと知りたいと思ったのだろう。講座を受ける気がないのにもかかわらずわざわざイングリッシュ先生を紹介したのは、自分と同じ境遇のウィルスンさんへの親近感からくる行動と考えられる。

窓ガラスにぶつかって翼を折ってしまい、男の子が治してやろうとするけどだめで死んでしまい、男の子が木の根元に埋めてやるという話だった。

イングリッシュ先生の「お話」の授業でゼブラが話した小

鳥の話だ。窓ガラスにぶつかって翼を折った小鳥は怪我をした自分、治そうとする男の子もまた、治したいと思っているゼブラ自身のことであろう。治そうと努力してみるものの結局、どうせ左手は治らないというあきらめの暗い気持ちが見える。

「あんたって、いつも悲しい話ばかりね。」

眼鏡をかけているそばかすの女の子、アンドリアの言葉。「いつも」という言葉から、ゼブラがいつもこのような話をし、事故以来、ずっと暗い気持ちのままで立ち直れていないことが分かる。「人生、そんなに暗く考えることないじゃない。」とゼブラを指摘するようなことをアンドリアは言っているが、ゼブラを叱ろうと言ったのか、励まそうとしていったのか、ここからは分からない。



「ほっといてくれよ。」ゼブラは、言った。

アンドリアの言葉に対するゼブラの返答。今の自分をうまく指摘をされたように感じ、心を閉ざしてしまっている。

ウィルスンさんはそう言くと、ポケットから、小さなメモパッドとペンを取り出した。

事務室に行っていたウィルスンさんにゼブラがまた出会っ

た場面。「授業が終わって校庭に出ると、あの男の人がいた。」というように、見かけた時は、「あの男」というようにゼブラは、まだ距離を置いていたが、会話が進むにつれ「ウィルスンさん」というように、認識が変わっている。ゼブラがウィルスンさんに対し、興味を持ち、近づいていることが分かる。

ずっと長い鼻、薄い唇、悲しそうな目、がっしりしたあご、そっくりだった。

ウィルスンさんが描いたゼブラの似顔絵。好きだったことがでなくなっていたことがゼブラを暗い気持ちにし、それが表情に表れている。だから、ウィルスンさんには悲しそうな顔をしているように見えたのかもしれない。

「ウィルスンさん、僕、みんなからゼブラとよばれているんです。」

立ち去ろうとしたウィルスンさんにゼブラが、話しかけた場面であり、初めて自分のことを自ら話した場面である。自分のあだ名を教える行為は、自己紹介の場面で話す話題であり、これから親しく付き合いたい人に対してするものだ。ということは、ゼブラが、ウィルスンさんと関わりを持つようとしていることが分かる。美術が苦手な講座に意欲的ではなかったのに、ゼブラはおそらく講座を受けないだろう、ゼブラとの関係もここで終わりだとウィルスンさんは考えていたはずだ。だから、ゼブラの呼びかけが意外で、ゼブラの関わりたいたいという気持ちに気づき、それが講座を受けたいという

意思にも見えたのではないだろうか。だから、「驚いたように振り返った」のだと思う。

走っているしま馬は、今にも紙から飛び出してきそうだと。

ウィルスンさんが、ゼブラのあだ名を聞いて、「アダム」という名前を^{ばっ}で消し、その上に描いたしま馬である。「今にも飛び出してきそうだ」とあるので、躍動感のあるしま馬の絵だったのだろう。「ゼブラは何度もその絵を出して眺めた」とからゼブラがこの絵をかなり気に入っていることが分かる。

その日の授業が終わって見てみると、不思議なことに、しま馬が動いているように思えた。

夢中になってしま馬ばかり見ていて全体を見ていなかったため、紙のどこにしま馬が描かれているかを気にしていなかった。「動いているように思えた」のは、ここで初めて絵全体を眺めたからではないか。

「先生、あの、夏休みの講座なんですけど、……ウィルスン先生はどこで……」

ウィルスンさんに出会った次の日、ゼブラは二階の廊下でイングリッシュ先生に会った時に、ウィルスン先生の怪我のことを尋ねようとしている。しかし、ウィルスンさんに直接聞きたくても聞けなかったように、ここでも聞くことをためらっている。「……」の間と「どこでがしたんですか」と言

い切れていないことが、そのためらいをよく表現している。「けが」の言葉を自分からは出さないでイングリッシュ先生に言っただけだと思っただけである。そうすることで自分が怪我のことを聞きだしたのではなく、先生が話してくれたことになるからだ。他人に知られたくないウィルスンさんの秘密を聞いているような気がして申し訳ないような気持ちや、なぜ怪我をしたのか聞くのが怖い気持ちからこのような話しかけになったのだろう。

「あの、ウィルスン先生はどこで……けがしたんですか。」

イングリッシュ先生は、ゼブラが講座を受けたがっていると思い、「講座がどこで開かれるのか」と聞きたいのだと勘違いして、「あら、講座をとるの。」と返した。そのため、ゼブラが自ら「どこでがしたのか」を聞いている。「……」が最後まで聞こうかどうか迷っていたことを表現している。しかし、それでも聞いたということは、よほどウィルスンさんの怪我が気になっているということでもある。ここで、ベトナム戦争中に怪我をしたことを知る。

「また、暗い絵をかくつもり。」アンドリアが聞いてきた。

アンドリアも同じ講座を受講している。「また」から、ゼブラの描く絵はいつも暗いようだ。これも事故の影響か。

アンドリアのデッサンはよくかけていた。

隣の人の顔のデッサンをした。アンドリアの横にゼブラが

座ったので、彼女のデッサンは、ゼブラの顔だ。「よくかけている」ということは、似ているということだ。

だけど、僕はそんなに悲しそうな顔をしてるんだろうか。

「僕は」という表現から、ここはゼブラの視点で書かれている。なぜ「そんなに」という表現があるのか。二つの解釈ができる。「本人も自分が悲しい顔をしていると自覚しているが、アンドリアが描いた自分の絵ほどではない」という気持ちからと「自分は悲しい顔をしているとは思っていないのにウィルスンさんとアンドリアに悲しそうな顔を描かれた落胆」という気持ちから「そんなに」と感じた。

脂汗がにじみ、体が震えてくる。

ある朝のウィルスンさんの講義で、右手か左手を描くという課題に取り組むゼブラの様子。この時、ゼブラは怪我をしたほうの手を描いた。怪我をしたほうの手は動かないので、そちらを描くしかなかっただろうが、本文は、「けがしたほうの手をかいだ」というように悲観的な表現ではなく、むしろ積極的に取り組んでいるようにも取れる。段々、ゼブラが事故や怪我と向きあおうとしているのではないか。とはいっても、描くには、動かない左手をよく観察しなければならない。それは、つらく苦しいことだった。その気持ちが体に伝わっているのが分かる表現である。

ところが驚いたことに、今見るとちゃんとした手に見えた。

課題を出され描き始めたころは、二本の指がこわばったまま曲がっていて奇妙でみっともない手だと思っていた。しかし、ウィルスンさんの「みんな、手を見るんじゃないぞ。手の周りの空間を見るんだ」という助言を受けてもう一度、左手を描いてみたときのゼブラの手の認識が違っている。今までは、曲がった指ばかりにとらわれて以前の手との違いばかり見ていたが、手の周りの空間を見ると新しい見方を教えてもらったことで、手全体を見ることができるようになったのだらう。それで、曲がっていたとしても同じ「手」であることに変わりが無いと思え、怪我が気にならなくなったのではないか。

そして、最後にボタンをハンドルの位置に付けようとしたとき、左手も使っていることに気がついた。

特別に心ひかれるものを作ってくるという宿題が出て、がらくたを接着剤でくっつけてヘリコプターを作った。支えたり押さえたりするのに机や床を使い、ひざ、ひじ、あごまで使っていた。しかも、「左手も使っていることに気がついた」とあり、左手が使えないことを忘れて無意識的に使っていたことから、一生懸命に夢中で制作していたようだ。左手を動かしたことで、曲がったままだった二本の指が少しだけ伸びたのか、伸びたから使えたのかは分からないが。

ヘリコプターは、夏の光を浴びて輝いた。

左手が使えないことで出来栄はよくなかった。これは、

アンドリアがしかめ面で「ううん、なあに、それ」と言ったことから、ヘリコプターには見えないほどだったと分かる。しかし、ウィルスさんは、評価してくれた。同じように片腕が使えないのでヘリコプターを完成させたゼブラの苦勞が良く理解できたからなのではないか。完成させた達成感が「輝いた」に表現されていると思う。

「ウィルスン先生ありがとう。ゼブラ」と書いた。

わたしのために一枚、なんでもいいから思い出になる絵をかいてくれないかという最後の課題で、ゼブラは、山と谷と川と台地にその上を飛んでいくヘリコプターとしま馬を描いた。その絵に付け足した言葉である。窓の棧に載っているヘリコプターは、スロットル全開で動き出しそうに見えたのは、ウィルスンさんが講義を終え、次の場所に旅立とうとしていることを暗示しているのではないか。

ゼブラが、これを描くときには、指が動かせるようになるまで回復していた。美術の講座に参加し、ウィルスンさんとかかわりの中で、動かない手の見方や回復してきている手の変化に気づかせてくれたことへの「ありがとう」ではないか。また、空間を見るといった物の見方を教えてくれたことで怪我と向き合い、乗り越えるきっかけを与えてくれたことへの感謝の言葉でもある。さらにこの出会いが内面の変化も与えてくれた。だが、自分の変化に気付いただけで、何が変わったのかどう表現していいのか分からない。そこで、「ありがとう」だけ書いたのだと思われる。

「ありがとう。君に会えてよかったよ。」

以降のウィルスンさんからの手紙で分かることだが、親友のレオンへの贈り物を探すために夏休みは、仕事場のアトリエから出かけていた。この「ありがとう」は、ゼブラと出会うレオンへの贈り物が見つかったことの感謝の言葉である。ゼブラだけでなく、ウィルスンさんにとってもよい出会いになったことが分かる。

そうだ、土曜日から日曜日に、あの通りを歩いてみよう。

午後の休み時間に校庭で、フランクリン通りの方を眺めて、あの目のことを思い出していたゼブラが、思いついたことだ。あの事故以来、通りを歩いたことも坂を下りたこともなかったことから、坂を避け、事故と走れない自分とに向き合ってきたことがゼブラにとって、これは大きな変化である。

うん、ゆっくり坂道を角まで下りて、また少し上がって、学校の前を通って家に帰ろう。

「うん」で自分に坂を下りることを確認しているようなニユアンスになっている。勇気を出して新たな一歩を踏み出しているようにしている。

「通りで、すごくいいものを拾えそうな気がしてさ。」

この言葉からゼブラが何を考えているのか読者によって考え方が違うと思う。新たな自分を探すという意味であるとも

とれるし、もしかしたらウィルスンさんのようなアーティストになろうとして、フランクリン通りの角のゴミ箱をのぞきに行こうとしているのかもしれない。なぜ、ゼブラはこう言ったのか、何を拾うつもりなのかは、分からない。いずれにしても、「あら、少しは明るい人生を歩めそうな感じになつて来たわね。」というアンドリアの言葉から、ゼブラが明るく生き生きした姿に変わったのは間違いないだろう。

三 考察

この作品の主題は、「人と人が出会い、ふれあうことによってもたらされる人間的な部分の成長の素晴らしさ」であると考えられる。交通事故により、心に大きな傷を負った主人公ゼブラは、美術講師ウィルスンとの出会いによって、いつものまにか励まされ、生きることに向きになっていく。ウィルスンもゼブラと出会ったことで、過去に対して新たに向き合うことができるようになった。この作品を学ぶ生徒は、学校生活の中で人との出会いによる自身の変化や素晴らしさを感じる機会がそれほど多くはないかもしれない。しかし、学校の中でも、クラス替えや卒業など、人との出会いや別れを経験する。そのためゼブラのように事故にあつていなくても、この作品を通して、生徒は主人公の思いや考えを、自分自身の経験として受け止めることができるだろう。主人公の心情の変化をとらえ、人との出会いや別れによってもたらされる、

主人公の成長を読み取ることができるだろう。本文のラストにおいて、ゼブラの心情は、交通事故にあつてから一度も歩こうとしなかったフランクリン通りを「もう一度歩いてみよう」と考えるまで変化している。生徒は、その理由を考え、話し合うことで、ウィルスン先生との関わりが、彼に良い変化をもたらしたと読み取ることが出来るようになるだろう。

また、作者のねらいや表現上の特色を読み取る力を生徒に身に付けさせるのに、適した教材であるといえる。主人公ゼブラが、人との関わりによりどのように変化していったか読み取るだけでなく、作者が登場人物に与えた役割や、独特な表現についても学ぶことができる作品である。特に、登場人物の中で重要な役割を果たしているのは、ゼブラの友達アンドリアのセリフや行動である。アンドリアのセリフや行動は、ゼブラの気持ちを代弁している。ア

ンドリアの言動の変化を読み取ることと、ゼブラの心の変化、成長を感じることができる。主人公の心情に共感するだけではなく、作品を作者の立場に立って見直すことで、より深く作品を理解することができるように考えると考える。



ゼブラ（ハイム・ポトク）その二

小西 大地、角 知希、三輪 美海、山本 充

一 作者・訳者、作品について

作者のハイム・ポトク (Chaim Potok 一九二九〜二〇〇二) はニューヨーク・シティ生まれ。ユダヤ系アメリカ人の作家である。十六歳で小説を書き始め、イエシヴァ大学では最優等で文学士号を、ペンシルヴァニア大学では哲学博士号を取得する。朝鮮戦争の際、ラビ（ヘブライ語で「我が主人」の意。ユダヤ教の教師の敬称）として、衛生隊や工兵隊とともに十六ヶ月間従軍した経験をもつ。『ゼブラ』の中でも戦争（ベトナム戦争）が様々な形で影を落としている。

代表作は『選ばれしもの (The Chosen)』（全米図書賞にノミネートされ、エドワード・ルイス・ワラント賞を受賞した）などがある。二〇〇二年七月二十三日、癌のためフィラデルフィア市郊外の自宅で死去。享年七十三歳。

訳者の金原瑞人（一九五四〜）は岡山市出身の翻訳家。法政大学英文学専攻博士課程修了。現在、法政大学社会学部社会学学科教授。第一三〇回芥川賞を受賞した金原ひとみ（『蛇にピアス』の父である。一九八九年に見学したアイオワ大学の創作ゼミに触発され、法政大学社会学部で小説創作ゼミを開講した。このゼミは古橋秀之、秋山瑞人、早矢塚かつやとい

った小説家を輩出している。講談社児童文学新人賞の選考委員もつとめる。教鞭をとるかたわら、英米児童文学・ヤングアダルト向けの小説の翻訳・紹介活動に従事している。訳書には「レイチェルと滅びの呪文」（クリフ・マクニッシュ、理論社）、「ルーム・ルーム」（コルビー・ロドースキー、金の星社）など多数ある。

「ゼブラ」は、「Zebra」(『Zebra and other stories』一九八八)を光村図書中学校二年生用教科書のために訳したもの。現在は短編物語集『ゼブラ』（青山出版社、平成十三年）の中に収録されている。教科書教材「ゼブラ」は原作「Zebra」を忠実に訳したものではなく、教科書のために省略、書き換えが行われている。翻訳された短編集『ゼブラ』所収の文章と教科書作品とは分量的に比較してみると、教科書は原作の訳文に対して約半分の長さになっている。訳者の金原瑞人はこの点の経緯について、光村図書出版「学習指導書」において次のように述べている。

「ゼブラ」について
ハイム・ポトクの短編「ゼブラ」を読んだときの衝撃は忘れられません。心にまで響いてくる作品というのは、こ

ういうものなんだと実感しました。ちょうどその頃、中学生向けの教科書の題材探しをしていたので、それならぜひこれとと思い、早速編集者と相談したのですが、教科書には長すぎるとのこと。そこで所々削りながら訳してみました。こうしてできたのが教科書に載っているものです。細かいニュアンスが多少抜けてしまったかもしれませんが、作品そのものの持つインパクトは決して弱くなっていないと思います。

二 叙述について

本人もいつからそうよばれたのかは覚えていない。

何かきっかけがあったわけではなく、自然とそう呼ばれた。

アダムはゼブラ（しま馬）というあだ名も好きだったし、走るのも好きだった。

このゼブラというあだ名を自分に合っているとよく気に入っている。

フランクリン通りの急な坂の上に来ると、ゼブラは足が軽くなって、走らずにはいられなくなる。

大好きな走るといふ行為を衝動的に行いたくなる。

しま馬ではなく、わしになったような感じだ。

走っているのではなくて、地面から解き放たれてわしのように飛んでいるような感じになる。

ところが一年前、フランクリン通りを駆け下りてわしになったとき、大きな影が目の端に現れた。

影が車であるとは明示しない。「目の端に現れた。」正面衝突ではなく横からぶつけられたのであろう。

そして次の瞬間、暗闇の中に投げ飛ばされてしまった。

車にぶつかって飛ばされただけでなく、身も心も暗闇に投げ飛ばされたのである。

ときどき、首からつっている左手が痛み出すことがある。

痛み出すことによって、事故のこと、怪我のことをそのたびに思い出す。

ゼブラが校庭に立って通りを眺めていると、男の人がフランクリン通りをやつて来た。

ゼブラは休み時間に周りの子たちと遊ぶとはせずに、一人で通りを眺めている。

角で立ち止まり、ごみ箱をのぞいていたが、欲しいものがなかったらしく、そのまま学校のほうに歩いてきた。

ゼブラは男の人のことをじっと観察している。

ゼブラは男の人の上着の左そでを見ないようにして答えた。
 気になっているが、相手に悪いと思ってなるべく意識しないようにしている。

「アダムです。」

初対面の人なので、みんなに呼ばれているようにゼブラとは名のらない。

「美術……ですか。」

美術に興味を持っていないことが分かる。

「ありがとう。ところで、その手はどうしたんだい、アダム。」
 最後にアダムと呼び掛けることで、親しみを込めている。

そう言いながらゼブラは、男の人に左腕のことをききたくてたまらなかった。

自分が腕のことを聞かれたので、さっきまでは気にしないようにしていたがやはり気になってしまっている。

骨が折れていて使い物になりそうにない。

ゼブラの腕の暗示か。この時点ではゼブラの目には使い物にならないように見えている。

窓ガラスにぶつかって翼を折ってしまい、男の子が治してやろうとすけどだめで死んでしまい、男の子が木の根元に埋

めてやるという話だった。

ゼブラの悲しみを帯びた心情が、話の内容にも表れてきている。

ウイルスンさんが言った。

「男の人」から「ウイルスンさん」に変わっている。ゼブラのウイルスンさんに対する心の距離が縮まったことが分かる。

ゼブラが言われたようにすると、ウイルスンさんはすごい速さで何かかき始めた。

ウイルスンさんの描くスピードに驚いている。

ずっと長い鼻、薄い唇、悲しそうな目、がっしりしたあご。

ゼブラは順番に目を移して認識していつている。

「ウイルスンさん、僕、みんなからゼブラとよばれているんです。」

「ゼブラ」というみんなから呼ばれているあだ名をウイルスンさんにも教えている。ゼブラがだいぶん心を開いたことが分かる。

それからまた、ゼブラに押さえてもらって何かかき、それをゼブラに渡してから立ち去った。

この押さえてもらう作業には一度目のように「押さえてて

くれないか。」という言葉はない。ウイルスンさんがものをか
くときは紙を押さえる必要があるとゼブラが理解しているの
である。二人の関係性ができあがってきている。

走っているしま馬は、今にも紙から飛び出してきそうだと。

しま馬が、飛び出してきそうにみえるほどの躍動感で描か
れている。

ゼブラは何度もその絵を出して眺めた。

しまっては出して眺め、またしまっては出して眺め、とい
う行為を繰り返している。

その日の授業が終わって見てみると、不思議なことに、しま
馬が動いているように見えた。

「飛び出してきそう」のではなく、実際に動いているよ
うに見えた。

「想像力の大切さがわかると思うわ。」

イングリッシュ先生はゼブラに想像力の大切さをわかって
ほしいと思っている。

イングリッシュ先生はほほ笑んで言った。

ゼブラが講座を取ってくれたことが嬉しい。

明るい青の長袖のシャツにジーンズという格好だ。

今までとは違う印象を受けている。

ウイルスンさんは、恥ずかしそうなほほ笑みを浮かべて言っ
た。

ウイルスンさんの優しい人柄が表れている。

ゼブラはちよつとためらってから、アンドリアのデッサンを
始めた。

自分は絵がうまくないという思いと、相手の似顔絵を描く
という行為そのものに対する気恥ずかしさがある。

だけど、僕はそんなに悲しそうな顔をしてるんだろうか。

人から見れば自分は悲しそうに見えているのだろうか、と
思っている。

ウイルスンさんはみんなの絵を見て回り、それから黒板にチ

ョークであれこれかきながら一時間ほどかけて説明した。

ウイルスンさんの熱意が伝わってくる。またこの後、倒置
が使われ、何を説明したのかが強調されている。

ウイルスンさんの手は驚くほど速く動いて、黒板にいろいろ
なものをかいていく。それに合わせて、折ってあるそでが軽
く揺れる。

ウイルスンさんの絵を描く技術の高さを表すと同時に、片
腕が無いことにも着目させる。

「なあに、あたし、今度は馬なの。」アンドリアが言った。「まさか、それにしまをつけるつもりじゃないでしょうね。」

二度目のデッサンに対してのアンドリアの評価。あだ名の「ゼブラ」をかけてあり、二人の親しさが感じられる。

ウイルスンさんは、恥ずかしそうに言った。

ウイルスンさんの威張らない、謙虚な性格がにじみ出ている。

クラスみんなが一斉に拍手をした。フライパンの上に乗った道化師は今にもお辞儀しそうだ。

ウイルスンさんの彫刻に対するクラスの高い評価がうかがえる。また、道化師が「踊りだす」などではなく「お辞儀しそう」となっているところからも、ウイルスンさんの持つ紳士的な部分が感じられる。

そして毎日、その数は増えていった。

生徒たちが熱心に取り組んでいることが分かる。

段ボールの紙をつぎはぎして作ったしま馬。

みんなが作った彫刻を列挙している部分であるが、最後にしま馬を置くことで、次に続くアンドリアのセリフへと自然な流れができています。

ゼブラはけがをしたほうの手をかいだ。脂汗がにじみ、体が震えてくる。

自分のけがをした手と向き合うことで、思い出したくない事故のことに対する恐怖心が表されている。

それからゼブラの絵を見た。「みんな、手を見るんじゃないぞ。手の周りの空間を見るんだ。」

ゼブラの絵を見たあとにウイルスンさんは発言しているのので、ゼブラに対するメッセージであるともとれる。ゼブラはウイルスンさんの教えが定着しておらず、「手」をかこうとしていた。

ところが驚いたことに、今見るとちゃんとした手に見えた。

ゼブラの自分のけがをした手に対するイメージの変化が表されている。手の周りの空間を見ることで普段とは違う見え方になった。

そのヘリコプターの外の空間をじっと見つめた。

ウイルスンさんの教えを守り、取り組む姿勢が見える。

ウイルスンさんは受け取ると、手が一瞬こわばったようだったが、それを壁にはった。

ウイルスンさんにとってのヘリコプターは恐怖の対象であることがうかがえる。

いろんな角度から眺めると、ゼブラの顔を見てうなずき、それを窓の棧に置いた。ヘリコプターは夏の光を浴びて輝いた。ウィルスンさんにとって恐怖の対象であったヘリコプターに対するイメージに変化が生じたようにとれる。ウィルスンさんが手をこわばらせるほどのものが、輝く存在になっていることから分かる。

ゼブラはなにも思いつかず、窓越しに空を見つめ、棧に置いてあるヘリコプターを見つめた。

ゼブラがかくものについての暗示がなされている。

アンドリアの目が分厚いレンズの向こうで輝いた。そして、本当にうれしそうな表情が浮かんだ。

ゼブラのことをアンドリアがどれだけ心配していたかが分かる。また、「分厚いレンズの向こう」という表現から、普段そのことを隠していたことも伺える。

黒い鳥が何羽か、旋回しながら空高く昇っていく。車の行き来する音が聞こえてくる。窓の棧に載っているヘリコプターは、スロットル全開で動きだしそうだ。

アンドリアが心から喜んでくれたことによって、ゼブラに希望が見えてきたことを表している。ゼブラにとってトラウマである車の音が聞こえているのに、ヘリコプターが動きだしそうという表現に表れている。

それを左手で押さえながら、風景をかいだ。

「左手で押さえながら」の後に、読点を置くことで、左手を使っていることを強調している。左手を意図的に使う様子から、ゼブラの以前と違った様子が表されている。

なぜかそれは人の顔のように見えた。

「紙を人の顔にする」、ウィルスンさんに教わったことが身についていることが表されている。

「親友なんだ。ベトナムでいっしょだった。わたしなんかより、ずっとすばらしいアーティストになっていただろう。」

「なっていただろう」と過去形にすることで、レオンという人がもう生きていないという含みを持たせている。

がつしりとしたたくましい手だった。

ゼブラがウィルスンさんに感じている頼もしさや信頼が表されている。

だれかがわたしのために作ってくれたすばらしい贈り物を持つて。

ゼブラの絵がすばらしい贈り物であることを暗示している。

イングリッシュ先生は立ったままその手紙を見つめていたが、ふと顔を背けると目頭に指を当て、それから大きな本を持ってきた。

イングリッシュ先生は、ウィルスンさんの行動に感銘を受け、感動している。大きな本をすぐに持ってきたことから、イングリッシュ先生にもベトナム戦争に対する何らかの思いがあることが推測できる。

それはワシントンにあるベトナム戦争の記念碑で、大きな黒い壁には何千という戦死者の名前が刻まれている。

戦争によって多くの人が傷ついた事実が出され、その犠牲者であるウィルスンさんやレオンの無念があらわになる。

午後の休み時間、ゼブラは校庭で、フランクリン通りの方を眺めて、あの日のことを思い出していた。

「フランクリン通り」「あの日」は共にゼブラが事故にあった場所や時間のことである。そのことを思い出し、以前とは違う心境を持ち始めている。

そうだ、土曜日から日曜日に、あの通りを歩いてみよう。あの事故以来、フランクリン通りを歩いたことはなかったし、坂を下りたこともなかった。うん、ゆっくり坂道を角まで下りて、また少し上がって、学校の前を通って、家に帰ろう。

ゼブラがフランクリン通りを歩く決意が、「そうだ」や「うん」などの語によって生き生きと描かれている。

「通りで、すごくいいものを拾えそうな気がしてさ。」「あら、少しは明るい人生を歩めそうな感じになってきたわね。」

アンドリアのゼブラに対する言動「悲しい話」「暗い絵」「悲しそうな顔」との対比として「明るい人生」が用いられ、以前とは対照的なゼブラの様子が伺える。

三 考察

(1) ゼブラの左手

まず、ゼブラの左手の怪我がどのようなものなのか、本文から読み取れることを考えてみる。

手の方はどうなるかわからないということだった。ときどき、首からつっている左手が痛み出すことがある。

という記述から、医者にもゼブラの左手の怪我の回復がどうなるのかわからないということである。これは、怪我が何かしら心因性のものであるのではないかと読み取ることができる。ゼブラが休み時間、校庭に立って事故の起きた通りを眺めていることからわかるように、この怪我は心に大きなダメージを与えていると考えられる。

(2) 想像力

作品のテーマを考えるにあたり、キーワードとなりそうなのが「想像力」である。この話には四回「想像力」という言葉が出てくる。

・先生は「想像力の授業」と言っている。
 ・「講座をとって見たら。想像力の大切さがわかると思うわ。」
 ・イングリッシュ先生はほほ笑んで言った。「それと想像力も。」

・「想像力を使いなさいよ。」アンドリアはそう言うってから
 の四か所である。そもそも想像力とは「想像をする心的能力」
 のことであるが、大抵はものごとをプラスに考えようとする
 時に用いる。また、

フランクリン通りの急な坂の上に来ると、ゼブラは足が軽くな
 って、走らずにはいられなくなる。坂を駆け下り始めると
 もう、足なんかになくて、飛んでいるような気持ちになる。し
 ま馬ではなく、わしになったような感じだ。

からは、事故の前にゼブラが想像力豊かな少年であったとい
 う印象を受ける。ところが、

「あんたって、いつも悲しい話ばかりね」「人生、そんなに
 暗く考えることないじゃない」

というアンドリアのセリフからもわかるように、ゼブラは事
 故によって、怪我とトラウマを手にしただけでなく、人生を
 プラスに考えようという力（想像力）を失ってしまった。左
 手がどうなるかわからないのはゼブラの心が関係しているの

では、と前で述べたが、おそらく事故で想像力を失ったこと
 が原因と考えられる。

（3）作品のテーマ

どうなるかわからなかったゼブラの左手が回復に向かう兆
 が見え、フランクリン通りを歩いてみようという結論をだ
 すことでトラウマも克服できそうだ、というところで話が終
 わる。夏休みに入る前には到底考えられなかった変化である。
 夏休み中、美術を通してゼブラは、ウィルスンさん、アンド
 リア、イングリッシュ先生などの周囲の人と交流を深め、成
 長をしていく。その成長ぶりは本文最後の

「あら、少しは明るい人生を歩めそうな感じになってきたわ
 ね。」アンドリアが言った。

に端的に表されていると言える。事故で失った想像力が、交
 流を通して取り戻されてきたのである。以上のことをふまえ、
 この作品のテーマは、周囲の人との交流によって回復された
 想像力とゼブラの成長であると考ええる。



デューク（江國香織）

浅野 裕理、稲垣 大輔、田中 理絵、中西 絵理子

一 作者と作品について

江國香織は一九六四年に東京都に生まれる。随筆家江國滋の長女。代表作に『きらきらひかる』『冷静と情熱のあいだRosso』などがある。小説だけでなく、詩集やエッセイも発表しており、児童文学作家でもある。短期大学を卒業後、アメリカへ留学した。その後、様々な作品を世に送り出した。恋愛小説が多く、女性に人気が高い。一九九二年に『きらきらひかる』で第二回紫式部文学賞を受賞。二〇〇三年度には『号泣する準備はできていた』で第百三十回直木賞を受賞した。その他に様々な賞を受賞しており、今後のさらなる活躍も期待される。

「デューク」は江國香織初の短編集「つめたいよるに」に収められている。この短編集には二十一の作品が収められており、「つめたいよるに」と「温かなお皿」の二部構成となっている。第一部「つめたいよるに」では夜または夕闇の場面がある作品が多く、夜に話の核となるような展開がある。また、話の内容が現実離れしているものが多く幻想的な印象が強い。第二部「温かなお皿」では食べ物や食事に関する表現が盛り込まれており、それらを通して切り取った様々な年齢

や性別の人たちの人間模様が描かれている。

この短編集全体の表現の特徴は、ひらがなを多用した、柔らかい文体となっていることである。その理由のひとつに、作者が童話作家の出身であるということがある。例えば「デューク」の冒頭での「びよおびよお泣く」といった表現は、いかにも児童文学にありそうな表現である。

「デューク」は第一部「つめたいよるに」に収められた短編集最初の作品である。この作品では夜に話が展開するのではなく「うす青い夕暮れ」という昼と夜の境界にあたる時間で話が完結している。可愛がっていた愛犬が神秘的な力を持つ少年となって現れ、別れを告げるといふ怪談のような構成であるが、決しておどろおどろしい印象は受けない。やわらかい文体によって幻想的な雰囲気を出し、ファンタジー作品のようである。二〇〇一年の大学入試センター試験に出題され、涙を流す受験生が続出したとも言われ、話題になった。

二 叙述について

二十一にもなった女が、びよおびよお泣きながら歩いているのだから、ほかの人たちがいぶかしげにわたしを見たのも、

無理のないことだった。

「びよおびよお」という擬態語がつくことで、激しく泣いていることが推測できる。ただこの時点では、泣いている理由是不明。だから、悲しんでいるかどうかもわからない。

それでも、私は泣きやむことができなかった。

たとえ周囲の人からいぶかしげに見られようとも、私が感情を制御できない状態であることがわかる。それは、彼女にとって衝撃的な事件が起こったから。

デュークが死んだ。私のデュークが死んでしまった。私は悲しみでいっぱいだった。

ここで初めて、私が泣いていた理由が明かされる。私は、デュークが死んでしまったことが原因で悲しくて泣いていた。「悲しみでいっぱい」とあるので、心の中には悲しみしかなかったのだろう。また、文末が「死んだ。死んでしまった。」と二回目を「しまった」にすることで、デュークが死んだことが強調されている。そのことが、私が大きな悲しみの中にいることを強調している。

次の日も、私はアルバイトに行かなければならなかった。

「行かなければならなかった」から、私はアルバイトに行きたがっていない。もし、自分から進んでいこうとするならば「行かなければならなかった」とはならない。ここから、私が律儀で責任感のある人間だと分かる。

玄関で、みように明るい声で“行ってきます”を言い、表にでてドアをしめたとたんに涙があふれたのだった。

「みように明るい声で」のところから、私が強がっていることが分かる。自分の感情を抑えているからこそ、「みように明るく」なってしまったのだろう。しかし、一人になったとたんに抑えていた感情が爆発してしまい、涙があふれてしまった。

泣けて、泣けて、泣きながら駅まで歩き、泣きながら改札口で定期を見せて、泣きながらホームに立って、泣きながら電車に乗った。

「泣けて」「泣きながら」の繰り返しから、悲しみのあまり、泣きやむことなく泣いていたということが伝わってくる。また、「泣きながら」を反復することで、のちの「ひっきりなしにしゃくりあげている」と同様に、私の悲しみの深さが印象付けられる。

似たようなコートを着たおつとめ人たちが、ひっきりなしにしゃくり上げている私を遠慮会釈なくじろじろ見つめた。

私は、現実の中を進んでいる。

無愛想にぼそつと言って、男の子が席をゆずってくれた。十九歳くらいだろうか、白いポロシャツに紺のセーターを着た、ハンサムな少年だった。

少年の登場。少年の登場によって少しずつ非現実（幻想）の世界に引き入れられていく。

蚊のなくような歌声でようやくひと言お礼を言っ、わたしは座席に腰かけた。

悲しみがいっぱい泣くことしかできないが、お礼は言わなければならぬと思った。しかし、ひっきりなしにしゃくりあげている状態では、それはかなり難しいことである。だから、「蚊のなくような」声で「ようやく」お礼を言ったのだろう。

少年の視線にいくめられて、なんだか動けないような気がした。

深い目の色をした少年の視線が、神秘的、もしくは偉大な感じがしたのではないか。つまり、人間を超えたものを少年の視線に感じ取ったから、動けないような気がしたのではないか。

満員電車の雑踏から、さりげなく私をかばってくれていた。少しづつ、私は気持ちがおちついてきた。

愛犬デュークの死でかなりセンチメンタルになっている私にとって、街中の雑踏やクリスマス前の街中という明るい雰囲気は、今はかわりたくない現実の数々。「悲しみしかない」と分かっている、ひきこもって感傷にひたっていた。今は明るい雰囲気の中にいたくない。」という気持ち

ちだった。だからかばってくれることで、少しずつ、気持ちが落ち着いてきた。

公衆電話からアルバイト先に電話をして、風邪をひいたので休ませていただきます、と言った。

アルバイトは、今は関わりたくない現実。だから、アルバイトを休むことで現実を避けている。

おかげで、そのひろびろとしたプールを二人で独占してしまえた。

私の目から見ると意識的には酔狂だが、非現実で少年と二人きりになる。「独占してしまえた」から、私は、少年とプールに二人きりになったことを喜んでいるのか。少なくとも、好都合だと考えている。ここから、非現実に引き入れられていく。

プールの人工的な青も、カルキの匂いも、反響する水音も、私にはとてもなつかしかった。

二人きりの酔狂の始まり。二人は無言だが、「人工的な青」は視覚、「カルキの匂い」は嗅覚、「反響する水音」は聴覚と、情景を五感に訴えてはつきりと描き、幻想的な世界を思わせる描写である。

私は、泳ぐって、気持ちのいいことだったんだな、と思った。初めて泳いだことでの気持ちよさに、プールに來たことへ

の懐かしさが加わっている。悲しみの後だから、よけいに気持ちよさを感じるのかもしれない。少年（デューク）は私が泳げないことを知っていて、泳ぐことの気持ちよさを教えてあげたかった。だから、不思議な力を使って泳ぐことの気持ちよさをプレゼントしたのかもしれない。その結果、プールは私にとって、マイナスイメージからプラスイメージへと変わっている。後に「今度は私がいいところを教えてあげる番だ」と述べている点からも、それが分かる。

プールを出ると、わたしたちはアイスクリームを買って、食べながら歩いた。泳いだあとの疲れも心地よく、アイスクリームの甘さは、舌にうれしかった。このあたりは、少し歩くと閑静な住宅地で、駅の周りの喧噪がうそのようだった。わたしの横を歩いている少年は背が高く、端正な顔立ちで、わたしは思わずドキドキしてしまった。晴れた真昼の、冬なおいでした。

駅のまわりの喧噪がうそのような静けさ、冬なのにアイスクリームを食べているといった行動の描写から、私と少年が現実から少しはなれたところにいるということが読み取れる。

私の横を歩いている少年は背が高く、端正な顔立ちで、私は思わずドキドキしてしまった。

泳いで気持ちがよくなったことで、悲しみでいっぱいだった心にゆとりができ、少年の顔を観察することができるまでになったことがわかる。少年に惹かれ始めている。

地下鉄に乗って、私たちは銀座に出た。

私は深い悲しみの感傷に沈み、現実を避けたがっていた。しかし、少年に出会い、非現実の幻想の世界で過ごすことで、私は少年に惹かれ、少し現実に対して前向きになっている。だから、自分から「銀座」という喧噪の場所へ向かった。

デュークも落語が好きだった。

今までもデュークの好きだったものが、少年と重ねられてちりばめられていた。オムレツ、アイスクリーム、「古代インドはいつも初夏だった。」しかし、この落語の場面になって初めて、私はデュークのことを想起し再び悲しい感傷が戻る。落語はゆっくり見るものだからゆっくり思い出したからだろう。また、消したはずのテレビがついてデュークが落語を見ていたという非現実的な出来事が、この非現実的な少年との落語鑑賞と重なったからとも考えられる。

私はだんだんゆううつになってしまった。

少年と出会って、悲しい気持ちが少しずつ薄まっていた。特に、プールに行った時には、デュークのことを完全に忘れていた。しかし、落語を見ているうちにデュークのことを思い出して、悲しみが戻ってきたのでゆううつになった。

デュークが死んで、悲しくて、知らない男の子とお茶を飲んで、プールに行って、散歩をして、美術館をみて、落語を聴

いて、私はいったい何をしているのだろう。

今の状況を客観的に捉えている。デュークの悲しみを思い出したことで、自分がなぜ少年と一緒に行動しているのかわからなくなっている。少年と一緒にいて、気持ちが悪く落ち着いたことを忘れてしまっている。プールの時と逆。

デュークはもういない。デュークはいなくなってしまった。

初めは「デュークは死んだ」となっている。これは、存在（生きているもの）の死を意味している。しかし、ここでは、存在感がなくなってしまう。少年との出会いのおかげで、デュークの死の受け止め方が少し前向きに変化している。

下を向いたまま私が言うと、少年は私のあごをそっともちあげた。

このころにはデュークを失った悲しみが戻り、夢から覚めつつある。だから、「楽しかった」という気持ちではないのだが、少年に氣を使つて「楽しかった」と言っている。「そう、私もよ。」という言葉は、本心から出た言葉ではない。だから、「下を向いたまま」。

今までずっと、だよ。

少年と私の間で「ずっと」の期間にずれが生じている。

なつかしい、深い目が私を見つめた。

「なつかしい」とあるのだから、少年にデュークを重ねて

いるのではないだろうか。しかし、この時点では重ねているだけで、少年がデュークだとは考えていない。

そして、少年は私にキスをした。私があんなにおどろいたのは、彼がキスをしたからではなく、彼のキスがあまりにもデュークのキスに似ていたからだった。

ここで、少年がデュークだと気付く。理由は「深い色の目がなつかしい目」という記述と、冒頭のデュークの描写で、「そうして、デュークはとても、キスがうまかった」とキスを強調した言い回しをしていたからだ。つまり、キスがデュークを想起させる、最もインパクトのあるものである。

私はそこに立ちつくし、いつまでもクリスマスソングを聴いていた。銀座に、ゆっくりと夜がはじまっていた。

「立つて」ではなく「立ちつくし」であることから、私が呆然としていることが読み取れる。呆然としながらも、クリスマスソングを「聞こえてきた」のではなく「聞いて」おり、現実に対して少し前向きになっていることがわかる。避けていた現実に、少しずつなじんでいく姿が読み取れる。

三 考察

三― 主題

(1) 「私」の変化

デュークの死を受け入れられずに現実を避けていた私は、

神秘的な力を持つ少年と出会い、非現実の幻想的世界へと引き込まれる。私はその世界の中で少年に惹かれていくと同時に、現実に対して少し前向きになり、デュークの死に対する捉え方も前向きに変化する。デュークは私に泳ぐことの気持ちよさを体験させるなどさやかなプレゼントをしたりして、神秘的な力で私の気持ちを静めた。そして、犬の状態では言葉にできなかった、「愛していた」というせりふを伝え、突然別れを告げて去っていく。愛犬を失った平凡な女性の心境の変化、死を背景とした女性と少年（デューク）の幻想的な愛を描いている。

この作品の解釈は「死んでしまった」から「いなくなってしまった」へと変わる私の死に対する捉え方の変化と、避けていた現実になし向き合うことになる私の様子（水から銀座へ向かう・雑踏に目を向ける記述）など、主人公の「私」の心境の変化を中心にした。

（2）「デューク」の主題

これはなかなか難しいものがある。いかんせん短編であるので、主題が捉えにくいということもあるが、何度読んでみても、「作者が何を伝えたかったのか」は見えてこない。

デュークが「私」に会いにきたただけだという訳でもあるまい。ただデュークは「私」に会いに少年の姿になって出て来たということは確かである。（「僕もとても愛していたよ」とだけ言いに来たという記述がある。）デューク＝少年。

「私」が少年との出会いによって、一時的にでもデューク

の死から離れ、冷静さを取り戻し、涙を忘れたことも事実である。プールやそのあとに食べたアイス、美術館のシーンには、彼女の涙は一切見られず、デュークという名前を彼女が思ったり、言ったりする記述もない。（ところどころに、少年とデュークの共通点や、「私」とデュークの思い出が散りばめられてはいるが。）

そして、少年との一連のデートにより、デュークは死んでしまったという深い悲しみがいくらか鎮められたということがなんとなく予想できるだろう。ただ、ここで強調しておきたいのは、「私」は決してデュークの死を忘れたわけでもなく、その悲しみがなくなっただけでもない。デュークが私のそばにいないということ、少年と出会って一時は忘れていたが、落語のシーンにおいて思い出され、悲しみが再び襲ってきた。

注目されるのはデューク（＝少年）との再会が、「私」にどういった変化をもたらしたのか、ということである。この物語は「私」が呆然と立ち尽くす場面で終わっているのですが、彼女が何を思っていたのか、これから先どういった生活をしていくようになるのかは、読者の想像に委ねられている。私は、彼女がこれから先デュークの死の悲しみにとらわれ続けて生きていくとは思っていない。少年との出会いによって、何かしらの変化がもたらされ、デュークとの間に確かにあった愛を支えにして、力強く生きていくと思う。デュークが「とても愛していた」と言いに来たことで、彼女が救われることは間違いないと考えられる。ただ、それが実際に起こり得るかどうかはわからない。

この物語は読者によって解釈が異なってくるであろうし、私とは違った見方もできるであろう。江國香織は何を伝えたかったのか。「デュークの死と、これから先も生きていく私」の物語ではあるまいか。そして、これから先も生きていく「私」をデュークは励まし、元気づけるために現れたのではないだろうか。デュークはもう同じ時間を過ごせないけれども、「私」は彼との思い出を支えに生きていくだろう。デュークと「私」との種族や時間を越えた愛がこの物語にはある。

(3) きちんとした別れ

私は、この作品の主題は、「デュークとの別れをきちんとしたものにすること」であると考えている。私が考える「きちんとした別れ」というのは、お札を言い合ったり、さよならを言ったりすることで、心にけじめをつけるという別れのことである。私がこのように考える理由は、二つある。

まず一つは、少年の「それだけ言いにくかったんだ。」という言葉である。この「それ」というのは、前述の「今までずっと、僕は楽しかったよ」「僕もとても、愛していたよ」というデュークの言葉を指している。つまりデュークは、今まで自分のことをかわいがってくれていた「私」にお札を言うために、少年の姿になって戻ってきたのである。デュークは、「いつのまにか固くなって、つめたくなってしまう」ていたのでも、自分でも知らない間に、死んでしまっていた。だから、「生まれたばかりの赤んぼう」の時からかわいがってくれていた「私」に、お札の気持ちを示すことができなかったのではな

いだろうか。また、伝えたくても犬であつたために、言葉に出して気持ちを伝えることができなかった。だから、人間の姿になり、人間の言葉でお札を言つて、「私」との別れをきちんとしたものにしたのである。

もう一つの理由は、この作品の全体に描かれている「私」の気持ちである。デュークの突然の死によって、「私」は悲しみで心がいっぱいになっていた。その悲しみは、周囲の人にいぶかしげに見られても、電車に乗っても、泣いてばかりいるほどだった。もちろん、デュークをかわいがっていたからという理由もある。しかし、前述したように、デュークはいつの間にか死んでしまったのである。何の兆候もなく、突然死んでしまったのである。だから、デュークの死に対する心の準備ができていないので、心が悲しみでいっぱいになってしまったのだ。

それが少年と出会って、プールに行き、アイスクリームを食べ、美術館に行った後、「私」の気持ちは明るくなっている。この間には、デュークが死んでしまったことを悲しんでいる描写は一つもない。

そのあと、落語を聴いているとだんだん悲しみが戻ってくる。しかし、その悲しみは、冒頭での悲しみとは違う。その根拠は、冒頭では、「デュークが死んだ。私のデュークが死んでしまった。私は悲しみでいっぱいだった。」となっているのに、落語を聞いた後では「デュークはもういない。デュークはいなくなってしまう。」の部分にある。つまり、冒頭でのデュークの死に対する悲しみが、落語を聞いたあとでは喪失

感に変わっているのだ。冒頭の死に対する悲しみは、「デュークが死んだ」という事実を認識しているだけである。一方、喪失感が生まれたということは、デュークの死を受け入れたということではないだろうか。喪失感は、何かを失った時に生まれる感情である。つまりここには、「デュークの死」から「デュークを葬った」へと考える過程が存在することになる。この過程が存在するようになった時、「私」はデュークの死を受け入れたのではないだろうか。そして、デュークの死を受け入れた時が、「私」がデュークとの別れをきちんとしたものでできた時ではないだろうか。

以上のことから、私はこの作品の主題は、「デュークとの別れをきちんとしたものにすること」だと考えている。この一日のデートをすることで、デュークも「私」も、死んでしまいう前にはできなかった「きちんとしたお別れ」をすることができるのである。

三―二 表現

(1) 「死」を背景としたやさしい世界

全体的にぼんやりとだが「死」が背景としてある。死と生をはっきり遠ざけて恐ろしい印象を与えるのではなく、死をとてもしよく、親しいもののように描いている。雑踏、喧騒の表現を豊富にして現実感を浮き立たせ、私と少年を現実から隔離している。その薄い現実の中で、会話文は簡潔で、無言の場面も多いが、五感に訴える表現を用いて幻想的な情景を想起させ、この無言によってかえって少年との触れ合いを

強く印象づけている。柔らかな文体と、明確に人物の感情を描かず、ある意味ではつかみ所がなく「落ち」もはっきりとしないといった手法によって、「死」を背景としているとは思えないやさしく悲しい幻想的な世界を表現している。

(2) 感覚に訴えかけてくる表現

「デューク」では、二〇〇一年のセンター試験問六の選択肢に「d 『私』の混乱した心情を際立たせるために、同じ言葉を反復使用することは、一見稚拙な表現のようにだが読者の心に強く印象付けられるという効果がある。」とあるように、同じ表現が何度も使われていて、「私」の心情が強調して書かれている。その一方で、分かりにくい表現が用いられており、それらをどう解釈していくかが問題になってくるように思われる。例えば、「プールの人工的な青も、カルキの匂いも、反響する水音も、私にはとてもなつかしかった。」という記述。これは、本文解釈にもあるように、「私」が感覚を通して、なつかしさを感じ覚ましている。

感覚といえ、晴れたま昼の冬の匂いがした。「も」、「匂い」という表現を使って、「私」の内面を描き出している。「私」が、隣を歩く少年に思わず胸がドキドキしてしまう、その胸ときめく瞬間を、風がそよそよと吹いている「さわやかさ」によって捉えている。季節は違うが、「新緑のころに散歩につれていくと、匂やかな風に、毛をそよがせて目をほそめる。」と重なる。

次に、「大通りには、クリスマスソングが流れ、うす青い夕

暮れに、ネオンがぼつぼつつきはじめていた。」の記述を考える。ここで注目したいのは、「うす青い夕暮れ」である。一つの解釈として、ネオンがぼつぼつつき始めている大通りの人工的な空間によって夕暮れが青く見えているという解釈が考えられる。この解釈は、「プールの人工的な青」と同じような人工的な感じを夕暮れを見て「私」が感じているとする考え方による。

このように見ていくと、読者は、「自分の感覚」を頼りにしながら「私」の細微な感覚を読み解いていかなければならない。

三―三 話型く浦島型をめぐる

(1) 喧噪と静寂

この物語は、浦島型の話型だと考えられる。デュークの死という現実。少年との出会い、デートという幻想的な場面。そして、落語を見たところから戻り始めてきた現実。少年のキスによって終わった幻想。現実から幻想的な世界へ、そしてまた現実へ戻ってくる過程が見える。そして、その現実と幻想は、喧噪と静寂によっても描かれる。

まず、デュークが死に、アルバイトに出かけなければいけないというシーン。泣きながら駅へ向かい電車に乗るが、その電車はいつものように混んでいる。季節はクリスマスの二週間前で、きつと町全体が浮かれていることだろう。そんな喧騒の中にいる「私」は、ますますデュークがいなくなってしまうという思いを強くするのではないだろうか。雑踏の

中にいると、より自分がひとりぼつちに思えてしまうという心理と同じようなものだと思う。

そんな状況が少年との出会いによって一変する。少年は、「私」をプールまで連れていく。もう十二月にもなっているし、朝っぱらなので、プールには二人だけである。水の中の静寂、「反響する」という記述があるのでかなり広々としていて、さらに誰もいないことにより、静寂さがより顕著になっている。少年とのこの幻想的な時間が、「私」を雑踏から（つまり現実から）遠ざけているように思われてならない。プールの次には美術館に行くが、私にとって美術館も静かなイメージがある。目立たないこぢんまりとした美術館だそうなので、ルーブル美術館のように人がどやどやと入っていくことはないだろう。そこにも一種の静寂があると考えられる。

そして、落語のシーンになると、また喧噪（現実）が戻ってくる。落語のシーンになって「私」はデュークがいなくなってしまうことを思い出す。少年はその後、「私」にキスをして去ってしまうのだが、キスされた「私」は呆然と立ち尽くし、周りにはクリスマスソングが流れている。「私」は現実に戻ってきているのだが、まだ気持ちは幻想の世界に漂っていると考えてもよいのではないだろうか。現実と幻想のはざまでぼんやりとしているイメージを抱かせる。

「私」は現実と幻想を行き来することによって、変化していく。それがこの物語の主題でもある。

(2) 現実から非現実の世界へ

この物語の話型は、現実から非現実の世界へ、そしてまた現実へ戻ってくるという浦島型の話型である。

まず、はじめの現実の部分では、デュークの死による私の悲しみが描かれている。デュークの死は現実起きたことから、現実である。

次に、非現実の世界の部分では、少年が登場し、「私」とデートし、別れるまでが描かれている。死んだはずのデュークが人間となって現れる。このような、生きている者と死んでいる者の両方が存在することは、現実ではありえない。また、犬が人間の姿になることもあり得ない。だから、非現実の世界である。

最後に、現実に戻ってくるという場面である。ただし、この場面では、厳密に言うとは現実には戻ってきていない。「私はそこに立ちつくし」とあるように、「私」は呆然としたままであるし、「ゆっくりと夜がはじまっていた」とあるように時間もゆっくり進んでいる。だから、非現実の世界から現実に戻りかけている場面であると言えるだろう。

(3) 少し異なる浦島型

現実を避ける私が、神秘的な力を持つ少年に非現実の幻想的な世界に一気に引き入れられ、その後現実にゆっくり帰ってくる。帰ってきた際の私の現実が冒頭での私にとっての現実とは少し異なる。

浦島物語のような往還型の物語と似ているが、少し異なる点もある。確かに、少年との触れ合いが描かれる場面では、

幻想的な表現がなされ、少年が神秘的な力で私を泳げるようにすることや、はつきり断言はされないが、少年自体死んだ愛犬だったことなど非現実的なことが起こる。しかしあくまで私の目から見ればプールに入るのは現実世界での「酔狂」的な行為であり、また途中から「私はいったい何をしているのだろう」と冷静に現実を見ている。つまり出来事はあくまで現実世界で起こっていることであり、完全に幻想的な非現実の世界に入っているわけではない。この点で往還型であるとはつきり分類できなくさせている。

三―四 「デューク」の雰囲気

この物語を読んだ時、私は、ほんわかとした穏やかな雰囲気を感じた。その理由は、物語の内容と書き方にもあると私は考えている。

第一の理由は、この物語には、はつきりしていないあいまいなままの部分があるということだ。一つは、プールで私を引っ張っていたものは何なのかである。プールで何かに引っ張られるということは、常識では考えられない「不思議な体験」である。だから、読者は、なぜこんなことが起こったのかはわからない。私たちのグループでは、「少年が不思議な力を使って『私』に泳ぐことの気持ちよさをプレゼンした」と考えたが、これはあくまで私たちの考えであって本当はどうか、はつきりした答えは読者にはわからない。

もう一つの部分は、少年がデュークであったのかである。唯一、少年がデュークではないのかとはつきりと推測できる

ような記述は、「今までずっと、だよ。」という言葉と、そのあとのデュークに似たキスである。そのほかにもデュークが好きだった、たまご料理、アイスクリーム、初夏、落語は、物語の中に散りばめられているが、それぞれの登場シーンでは、「ひよつとしたら」という理由にはなるが、「少年がデューク」と言い切ることはできない。つまり、あくまでも「少年がデューク」というのはつきりとした記述は見当たらないのである。こうした、あいまいさが、ほんわかとした柔らかな雰囲気を生み、穏やかさを読者の心に残すのだろう。

第二の理由は、この物語には、平仮名で書かれている部分が多い。漢字を使ったら読みにくいという言葉だけが平仮名で書かれているのではなく、読みにくくない言葉も平仮名になっている。平仮名は漢字に比べて、読者にやさしい印象を与える。それが、この物語にほんわかとした雰囲気を与えていると考えられる。

このように、「デューク」がほんわかとした雰囲気を持っているのには、内容、書き方の両方に理由がある。私は、この両方が響き合うからこそ、「デューク」は、静かに読者の心に響く作品になったのだと考えている。

羅生門（芥川龍之介）

一 作者と作品について

芥川龍之介。本名新原龍之介（明治二十五年三月一日～昭和二年七月二十四日）。東京市京橋区入船町に新原敬三の長男として生まれる。柳川隆之介、澄江堂主人、寿陵余子とも号す。また、我鬼という俳号も持つ。辰年辰月辰日の辰の刻に生まれたことにちなんで、龍之介と命名された。生後九ヶ月頃から、母のふくが発狂したため、実家の芥川家に養われ、後に養子となつて幼少期を過ごす。

芥川は早くから読書に親しみ、中学生のときには外国文学にも手を付けていた。学業は優秀で高校には無試験で入学し、大正二年には東大英文科に入学するほどであった。大学に在学中、級友らと第三次・第四次『新思潮』を刊行し作品を発表するなど、創作活動を行っていた。「羅生門」はこの大学時代に発表されたものであるが、当時は注目されなかった。しかし、第四次『新思潮』の創刊号に発表した「鼻」は漱石から高い評価を受ける。大学を卒業してからも、芥川は創作活動を続け、「蜜柑」や「トロツコ」、「杜子春」、「蜘蛛の糸」と

角張 綾葉、金森 明日香、須原 旬生

高室 慶助、安友 郡詞

いった作品を次々と生み出していく。

晩年は、自らの成長を主題とする作品を書いていくが、そのことが自身の美学の否定へと向かい始める。そして、「何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安」が膨らみ、昭和二年七月二十四日未明、致死量の睡眠薬を飲んで自殺するという最期を迎えた。

「羅生門」は、大正四年（一九一五年）十一月一日発行の『帝國文学』に、柳川隆之介のペンネームで発表された作品である。発表当時はあまり注目されなかったが、『鼻』や『芋粥』といった作品によって芥川の作家としての力量が認められるようになってくると、「羅生門」は再評価されるようになり、単行本として刊行され、芥川の準処女作として扱われるようになった。

本文は初出と初刊との間にも異同が見られるが、特に『鼻』に収録されたときの改訂は大幅なものであった。例えば、老婆の独白部分が間接話法から直接話法に改められたり、末尾の一文が「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝあった」（初出）、「――急いでいた」（初刊）から、

「下人の行方は、誰も知らない」と変更されたりしている。また、作品中に、「旧記」と出てくるが、これは『今昔物語』や『方丈記』の記述を基にしていることを示しており、「羅生門」はこれらの作品を取材源としている。

二 叙述について

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

時間が、暮れ方Ⅱ夕方であることがわかる。主人公は一人の下人であることが予想される。文末の時制に注意してみると、これより後も本文中では、下人の動作の文末は過去形で、書かれていくことになる。

広い門の下には、この男のほかにはだれもない。

羅生門が「広い門」であると書かれている。羅生門の下には下人一人しかいない。最初の一文で「一人の下人」と書かれていた人物が「この男」と書かれる。この文では視点が遠く客観的に表現されており、いわゆる俯瞰的な視点である。

ただ、所々丹塗のはげた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹とまっている。

きりぎりすを登場させることで、きりぎりすのような「小さな虫」しかいないことを示し、ここには本当に下人以外に誰もいないことを強調している。

羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉鳥帽子が、もう二、三人はありそうなのである。

言い換えると、「朱雀大路のような中央道路にあるので、この羅生門のあたりには本来もつと他に人がいてもおかしくないのに」ということであり、このように書くことで一層人気のなさを強調する。そして、下人は再び「この男」と書かれている。

それが、この男のほかにはだれもない。

「この男のほかにはだれもない」という言葉が繰り返して登場している。それだけ作者は、羅生門のそばに人気がないことと、下人一人しかいないことを強調したい。

旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。

「旧記によると」と書くことで、この物語に事実味を持たせている。ここでの旧記とは『方丈記』のことを指す。

落中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと

云う習慣さえ出来た。そこで日の目が見えなくなると、誰でも氣味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしないうことになってしまったのである。

「足踏みをしないうことになってしまったのである」という表現について、まわりくどく感じる。「足を踏み入れなくなつた」と書いた方が自然であるように思うが、こう書くよりも本文の表現は、当時の「習慣」となつていった様子が伝わる効果があると考えられる。また、狐狸や盗人、死人がいて誰も寄りつかなくなつたから、この羅生門にいるのは下人だけである。

そのかわりまたからすがどこからか、たくさん集つてきた。昼間見ると、そのからすが何羽となく輪を描いて、高い鴟尾の周りを鳴きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けで赤くなるときには、それがごまをまいたようにはつきり見えた。からすは、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついばみに来るのである。——もつとも今日は、刻限が遅いせいかな、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、からすの糞が、点々と白くこびりついているのが見える。

人が近寄らなくなつた代わりに「からす」が集まつてくるようになったことをいう。きりぎりすに続きからすが登場する。しかし、これは普段のことではあつても、今日は見えない。昼間見えるからすの黒い点々に対して、今日見えているのは白い点々のからすの糞である。

下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬に出来た、大きなにきびを気にしながら、ぼんやり雨のふるのを眺めていた。

視点がまた下人に戻ってくる。そしてピンポイントで下人の「にきび」に注目している。下人ににきびがあることは、この下人が「普通の青年」であることを読者に感じさせる。この下人が、読んでいる読者とそんなに変わらない存在であることを意識づける。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町はひととおりならず衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」というよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」という方が、適当である。

ここで「作者」が顔を出している。そして下人がどうして「雨やみを待っていた」のかを説明する。そして、この下人が仕事を失い帰る場所がなく途方に暮れている状況にあることを明らかにする。一旦、話の調子を変えることで、設定条件を整理し、より詳しく伝えている。

その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の *Sentimentalisme* に影響した。申の刻下がりからふり出した雨は、いまだに上る気色がない。そこで、下人は、何をおいても差当り明日の暮しをどうにかしようとして——いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、開くともなく聞いていたのである。

先の部分から、ここまでの記述が、下人の心情説明となっている。*Sentimentalisme* はフランス語であるが、作者芥川がフランスに興味を持っていたことからこの言葉が用いられたと考えられる。

雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあという音を集めてくる。夕闇はしだいに空を低くして、見上げると、門の屋根根が、斜につき出した甍の先に、重たくうす暗い雲を支えている。

主語が雨や夕闇になる。いずれも自然の描写であるが、「羅生門に迫ってくる」描写となっている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいるいとまはない。選んでいれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまえばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊した

あげくに、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来るべき「盗人になるよりほかに仕方がない」ということを、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人の迷いが書かれている。今はまだ、生きるために「盗人になる勇気」が出せない状態である。にきびができるような若い年齢の下人には、「悪」になることへの踏ん切りがつけられないでいる。

下人は、大きくくさめをして、それから、大儀そうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。

くさめとはくしゃみのことである。下人は、大きくくしゃみをして面倒くさそうに立ち上がった。ここで下人が初めて動き出す。同時にここから話が展開していきそうだという予感がする。寒くなってきたという変化が書かれ、「夕闇」からはどんどん暗くなってきたことがわかる。話の始めにはいた、唯一の、きりぎりすもいなくなってしまう。これらの変化から、時間が経過したことがわかるようになっていく。また、唯一いたきりぎりすがいなくなり、本当にここが下人以外誰もいない状況となる。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広いはしごの中段に、一人の男が、猫のように身を縮めて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。楼の上から差す火の光が、かすかに、その男の右のほおをぬらしている。短いひげの中に、赤くうみを持ったにきびのあるほおである。

「下人」が「一人の男」と書かれている。ここから羅生門の楼へ上がっていくシーンに場面が変わるので、新たな書き出しを意識づけるために俯瞰的な書き方をしている。はしごの一段目に足をかけてから中段までに数分もの時間を費やした理由が次の文章に書かれる。ここでは下人ははしごの中段あたりで小さくなつてこつそり様子をうかがっている。また、火の光が下人の右のほおを「照らしている」でなく「ぬらしている」と書かれているのは、その火の光の反射が揺れているためにそれが波や水が動く様子に見えることからその表現を用いたと考えられる。下人には短いひげがあり、またほおのにきびがあることが再び書かれている。

下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだとたかをくくっていた。それが、はしごを二、三段上つてみると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かししているらしい。これは、その濁った、黄色い光が、隅々にくもの巢をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人の警戒心が現れている。先の部分にある、下人がはしごの中段から息を殺しながら様子をうかがっている理由は、このようなことが先にあったからである。

そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土をこねて造つた人形のようになり、口を開いたり手を伸ばしたりして、ごろごろ床の上のころがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久におしのごとく黙っていた。

死人であるから当然話することが出来ないものであるが、「人形のように」とか「永久におしのごとく黙っていた」という表現によつて今にも動きだしそうな雰囲気を出して不気味さを醸し出している。



下人は、それらの死骸の腐乱した臭氣に思わず、鼻を覆った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を覆うことを忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。

下人の目は、そのとき、初めてその死骸の中にうずくまっている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木切れを持って、その死骸の一つの顔をのぞき込むように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女

の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れていた。

下人の「思わず鼻を覆う」様子から、死骸の腐乱臭がきついものだったことがわかる。しかしその強烈な刺激臭を忘れるほどの強い感情に心奪われる。その感情とは、六分の恐怖と四分の好奇心である。そしてそれは、死体ばかりだとたかをくくっていた下人が、老婆を見つけたことによって引き起こされた感情である。

旧記の記者の話を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。

ここでの旧記とは、『今昔物語』である。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行った。そうして、それと同時に、この老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。

前述に「この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。」とあったように、得体の知れない存在である老婆に恐怖を抱いていた下人だったが、人間である弱々しい姿をした老婆の行為を見ているうちに、正体がわかってきたために心が落ち着いてきた。そして憎悪が動いてくる。「湧いてくる」ではなく「動いてくる」としたことによって、少しずつふつふつと胸にこみ上げるのではなく、心が動くというように一気に・急に憎悪の心情へと変

化するという感じがでる。

いや、この老婆に対するといっては、語弊があるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである。このとき、だれかがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、飢え死にするか盗人になるかという問題を、改めて持出したら、おそらく下人は、なんの未練もなく、飢え死にを選んだことであろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのように、勢いよく燃え上がり出していたのである。

「あらゆる悪に対する反感」「悪を憎む心」の激しさを、松の木切れの炎に喩えているが、松の木切れがそれほど激しく燃えているとは思えない。もしくは、下人の「悪を憎む心」はそれほど弱いものだったのだろうか。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、はしごから上へ飛び上がった。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩み寄った。老婆が驚いたのは言うまでもない。

「両足に力を入れて」「いきなり」「飛びあがった」ことから、さきほど感じた憎悪の気持が行動に表れている。また「太刀に手をかけながら」や「大股に…」という表現からも下人が強気であることがわかる。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも弾かれたように、

飛び上がった。

弩とはばねじかけで射るという大きな弓であり、それに弾かれるということは激しく飛び上がったと想像することができるので、驚いたことの程度が大きいことを言う。

「何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆を突き放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色をその目の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、目を、眼球がまぶたの外へ出そうになるほど、見開いて、おしのように執拗く黙っている。

「両手をわなわなふるわせる」ことから老婆の恐怖心が表れている。「肩で息を切る」ことは、呼吸が乱れているので、驚きや動揺や恐怖心が表れている。「眼球がまぶたの外へ出そうになるほど、見開く」とあるので、大きく目を見開く動作である。

これを見ると、下人は初めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということを意識した。そうしてこの意識は、今まで陰しく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下ろしながら、少し声を和らげて、こう言った。

下人は老婆の命を支配しているということを意識して、こ

の「優越感」によって憎悪が冷め、得意と満足感を感じる。

すると、老婆は、見開いていた目を、いつそう大きくして、じつとその下人の顔を見守った。まぶたの赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い目で見ただのである。それから、しわで、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でもかんでいるように動かした。細いのだで、とがったのどぼとけの動いているのが見える。その時、そののどから、からすの鳴くような声が、あえぎあえぎ、下人の耳へ伝わって来た。

ここで老婆はまるでからすのような書かれ方をする。「肉食鳥のような、鋭い目で見ただ」とは、肉食鳥が獲物を見る目つきをもイメージさせる。これは、老婆の狡猾さを感じさせる。老婆は、下人が役人ではなくただの旅の者であることを知り、半信半疑であるけれど、縄にかけられなくてすむかもしれないという可能性を知り、うまく言うくめようとこの時点で企んでいると考えることができる。



下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。

老婆の行動の理由は、実はありきたりなものであった。ここの「失望した」は「がっかりした」とするよりも、「あきれかえった」というくらいの意味で考える方が適切だろう。

老婆は、大体こんな意味のことを言った。

先の部分で、老婆は墓のつぶやくような声で話していると

あるので、下人は全てを聞き取れていないのではないだろうか。ゆえに、このような表現がされていると考えられる。

しかし、これを聞いている内に、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。

「ある勇気」とは、「盗人になる勇気」である。

「きっと、そうか。」

老婆の話が終わると、下人はあざけるような声で念を押した。

下人の中で、盗人になる決心がつき、その決意を再確認する意味でこのように言っている。

不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくようにこう言った。

膿のある白いにきびは「善」の象徴である。今まで気にしていたにきびから手を離すということは、「善」から「悪」に向かうことを示している。実際に、下人はこのあと老婆に対して追いはぎをする。

老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、はしごの口まで、這って行った。

このときの老婆には、下人を言いくるめようとして逆にやられてしまったことへの悔しさや、先程下人に蹴倒されたときの痛みなどが残っていると思われる。

三 考察

「羅生門」が改訂されていく中で、最後の一文が書き直されたことの効果について考えてみたい。

まず、一つ目の効果として、最初に強調して書かれている「この男のほかにほだれもない」という言葉と呼応していることがあげられる。

広い羅生門にはきりぎりすしかおらず、その小さなきりぎりすでさえ、途中でいなくなってしまう。このことから、冒頭部では、下人の姿を見たものは誰もいないことがわかる。そして、羅生門の中という閉じられた空間の中で、ただ一人の老婆と出会う。老婆とのやり取りの中で、下人は生き抜くために追いはぎをすることに迷いがなくなり、老婆の服を剥ぎ取りどこかへ行ってしまう。この最後に会った老婆でさえも、羅生門から下人の姿をのぞこうとしたが、下人の姿を確認できなかった。このことは、「外にはただ、黒洞々たる夜があるばかりである」という表現からもわかる。

最初から、下人は誰にも見られることなく、最後まで、追いはぎをされた老婆でさえも下人の姿を確認できなかった。最後の一文を「下人の行方はだれも知らない」と書き直すことによって、最初と最後で「誰も下人の存在・安否を確認することができない」という呼応が生まれ、そのことが強調されていると考えられる。

次に、羅生門を取り巻く環境と絡めて考察していきたい。

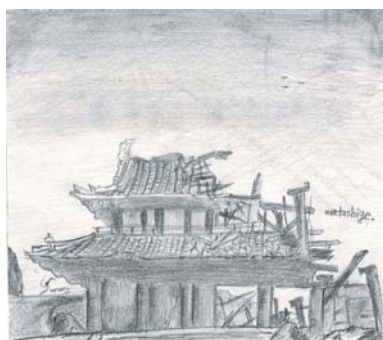
当時の様子は、第二段落にあるように、並一通りのさびれ方をしていない。二、三年は天災が続き、仏像や仏具が打ち碎かれるという不道德な行いがなされ、狐狸や盗人が横行し、さらには死人までもが投げ捨てられるという状況である。このような時代を生きていく為には、手段を選んでいる暇はないという考えが、下人や老婆だけでなく、町中にありふれていたと考えることができる。また、この出来事が起こった日は雨が降っていて羅生門の周りは薄暗い。

街の中やこのときの天気の様子を色に喩えると「黒」とすることができよう。その「黒」から連想される「悪」|| 追いはぎをする道へ進むか、「善」|| このまま飢え死にする道へ進むかの選択を迫られる下人は、黒と白を混ぜた「灰色」の状態と考えることができる。そして、そのような「黒」と「白」の中間色である「灰色」の状態の下人がいる羅生門は、「善」と「悪」の境の空間である。

「灰色」の状態で、下人は境の空間である羅生門へと入っていく。そして、下人が死体から髪の毛を抜いている老婆を見つけ、あらゆる悪に対する反感が増してきた。ここで下人の心情は、「灰色」から「白」|| 完全に悪を憎む心 || 「善」へと変化する。それは、下人の太刀の「白い鋼の色」という表現からも、下人のそのときの心境が描写されているのではないだろうか。

しかし、老婆の話聞き、「善」の感情は常識の外に追い出され、追いはぎをすること、つまり「黒」|| 「悪」へと染まってしまった。完全に「黒」になった下人が「黒洞々たる夜」

へ駆けても、「黒」が「黒」の中へ飛び込むだけのことになってしまうので、当然下人の姿を確認することができなくなる。そうして、「下人の行方は、だれも知らない。」につながる。これらのことから、書き直したことによって、下人の姿が誰にも知られないということ強められていると考えられる。



山月記（中島敦）

一 作者と作品について

作者の中島敦は、一九〇五年五月五日、東京生まれ。小説家としての活動期間は、一九四二年の一年間で、作品には、「光と風と夢」、「李陵」、「古譚」などがある。

祖父中島撫山が商家から漢学者となり、埼玉県久喜町（現久喜市）に漢学塾を開き、伯父である中島端蔵が祖父の漢学塾を受け継いでいた。父、中島田人は旧制中学の漢文の教員であった。漢文調の格調高い文体とユーモラスに語る独特の文体を巧みに使い分ける中島の漢文学の教養は、父親たちから受け継いだ。また、中島は、最も芥川龍之介に近かった作家ではないかという者もいる。中村光夫（一九四四）は、「二人の異常な博識、虚弱な肉体、臆病な自尊心等、知識人の長所と弱点とともに極端な形で併せ持った点で似てゐるのみではない。芥川の小説の発想法は、少なくともその初期の短篇においては、中島のそれと全く同じである。」と言っている。また、深田久弥と深い交友を持ち、デビュー作の「山月記」と「文字禍」（「古譚」）、続けて発表された「光と風と夢」などは、彼の推薦による。一九四二年、気管支喘息のため早逝。「李陵」他いくつかの作品は没後に発表された。

佐藤 茉奈美



山月記は、一九四二年、『文学界』に「古譚」の名で「文字禍」と共に発表された。唐の時代に書かれた「人虎伝」に収められている話をもとにしている。原作と比較すると、李徴の虎への変身の理由が大きく変えられているのが特徴である。時代は唐、主人公は隴西の李徴である。郷里の秀才だった李徴は、片意地で自負心が強く、役人の身分に満足しきれなかった。彼は官職を辞し詩人として名を成そうとするも、うまく行かず、ついに挫折した。小役人となって屈辱的な生活を強いられたが、その後、地方へ出張した際に発狂し、そのまま山へ消え、行方知れずとなった。その翌年、彼の数少ない旧友で高位の役人であった袁孝は、旅に立ったその途中で虎となった李徴と再会するところから話が始まる。

☆ 引用文献

中村光夫（一九九四）「批評」（『中島敦『山月記』作品論集』、二〇〇一年、二二頁）

二 叙述について

このころからその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光の

みいたずらに炯々として、かつて進士に登第したころの豊頬の美少年のおもかげは、どこに求めようもない。

主人公の李徴は、秀才であったが、他人と協調しない性格で自分の才能に対して自負心が強い性格であった。科擧に受かつても、低い地位に満足することはなく、自分の夢を追いかけてすぐに辞めてしまった。しかし、詩家としては成功せず、だんだん生活は苦しくなり、それにより容姿は厳しく陰しくなった。ここから、李徴が追い詰められ、苦しそうな表情が浮かぶ。眼光だけは無駄に鋭く光っているのは、李徴が、この後発狂する予兆ではないだろうか。

一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿った時、ついに発狂した。

詩家としての成功を夢見た李徴だったが、生活のために再び地方官吏の職に就くこととなる。詩家として成功することに半ば絶望していた李徴は、かつて歯牙にもかけなかった同僚の下で働くことに自尊心を傷つけられる。優れた才能を持つがゆえに、不満を抱くようになり、今まで耐えてきたものが一気に爆発し、発狂にまで到った。

叢の中から人間の声で「あぶないところだった。」と繰り返しつつやぐのが聞こえた。

観察御史の袁修は、人喰い虎が出ると言われている道で、突然虎に襲われる。しかし、虎は一旦飛び出したものの、彼に飛び掛ることなく、叢に隠れる。この後の文章から分かる

が、この虎の正体は発狂して行方不明になっていた李徴である。袁修と李徴は、官吏時代の同級生であり、友人の少ない李徴の最も親しい友であった。そのことから、叢から躍り出たときの李徴は、人喰い虎としての本能で、人間を見つけて襲い掛かったと思われるが、すぐに親友であると気付き、あわてて隠れたと考えられる。何度も繰り返しつづやいたところから、それだけ袁修が大切な友であったと読み取れる。人喰い虎として、人間の心を失いかけていた李徴が、とっさに飛び掛るのをやめ、何度も袁修を喰わなくてよかったと自分に言い聞かせているところからも、虎になった今でも大切な存在であると読み取ることができる。

叢の中からは、しばらく返辞がなかった。しのび泣きかと思われるかすかな声が時々洩れるばかりである。

ここで李徴がすぐに返事をしなかったのは、思わず泣いてしまうほど袁修との再会を懐かしむ一方で、いまや人間でない獣の姿をしている自分を、友に見られたくない、見られて恐れられたり嫌がられたりすることに恐怖を抱いているからだと読み取れる。最も親しい友であったからこそ、自分の醜い姿を晒すことができないのだろう。

袁修は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した。

袁修にとっても李徴が特別な友であったことは、声を聞いただけで李徴だと気付いたところや、返事を聞いてすぐに恐

怖を忘れて挨拶をしているところからも読み取れる。

後から考えれば不思議だったが、その時、袁修は、この超自然的怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった。彼は部下に命じて行列の進行をとどめ、自分は叢の傍らに立って、見えざる声と対談した。

普通だったら、怪しんでその場を立ち去るが、素直に李徴と話をしたいという願いを受け入れられたのは、やはり親しい友であったからだと考えられる。姿を見られることを嫌がる李徴と声だけで向かい合うことに、なんら疑いを持たなかった理由も同じであると読み取れる。

理由も分からずに押しつけられたものをおとなしく受け取って、理由も分からずに生きていくのが、我々生きもののさだめだ。

李徴は、袁修としばらく対談した後、自分が虎になった一部始終を話した。虎に変身したのは、無意識のうちであった。初めは目を信じず、夢に違いないと思っていたが、そうではないと悟り茫然として、虎になってしまったことを恐れている。また、なぜこんな姿になったのかという理由はこの時点では、はっきり分かっていない。「生きもののさだめ」であるというところから、自分はもとも虎になるように決められており、自分自身の考えや行いが原因ではないと、ここでは考えている。

自分はすぐに死を想うた。

虎になってしまつては、社会生活はできない。そうすると、食に困り生命を維持できないと思い、死ぬしかないと考えている。ここから、李徴のアイデンティティーは、まだ人間として存在している。

今までは、どうして虎になったかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気がついてみたら、おれはどうして以前、人間だったのかと考えていた。

眼の前を一匹の兔が駆け過ぎるのを見たときに、自分の中の人間はたちまち姿を消し、兔を食い殺してしまった。こんな虎の己を人間の心で顧みたとき、最初は、情けなさや恐ろしさを感じ、どうして虎にと、人間の視点で物事を考えていた。しかし、己はどうして人間だったのかと、虎の視点で考えるようになってきている。これは、一人称が「自分」から「おれ」に変化したことから李徴の変化が読み取れる。

これは恐ろしいことだ。今少したてば、おれの中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋もれて消えてしまうだろう。

虎に近づきつつあることを恐ろしいと思いつつも、今少し経てば、人間の心は消えてしまうと予測するようになる。ここでは、土砂Ⅱ虎の本能、宮殿の礎Ⅱ人間の心と直喩の表現を用いて、李徴の変化を分かりやすく説明している。

おれの中の人間の心がすっかり消えてしまえば、恐らく、そのほうが、おれはしあわせになれるだろう。

この時点で、主語が「おれ」になって虎の立場から話していることから、すでに李徴のアイデンティティーは、虎として存在している。

だのに、おれの中の人間は、そのことを、このうえなく恐ろしく感じているのだ。

しかし、まだ人間であった記憶があることで、恐ろしく、哀しく、切ない感情を持ち続けなくてはならない。虎として生きるなら、人間の記憶がない方が、そのような感情を抱かなくてすむから、しあわせであると言える。しかし、まだ人間の部分が残っているからこそ記憶がなくなることを恐れるという、矛盾をかかえて生きてきた李徴の苦しさを読み取れる。

とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりと後代に伝えないでは、死んでも、死にきれないのだ。

ここまで自分の思いを吐露してきた李徴が、哀慘に頼んだことは、詩のことであつた。李徴は、元来詩人として名を成すつもりでいた。もともと詩が世間に発表されておらず、遺稿の所在もはや分からなくなっていると思ひ、ここで、何としてでも自作の詩を伝えたいという李徴の詩に対する執着心が見える。その思いがにじみ出ている叙述である。また、

ここで、かつての詩集を「遺稿」と呼んでいるところから、すでに人間としての李徴は死んだものとして捉えていて、もう人間に戻ることはないと考えていることも読み取れる。遺稿と財産を失ってもなおも執着することから、詩が、李徴にとつてどれほど特別であつたかが分かる。

旧詩を吐き終わった李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るがごとくに言った。

ここまで詩について伝える李徴の一人称は、「自分」であつたのに対し、吐き終わったとたん「おれ」と変化した。ここからは、虎の李徴の語になる。虎になつても李徴の昔の自嘲癖が窺える。自分が思い焦がれていた詩人にはなれず、夢にも思わなかった虎になつてしまったことが滑稽だったのだろう。

お笑い草ついでに、今の懷いを即席の詩に述べてみようか。

この虎の中に、まだ、かつての李徴が生きているしとして詩を述べると言い出した李徴。「即席」ということから、今の李徴の思いが表現されているだろう。

偶狂疾に因りて殊種と成る

予期せず、精神の病で狂気に陥ったことで、異類の獣となつた。

災患相仍り逃げるべからず

災難が何度も重なり、逃がれることはできなかった。

今日爪牙誰か敢へて敵せん
当時声跡共に相高し

この二句は、惨めな今と、
輝かしい過去を、「今日」と
「当時」、「爪牙」と「声跡」、
「誰か敢えて敵せん」と「共に
相高し」と、それぞれ対
照させている。爪と牙とを
持った今の自分に一体誰が
敵となるだろうか。いや、
誰もなれない。当時は私と
君（李徴と袁修）は、共に
評判は高かった。

我は異物と為る蓬茅の下

私は、雑草に囲まれて、
異物の獣の身になった。

君は已に輶に乗りて氣勢豪なり

君（袁修）は今や、官吏の乗用車に乗るような貴人の身分
であり、勢いも勇ましいほどある。

此の夕べ溪山明月に對し



長嘯を成さず但だ嘯を成すのみ

好んだ詩を吟じることはできず、この夜も山や月に向かい、
ただほえ叫ぶことしかできない。

詩人としてではなく、虎として生きることの心の苦しみを
訴えた詩であると読み取ることができる。また、惨めな自分
と輝かしい未来に生きる袁修とも対比させている。最後の二
句では、詩を詠み、吟ずることでも自らの胸のうちを表現し、
満たされない思いを昇華することができたが、虎と化しては、
伝える相手も居らず、吟じようと思ってもほえ叫ぶことしか
できない、李徴の苦しみが表現されている。

人々はもはや、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄
倖を嘆じた。

詩のあまりの出来栄えに人々は言葉が出なかった。それは、
虎が詩を詠んでいるという奇妙な状況であることを忘れさせ
るほどだった。詩人の恵まれなさを嘆くことができるという
ことは、心情がよく伝わる詩であったことだ。

ともに、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。

ここまでは、なぜ自分が虎になる運命だったのか分からな
いと言っていた李徴だったが、今までの人生を振り返ると、
自分に原因があったのではと思ひあたることがあった。それ
が、この二つの内面である。この二つの性質により、自分に
詩の才能がないのを自覚することを恐れて、才能を磨こうと
しなかった。磨こうと努力すると自身の才能不足が露見して

しまうからである。それならば、あきらめて官吏として働けばよいにもかかわらず、自分の才能を自負するところもあった。それで、平凡に生きることもできなかったのである。

人間はだれでも猛獣使いであり、その猛獣にあたるのが、各人の性情だという。

性情は、人間の性質、生まれ持った性質、心情のことである。これが猛獣であるといっている。猛獣は、肉食で荒々しい性格の獣である。つまり、性情とは、扱うのが難しく、うまくコントロールできないと暴走してしまうものであるということだ。人間は、これをいつもうまく操っているのである。ここでは、猛獣使いと表現されている。「おれの場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。」李徴の場合は、この尊大な羞恥心を抑えることができなくなつて暴走し、外面に現れてきたようだ。

それを見ると、おれは今も胸を灼かれるような悔いを感じる。

「それ」とは、口先では真理を鋭くつきながら、実際は、才能の不足を暴露することへの恐れと、努力を怠ったことが自分のすべてであつたということを指している。人生を何もせずに空費したことに後悔をにじませていることが分かる。しかも、以前も今もその李徴の傷ついた胸のうちは誰にも理解されないのである。

酔わねばならぬ時が、(虎にかえらねばならぬ時が)近づいた

から、と李徴の声が言った。

「ようやくあたりの暗さが薄らいできた。」とあり、物語が終末に向かつていることが分かる。「酔う」という言葉には、そのことに心を奪われてうつとりする、また、自制心を失うという意味がある。また、尊大な羞恥心を支配できなくなり、それが虎となつて現れるという意味だ。

李徴の声はしかし、たちまち、また先刻の自嘲的な調子に戻つて、言つた。

自嘲的な様子が戻ってきたことや、「おれ」と呼んでいることから、ここでは虎に変身していると思われる。「たちまち」から、虎に変わるのには、一瞬のことだったようだ。

虎は、既に白く光を失つた月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、また、もとの叢に踊り入つて、再びその姿を見なかった。

最後まで、李徴は、人と相容れることはなかった。「光の失つた月に向かつてほえる」ところがその空しさを強調している。最後の「再びその姿を見なかった」という叙述があることで、李徴の寂しさや切なさを読者の心により余韻として残る結びになっている。

三 考察

(1) タイトルから見る原作との違い

「山月記」を書くにあたり、もとにしたのが、「人虎伝」である。なぜ、タイトルを変えて「山月記」にしたのか、それを考察した。まず、「山月記」の「山月」だが、舞台を、夜の山の中に設定したからだろう。さらに、大きな違いとなっているのが、「記」と「伝」の違いである。もともと、「伝」には、怪奇譚的な物語の意味と生涯の記録という意味があり、「人虎伝」は、人が虎になった話で、虎になった人間の記録が描かれているものである。それに対し「記」には、事の顛末という意味があり、実際「山月記」には、一人の人間の挫折の顛末しか書き記されておらず、人生の記録とは言えない。その点が、タイトルから分かる原作との違いである。

◇ 参考文献

『中島敦『山月記』作品論集』、二〇〇一年、二二二頁～二二六頁

濱川勝彦他、「シンポジウム『山月記』をめぐる」、『国文学解釈と鑑賞』、一九九一年

(2) 李徴について

彼は、才能が非凡でありながらも、自分の性質が妨げになり、詩家になるという目的を達成することができなかった。これは本人の分析では、「尊大な羞恥心」のせいだと述べられている。また、これは、彼が虎となつてしまった原因でもある。この「尊大な羞恥心」とは、何か。「尊大」は「おごり高

ぶつた、いばつて、他人を見下げるような態度」のことであり、「羞恥心」は「恥ずかしく思う気持ち」のことだ。つまり、言い換えると劣等感のようなものである。また、これは、「臆病な自尊心」も同じような性質を持っていると考えられる。「自尊心」は、「自分の人格を大切にすることを、自分に自信を持つ気持ち」のことで、それが臆病だということは、すなわち自分に自信が持てないということである。これも劣等感のようなものだ。李徴は、本当は自分には才能も無く、無価値な人間であると思っていたのだろう。だから、才能を磨く意欲も持てず、励まなかったのではないか。しかし、それを他人に知られるのが恐ろしく、傲慢な態度を取り、他人と深い関係を持たなかった。これらの李徴の行動は、自分のなかにある、羞恥心を隠すための手段であり、自分を守り、本当の自分を隠してもいたのだろう。しかし、詩人として名をはせることもできないまま、諦めざるを得なかったり、官吏の職に留まり続けることへの嫌悪感などの現実を突きつけられることで、羞恥心を抑えることができなくなり、ついに虎として外面に現れてきたのだろう。



檸檬（梶井基次郎）

一 作者と作品について

作者の梶井基次郎（明治三四年二月一七日～昭和七年三月二四日）は、大阪市西区土佐堀通五丁目に生まれた。子ども時代は父の転勤と共に、東京、三重、京都などで暮らす。三年間の短い生涯で二〇回以上も転居している。母は古典や和歌を子どもたちに読み聞かせた。一二歳の時に祖母を、一四歳の時に弟を、結核で亡くす。一八歳の頃、文学や音楽に熱中し、あまり授業に出なくなる。特に夏目漱石については「漱石全集」を買い揃え、手紙に自分の名を梶井漱石と記すほどハマっていた。一九歳で肺結核を発病し、最初の転地療養。二〇歳、父が定年後にビリヤード場を始め、梶井基次郎も熱中した。この頃から本人曰く退廃的生活を送るようになる。泥酔してラーメン屋の屋台を引っくり返したり、喧嘩してビール瓶で殴られたり、家賃が滞った下宿から逃亡したり、料亭の池に飛び込んで鯉を追ったりしていた。

大正一三年、東京帝大文学部英文科に入学し、翌年、中谷孝雄、外村繁らと同人雑誌『青空』を創刊。「檸檬」（大正一四年）、「城のある町にて」（大正一四年）など、深い自己凝視と、高い詩的完成度を持った作品を発表する。大正一五年よ

小倉 歩、 靱山 小奈津、 森川 みど梨、 山本 舞



り、病氣療養のため伊豆湯ヶ島温泉に滞在。川端康成をはじめ、多くの文学者の友人に恵まれ、「冬の蠅」（昭和三年）など、この地での体験はその後の多くの小説に活かされることになる。昭和三年に上京するも病状が悪化し、同年に大阪の両親のもとへ帰郷。昭和六年、小説集『檸檬』を刊行。翌年の一月には商業誌に「のんきな患者」を発表し、本格的な文壇デビューを飾る。しかし同年三月二十四日、肺結核のため、午前二時に大阪・住吉の小さな長屋で、母ヒサの呼びかけに大きく最期の息を吐き安らかに逝った。同人誌という「文壇」とは離れたところで多くの作品が発表され、ほとんど無名のままの作家人生であった。遺言により棺には、お茶の葉が詰められ、周囲を草花で飾られたという。享年三一歳。代表作は「檸檬」、「城のある町にて」、「桜の樹の下には」、「冬の蠅」、「交尾」など。

「檸檬」は一九二五年（大正一四年）、中谷孝雄、外村繁らとの同人誌『青空』の創刊号の巻頭に掲載された。その後、梶井の友人である三好達治らの奔走により、亡くなる一年ほど前（一九三一年）に武蔵野書院より作品集として刊行された。梶井基次郎の作品は心境小説に近い私小説的なものが多く、自らの病気を題材にしている事も多い。「檸檬」も、梶井

基次郎が病氣になった直後に執筆されたこともあり、自らの病氣を題材にした作品である。

二 叙述について

えたいの知れない不吉な塊がわたしの心をしじゅう抑え付けていた。

このえたいの知れない不吉な塊は、「わたし」にとって正体のわからないものである。わたしは、この正体のわからないものに、たえず抑圧されている。

以前わたしを喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなかった。

前までは、美しい音楽や詩の一節で喜んでいたわたしだったが、今はそれらを聞くと我慢ならなくなり、美しいと思えなくなってしまうた。

何かがわたしを居たたまらずさせるのだ。

ここでの、「何か」とは、不吉な塊だと考えられる。不吉な塊は、わたしをたえず抑え付けている。氣を紛らわすために音楽や詩を聞きに行っても、これによってその場から逃げだしたくなる衝動に駆られる。

それでしじゅうわたしは街から街を浮浪し続けていた。

どこにいても落ち着かなくなり、わたしはあてもなく街を

歩き続けている。

なぜだかそのころわたしはみすばらしくて美しいものに強く引き付けられたのを覚えている。

「みすばらしくて美しいもの」とあり、みすばらしいは、「身なりがわるい。外見が貧弱である。」という意味である。美しいは、「愛らしい。かわいい。」という意味である。ここでは、対極にあるような言葉をつかって表わされており、どこか貧弱に見えるが、美しさをそなえているものであると解釈できる。わたしはそれに自分自身でもわからないが、不吉な塊に抑えつけられていても、強く引き付けられてしまうのである。

わたしは、できることなら京都から逃げ出してだれ一人知らないような市へ行つてしまいたかった。

「できることなら・・・行つてしまいたかった。」から、実現できそうにないわたしの願望であることがわかる。出て行くのではなく、「逃げ出して」と書かれており、何かから逃れるために出ていきたいのではないか。

第一に安静。

体調の悪いわたしにとって、京都はゆっくり休める場所ではない。まずは、安静にして病氣を治したいのである。

——錯覚がようやく成功し始めるとわたしはそれからそれへ

想像の絵の具を塗り付けてゆく。

前に述べたように、わたしは実際に京都から逃げ出すことができない。「想像」ではなく、「錯覚」とあり、錯覚の意味は「事実とは違うのに、本当にそうであると思ひ込むこと。思い違い。勘違い。」である。つまり、わたしはこれが自分の現実とは違う思い違いであると認識している。「錯覚がようやく成功し始めると」とあり、成功することもあるが、失敗することもある。また、この錯覚に陥るのに時間も要することがわかり、自分の中に葛藤があるとも考えられる。「想像の絵の具」とは比喻であり、成功した錯覚に、より現実味を持たせるために、さまざまな想像を加えていくのだろう。

なんのことはない、わたしの錯覚と壊れかかった街との二重写しである。

「なんのことはない」は、慣用句で「たいしたことではない。」ということである。錯覚に陥ることは、私にとって何の問題でもないのである。「二重写し」とは、「ある画面の上にも他の画面が重なって浮び出し、次第に鮮明になるにつれて元の画面が消えるもの。」とある。壊れかかった街を眺めていると、それに錯覚が重なりいつの間にか現実である壊れかかった街が消え、錯覚の中にわたしはひきこまれていくのだ。

そんなものが変にわたしの心をそそった。

「そんなもの」とは、花火のことである。普通なら、打ち上がる花火に心を動かされることがあるだろう。しかし、わ

たしが心をそられるのは、打ち上がる前の火のついていない花火なのである。わたしは、人どこか感覚のずれがある。そのずれを自分で自覚しているからこそ、「変に」と付け加えたのではないだろうか。

あのびいどろの味ほどかすかな涼しい味があるものか。

びいどろは、本来食べ物ではないので舐めると味がするとはあまり考えられない。また、「涼しい味」というのも、味覚の表現で涼しいを使うことはまずない。涼しい味とは、ガラスから想像される涼しさやさわやかさを表現しているのではないだろうか。

察しはつくだろうがわたしにはまるで金がなかった。

この一文は特に読者を意識して書かれている。ここでの「まるで」は下に否定的表現をとめない、「まるつきり。全然。」の意味で使われている。この文以降、お金に関する叙述が続いていく。

とはいえ、そんなものを見て少しでも心の動きかけたときのわたし自身をなぐさめるためにはぜいたくということが必要であった。

びいどろや南京玉を見て心を動かされる自分を、わたしはなぐさめようとしている。ここから、安っぽいものにひかれる自分をむなしく思っていると考えられる。一方で、自分をなぐさめるために贅沢をするという安易な考えを持ち、我慢

が出来ないわたしの様子が伝わってくる。

書籍、学生、勘定台、これらは皆借金取りの亡霊のようにわたしには見えるのであった。

書籍を買うにはお金が必要、学生はお金をあまり持っていない、勘定台に行けば、お金を払わなければならない。このようなイメージから現実に見えるこれらを「借金取りの亡霊」と、わたしは思った。

しかしその家が暗くなかったらあんなにもわたしを誘惑するには至らなかったと思う。

この八百屋は、前述の「みすばらしくて美しいもの」である。「あんなにも」から、他の「みすばらしくて美しいもの」より、わたしを引き付ける力が強いことがわかる。

その日わたしはいつになくその店で買い物をした。

「いつになく」から、わたしはこの店でめったに買い物をしないことが分かる。しかし、その日は珍しく買い物をしたのだった。

しじゅうわたしの心を抑え付けていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか緩んできたとみえて、わたしは街の上で非常に幸福であった。

檸檬を握った後のわたしの様子である。檸檬によって不吉な塊の縛りが少し緩んだ。少し緩むだけでも、「街の上で非常

に幸福」といえることから、不吉な塊の力は想像以上に強いと考えられる。

わたしはもう往来を軽やかな興奮に弾んで、一種誇りかな気持ちさえ感じながら、美的装束をして街を闊歩した詩人のことなどを思い浮かべては歩いていた。

不吉な塊から、少し解放され体も心も軽くなった様子が伝わってくる。以前は詩の一節を聞くだけで逃げ出したくなっていたが、今は「街を闊歩した詩人」を思い浮かべる余裕も出てきている。

その重さこそ常々わたしが尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこの重さはすべての善いものすべての美しいものを重量に換算してきた重さであるとか、思い上がった諧謔心からそんなばかげたことを考えてみたり——何がさてわたしは幸福だったのだ。

「あぐむ」は、「ある物事をなしとげられないでいやになる。あぐねる。」という意味である。また、「諧謔」は「面白い気のきいた言葉。おどけ。しゃれ。ユーモア。」である。檸檬の重さは、いつも疑問に思っていたが、どうしたらいいかわからなくなっていたものであった。しかし、今は疑いもせず檸檬の重さは「すべての善いものすべての美しいものを重量に換算してきた重さ」だと考えている。手の平にのせた檸檬は重くもなく、かといって軽くもなくちょうどよい重さなのだろう。その重さを表す表現を、思い上がった自分のユーモ

アからそのように言ったのではないだろうか。しかし、くだらないと感じたわたしは、「ばかげたこと」と書いたのではないだろうか。「――何がさてわたしは幸福だったのだ。」から、後で考えると信じられないくらい幸福感を感じていたことがわかる。

しかしわたしは一冊ずつ抜き出しては見る、そして開けては見るのだが、克明にはぐつてゆく気持ちは更にわいてこない。わたしは歩き回った疲れから、思うように力が入らないと思っていた。しかし、好きだった画本を棚から抜き出して、開けて見ることはできるのだが、こまかく丹念に一ページ一ページはぐる気持ちは少しもわいてこなかった。

しかものろわれたことにまた次の一冊を引き出してくる。

「のろわれたことに」から、自分の意志とは関係なしに画本を引き出している。中を適当にバラバラとみるだけでも関わらず、次々と引き出してきてしまうのである。

一枚一枚に目をさらし終わって後、さてあまりに尋常な周囲を見回すときのあの変にそぐわない気持ちを、わたしは以前に好んで味わっていたものであった。

以前は、一枚一枚にしっかりと目を通していたことが分かる。また、画本から目をはなしてあまりにも普通すぎる周囲を見るときの妙につりあわない気持ち、つまり、かけはなれた二つのものを見る感覚を、以前にわたしは好んでいた。

そして軽く躍り上がる心を制しながら、その城壁の頂に恐る恐る檸檬を据え付けた。

画本で作った「奇怪な幻想的な城」に檸檬を据え付ける場面である。「躍り上がる」は、「勢いよく高いところへとびあがる。喜びや驚きのために、とびはねる。」という意味であり、期待が最高潮に達していることが分かる。その心を抑えながら、檸檬をのせるのである。また、「恐る恐る」から、城が壊れないようにそつとのせる様子が伝わるが、期待とあわせてどうなるか予想できない不安も伝わってくる。

見渡すと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の諧調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンとさえかえっていた。

檸檬の黄色が、画本の乱雑な色彩を自分の身体の中に吸収しているかのように、カーンとはつきりと感じられたのだつた。

その奇妙なたくらみはむしろわたしをぎよつとさせた。

自分のたくらみによって、わたし自身、驚いて動揺している。

わたしは変にくすぐったい気持ちがした。

この城をそのままにして店を出る。このことが、わたしをくすぐったい気持ちにした。この気持ちは、どこかきまりが

悪く、照れくさい気持ちだと考えられる。

丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けてきた奇怪な悪漢がわたしで、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発するのだったらどんなにもしろいだろう。

「丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾」が棒様「爆弾を仕掛けてきた奇怪な悪漢」がわたしである。棒様が、身体に吸収したあの画本の色彩をエネルギーにして、大爆発をする。さまざまな錯覚や想像をしてきたわたしにとつて、今までで最もおもしろい想像だったのではないだろうか。



「そうしたらあの気詰まりな丸善も木っ端みじんだろう。」

「」がついていることから、これはわたしの発言であることがわかる。想像している時に不意に口からもれたのではないだろうか。前述に我慢できない性格と書いたが、わたしは自分の非を認めず病気のせいや、他人のせいになっている節がある。ここでも、自分が変わってしまったがゆえに気詰まりになったにもかかわらず木っ端みじんにしてしまった。

三 考察

(1) 「わたし」の心理と行動について

冒頭の、「えたいの知れない不吉な塊がわたしの心をしじゅう抑え付けていた」にある、「えたいの知れない不吉な塊」とは、「わたし」が抱える死への恐怖ではないかと考える。「わたし」が肺炎カタルや神経衰弱であり、当時の肺結核は不治の病と言われていたため、「わたし」が死への恐怖を常に持っていたためである。人間にとつて、一番怖ろしいのは、やはり死への恐怖ではないだろうか。どんなに自分を喜ばせるものが傍にあったとしても、死の恐怖が常にまわりついていては、喜ぶことも美しいと感じることもできない。

「わたし」が結核であることは、「結果した肺炎カタルや神経衰弱」、「肺炎を悪くして」、また、作者の梶井基次郎本人が結核に冒されていて、梶井の作品に肺病の主人公が多く登場するところから判断できる。

他にも、結核に冒された「わたし」は、みずばらしくて美しいものに惹きつけられているが、これは病人の視点と言えるだろう。精神や肉体の苦痛が絶えない病人は、美しく華やかなものとは無縁であり、それらは刺激が強すぎてかえって耐えられない。自分の慰めになるもので少しでも気を紛らわせようとする。慰めを求める、気を紛らわせようとする、少しの事で気分がめいる、など、病人の心理と言えるのではないだろうか。

そんな「わたし」が、果物屋の檸檬一つで気持ちが変わる。たまたま見つけた檸檬を五感で感じ、幸福な感情が生まれてくるのである。「視覚」では、「レモンエロウの絵の具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色」「丈の詰まった紡錘形の格好」「触覚」では、「握っている手のひらから身内に染み通ってゆくような冷たさ」「檸檬の重さ」「嗅覚」では、「身体や顔には温かい血のほとぼりが昇ってきてなんだか身内に元気が目覚めて来る感覚」を感じ取っている。檸檬を耳で感じるのは難しいため、五感のうちで、「聴覚」がなかったのは納得ができる。「味覚」がなかったのは、「わたし」が檸檬を食べて味わうために買ったわけではなかったからではないだろうか。

病にかかってからは避けるようになっていた丸善に行った「わたし」であったが、檸檬の効果もむなしく、幸福な感情はなくなっていた。やはり、病にかかる前に好きだった所というのは、「わたし」にとって、より「生」を感じさせるところで、「生」を感じると同時に死の恐怖も感じてしまったのではないか。

以前好きだった画本を棚から引き出し、バラバラとめくって積み上げていく。「わたし」は、以前は好んで味わっていた気持ち、再び感じる事ができるのか確かめていたのではないか。そして、「わたし」は以前感じたその気持ちを感じることはできなかった。それは、「……」に表れている。

最後に、「わたし」は自分でも驚くくらゐを思いつく。積み上げた本の上に、持っていた檸檬をのせ、そのまま丸善を

後にしてしまうのである。檸檬を爆弾に喩え、丸善が大爆発してしまうところを想像し、おもしろそうにしている。また、自分がその爆弾を仕掛けた悪漢であることにも喜びを感じている。

「わたし」は、病気になる前好きだった画本を、今ではその時と同じ気持ちで見ることができなくなったと知り、そこでより深く死について感じたのではないだろうか。今の自分は、死の恐怖と共にしか生きられない。以前の自分には戻れない。そう感じ取った「わたし」は以前自分が好きだったものを吹き飛ばして、なかったことにしてしまいたかったのではないだろうか。

(2) みすぼらしさと美しさ

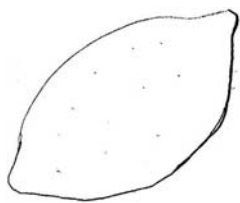
この物語で「わたし」は「なぜだかそのころのわたしはみすぼらしくて美しいものに強くひき付けられたのを覚えてい」と回想している。「みすぼらしくて美しいもの」は、一般的に考えると、矛盾している。「みすぼらしさ」は「美しさ」の正反対に位置する言葉である。そんな「みすぼらしい」けれど「美しいもの」とは一体どういうものなのだろうか。ここでは「風景にしても崩れなかった街」や「親しみのある裏通り」、「趣のある街」が挙げられている。そして「わたし」はそんな街をどこか遠い街だと、わざと錯覚を起こそうとする。「わたし」は現実逃避をしたがっている。みすぼらしい街をパレットとして、その上に想像の絵の具、自分の願う生活をしている自分を写していく。「わたし」にとって、綺麗に整

備されている街よりも、生活感のあふれている、どこかみすぼらしさを感じる街の方が魅力的に感じられ、より想像の絵の具を塗りやすい、美しいパレットとなっていたのではないだろうか。そんな「みすぼらしいからこそその美しさ」を「わたし」は感じていたのではないだろうか。

(3) 「わたし」が惹かれたもの

この物語の後半で「わたし」は昔好きだった丸善に入り、積み上げた画本の上に檸檬を置き、店を後にする。この場面で、似た意味の言葉が、頻繁に出てきている。それが「奇怪」「奇妙」「奇体」という言葉である。「わたし」自身がつくりあげた「奇怪な幻想的な城」に檸檬を置き、上出来だと思えるものが完成した。その後、第二のアイディアが起こり、その「奇妙なたくらみ」に自分自身がぎよつとさせられる。そして店を出た後、「奇怪な悪漢のわたしが仕掛けた爆弾が大爆発するのだったらどんなにおもしろいか」と「わたし」はこの想像を熱心に追求している。さらに最後「看板画が奇体な趣で街を彩っている京極を下って」いき、物語は幕を閉じている。また、「変に」という言葉もこの場面の中で「変に緊張」、「変にくすぐったい気持ち」と多用されている。最後の二十行ほどの中でこれらの「奇怪」や「変に」といった「普通ではない、異様な」という意味が含まれる言葉が頻出している。そしてこれらの言葉はマイナスに使われているのではなく、むしろその言葉をつけているものに「わたし」は惹かれていた。その言葉をプラスにとらえているように感じる。(ここ)に、

「みすぼらしい美しさ」の他に、「わたし」が強く惹かれたものの特徴があらわれているのではないか。



おわりに

大河 隼也、神田 達也

教育実習の準備や他の授業の発表などと時期が重なったグループもあり、苦勞していたところも多かったが、各グループで分担したり、助け合ったり、協力し合ったりして完成させることができた。また発表を通して意見交換などを行ったが、多様な読み方が発表の場で新たに生まれ、そのどれもが面白く、間違いではないと思われたため、出た意見をまとめるという作業もなかなか苦勞した。

苦勞しただけ、研究や発表を通して得たものもあった。小学校や中学校、高等学校で取り扱う教材を一文ずつ解釈していくという活動によって、それらの物語の主題や教材を通じて学ぶことができることを明確にすることができた。結果その教材で授業をする際に注意すべき点や授業の方向性はつきりし、自分が授業をしている姿をはつきり想像することができるようになった。このように今回の経験を通して教材研究が授業実践をするために大切なものであるということを改めて実感した。

発表と意見交換の場では先に述べたようにいろいろな読み方をそれぞれのグループが再発見することができた。少人数の教材研究ではどうしても読解に限りができてしまうということも実感し、教材研究を発表するという活動が大切であるということも知ることができた。

本書の教材研究が私たち作成者にとって有意義なものであったことは以上述べたとおりである。本書を手にとっていただいた方々にも、何かしら役に立つことがあれば幸いである。

最後に本書の発案者でもあり、全ての研究を監修してくださった寺田守先生に感謝の意を捧げたい。



執筆者

寺田守	田中理絵	武村薫博	高室慶助	角知希	須原旬生	佐藤茉奈美	小西大地	小石川ゆき	神田達也	金森明日香	角張綾葉	小倉歩	奥田晴香	岡林瑞穂	大河隼也	稲垣大輔	浅野裕理
和田詠理子	四方田育恵	山本充	山本舞	山田智恵	安場智恵	安友郡詞	森本弥徳	森川みど梨	靱山小奈津	三輪美海	松原綾子	堀内厚志	平井恵理子	原田泰輝	中西絵理子	徳原唯	

文学教材の解釈（電子版）

編著 寺田 守

発行 二〇一一年三月一日 初版 発行

発行者 寺田 守

発行所 京都教育大学国語教育研究会

〒六一二―八五二二 京都市伏見区深草藤森町一

京都教育大学教育学部 寺田守研究室

電話 〇七五―六四四―八二三五

メール mterada@kyokyo-u.ac.jp

ISBN978-4-9905589-1-8 C3037